

奴隸蛮行——そのメイド、特殊につき。

紙谷米英

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

負の遺産たる奴隸制度の生き残った、現代のイギリス。陸軍特殊部隊・SASの本拠地を擁するヘリフォードの街の平凡な昼下がりに、奴隸を誘拐する密売人の魔の手が忍び寄っていた。だが、悪漢の手は自らの手に余るメイドに触れてしまい……。本編の幕間で秘密裏に処理されていた、ちよつと変わったメイドさんによる小さな冒険譚。

※本作は拙作『奴隸邂逅』の番外短編となつております。

<https://syosetu.org/novel/1497>

89 /

【登場人物】

ブリジット（Bridget）

西暦一九九一年九月十五日生まれとされる、混血イギリス人の性奴隸。血液型はA型。

稀有な学習能力を有する、歳と不相応にひどく冷静かつ現実的な美少女。

身長一五九・七センチメートル、体重五七・二キログラム、スリーサイズB85W58H83の、少し着痩せするCカップ（英國基準）。髪は灰色の強いくすんだブロンドで、肩甲骨下部より先まで伸びており、いささか癖つ毛が目立つ。瞳は冷たいグレー混じりの碧眼。軍人一家・クラプトン家の次男に仕えている。

リタ——籠城事件に巻き込まれた性奴隸の少女。資産家・バラス家

で愛娘同然に暮らす。

ジム・カヴィル——奴隸誘拐犯の首領。黒髪の巻き毛

ジエイソン・マツキニー——誘拐犯の運転手。肥満気味

ルーカス・ダウダル——誘拐犯。協調性皆無

バニー・スプリング——誘拐犯。そばかすにきび面で神経質かつ

好戦的

バイロン・ラスキン——誘拐犯の最年少。十九歳

アンブローズ・バグウェル——ヘリフォード警察巡査部長

リチャード・クラプトン——英陸軍特殊空挺部隊（SAS）少佐

ニーナ——リチャード専属メイド

ヴエスト——クラプトン家の長男

ダニエル・パーソンズ——SAS伍長

目次

奴隸	奴隸蛮行	[1—1]
奴隸蛮行	奴隸蛮行	[1—2]
[5—3]	[5—2]	
[5—2]	[4—1]	
[4—2]	[3—5]	
[3—4]	[3—3]	
[3—2]	[3—1]	
[2—8]	[2—7]	
[2—6]	[2—5]	
[2—4]	[2—3]	
[2—2]	[2—1]	
[1—4]	[1—3]	
[1—5]	[1—5]	
[1—2]	[1—1]	

奴隸迎合	$[5 4]$
奴隸蠻行	$[6 2]$
奴隸迎合	$[6 3]$
奴隸蠻行	$[6 4]$
奴隸蠻行	$[6 5]$
奴隸蠻行	$[6 6]$
奴隸蠻行	$[6 7]$
奴隸蠻行	$[6 8]$
奴隸蠻行	$[7 1]$
奴隸蠻行	$[7 2]$
奴隸蠻行	$[7 3]$
奴隸蠻行	$[7 4]$
奴隸蠻行	$[7 5]$
奴隸蠻行	$[7 6]$
奴隸蠻行	$[9 1]$
奴隸蠻行	$[9 2]$
奴隸蠻行	$[9 3]$
奴隸蠻行	$[1 0 1]$
奴隸蠻行	$[1 0 2]$
奴隸蠻行	$[1 1 1]$
奴隸蠻行	$[1 2]$
奴隸蠻行	$[1 3]$
奴隸蠻行	$[1 4]$

159 154 147 144 136 130 124 121 119 117 114 112 110 108 106 104 100 98 96 93 90 88 85 83 80

奴隸蛮行【1——1】

【1】

不運という事象は、往々にして理不尽な来訪者である。空港のトランジットで荷物を紛失される。海外出張中に、祖国がクーデターが勃発する。たまたま私用で訪れた公共施設で自爆テロが発生……と、現世の不幸は枚挙に暇がない。

昼飯時前のイングランド西部を、柔らかな日差しが包んでいた。外国人の多くは、イギリスという国を誤解している。ロンドンがあたかもイギリスの首都であるという、ひどい思い違いがまかり通っている。幻想の錐を払えば、ロンドンはブリテン島の首都ではなく、観光客と投資家を標的とした狩り場でしかない事実が露呈する。この陰湿なはりぼてをユーモアと捉えられる者こそを、大英帝国は歓迎する。イングランド内陸部に位置し、ウェールズ国境と接する州——ヘリフォード・シャーは、そんなイギリスの偽りない姿を垣間見るのに相応しい場所と言えよう。

手付かずの自然と、広大な農地、牧草地帯を突つ切るように、片側一車線の自動車道が走っていた。往来のまばらな自動車道の傍らにはぽつんと建つガソリンスタンドに、薄汚れた黒のパネルバンが駐まつた。いびつなへこみをこさえた後部ドアがスライドし、二十代前半らしき男ふたりが降りる。片方がバンの埃を被つた給油口を開き、スタンドに備え付けられたセルフ式の給油ノズルを握った。もう一方は、並みならぬ緊張の浮かぶ面持ちで、せせこましい売店へと足早に向かつた。車内には三人の男が残り、落ち着きなく眼を泳がせている。如何にも自信なげで不審者然とした様子だが、ここで警官の職務質問を受けければ、その理由もおのずと知れるだろう。

男らは皆、とある陳腐でよこしまな目論見に衝き動かされていた。服装は一様に、擦り切れたジーンズを履き、上着はくたびれたフードやデニムのジャケットである。平日昼間に定職にも就かず、じめじめと締まりのない面構えは、世間から落伍した若者像を体現していた。

売店のガラス戸が開き、先のろくでなし一号がビニール袋を両手に現れた。男は往路と同様に小走りでバンへ戻ると、手にした袋を後部座席に放つた。各々が袋へ我先にと群がり、調達されたの菓子やブリスター・パックの惣菜を食い散らかし始めた。車内に充満するすえた体臭に、チョコレートと植物油のそれが添加される。給油が終わるや、働き詰めのエンジンが再始動し、そこに古い機械油と、手入れされていない空調の排気までもが加わった。きしむ車軸に悲鳴を上げさせつつ、バンはガソリンスタンドを後にした。

陽の高いA49国道を北上する五人組は風体に違わず、ろくでなしの類であつた。大学に行かず、幼少より軽犯罪を繰り返しては、幾度も留置所に叩き込まれてきた。先天的な遺伝子異常を除けば、こうした若者が増加する要因は、劣悪な家庭環境に帰すとする資料も少なくないが、その親も同様の家庭環境に身を置かれていたというのは、想像に難くない。極めて広範な目で見れば、悪童誕生のメカニズムは、親族間の連绵たる遺伝子の欠陥とも受け取れる。地上に生を受けた時点では、個人の生の設計図は、その大半が完成してしまつているのが現実である。であるが、望まずして被害者の認定を受けた彼らへ、労働者の憐憫が寄せられる道理もない。資本主義や共産主義、果ては破綻国家の第三世界といった不能の共同体でさえ、この理は適用される。学歴と資格のないまま劣等感にいじけて社会に自身をねじ込めなかつた者の末路が、このスクランブル寸前のパネルバンにたむろしていた。

社会の爪弾き者の筆頭——助手席で腕を組む二六歳のジム・カヴィルは両の眼が異様に小さく、その頭に黒い巻き毛が不潔に絡み合っている。歯茎の痩せ衰えたすきつ歯は、噛み煙草で色素沈着を起こしていた。手指の爪は伸びっぱなしで、何本かが不揃いに欠けている。

カヴィルは菓子の油に汚れた指でグローブボックスを開き、道路地図を取り出した。皺だらけの地図には赤い印が点々と記入されており、それが商業地区に集中している。カヴィルは道案内するでもなく、バンを運転する相棒——ジエイソン・マツキニーの膝へ地図を放り、頭上の日除けを下ろした。マツキニーは首領の横暴を、右の眉を

僅かに下げるだけでいなし、肩の脂肪に食い込んだシートベルトの具合を直した。巡回警官の停止命令を警戒して、シートベルトを装着しているのは、この車内にマツキニーひとりだけだつた。

車内は張り詰めた空気が充満し、乱れた呼気と、後部座席の一人——ルーカス・ダウダルの、ガムを咀嚼する音が不快指数を跳ね上げていた。ねちっこい水音に第四のろくでなし——バニー・スプリングが舌打ちを発すものの、音の主は我関せずとサイドウインドウに頭を預けている。無言の抗議に、スプリングの貧乏搖すりが始まった。不快な音と震動、それらを生み出す二人に挟まれ、後部座席中央の最年少——バイロン・ラスキンは苦悶に眉間に歪めて爪を噛んだ。

バンは淀んだワイ川を越え、窓外を流れる平坦な田園風景が、都必然会となりきれない灰色の街並みへ変じてゆく。右手には、この近辺では数少ない観光資源、ヘリフォード大聖堂がちんまりと佇んでいる。不心得者の代表、カヴィルの苔色の瞳が、コンソールのデジタル表示を睨んだ。時計のセグメント数字の真ん中で、コロンの点滅が規則正しく秒を刻む。間もなくAMの表示がPMに切り替わり、画面にゼロが三つ並ぶ。カヴィルの瞳に、貪欲な暗光が宿つた。ここからの一時間が、彼らにとつての勝負時であつた。

奴隸蛮行【1—2】

正午のイギリスはヘリフォード市街。英國らしからぬ、うららかな春の陽光の下を、日用品の買い出しへ赴く女性がまばらに歩む。大半はいわゆる主婦層であるが、彼女らと距離を取つて日陰者に徹する存在があつた。『それら』はみすぼらしい身なりもいれば、それなりのお仕着せを与えられた個体も確認される。世間一般が認知するところの、メイド装束も珍しくない。二一世紀にもなつて時代錯誤も甚だしい一種の忌むべき慣習が、ここイギリス連邦に根深く残つてゐる。

彼女らは単なる使用人ではない。職務をあてがわれた施設を清掃し、雇用主の面倒を見、時として彼らの下卑た欲望を満たすためにその操を穢される持たざる者。それこそが現代イギリス連邦の暗部が一端、奴隸である。

現代イギリスにおける奴隸は、その大半が奴隸を商品とする民間企業によつて売買されている。奴隸企業は、商品となる奴隸を複数のルートから調達する。極貧家庭の親が口減らしに娘を売り飛ばす例は多く、また、生活苦から自身を企業に身請けさせるケースもある。地下で奴隸企業と繋がりを持つ悪辣な孤児院や協会の存在も確認されており、奴隸関連の汚職や生臭坊主が新聞の一面を飾る事も珍しくない。メディアの執拗な口撃にもかかわらず、英連邦の奴隸史は綴られ続ける。こうした犯罪の温床と化した業界は、SNS上で誰が言い出したか、昨今では「女王のスラム街」などと蔑称されていた。

如何なる形であれ、身を売られた奴隸はそれまでの経歴や個人情報を社会的に抹消される。履歴によつては、一般的斡旋企業を介して調理人や清掃員として派遣される事例もある。が、大概是全ての自由を剥奪された上で、型落ちした家電製品の如く買い叩かれ、使い潰される。

古来より紛争の絶えない地球において、自国の戦火を逃れようとして、不法入国を働く難民は常に存在する。正当な手続を経ていない難民は、現地政府により母国へ強制送還され、時として虐殺の対象となるのが常であつた。

それが一転して、近現代の彼らには欧洲在留が認可されている。新商品の衣類を支給され、十分な食事を与えられ、所持品を検められ、専門機関に身元を洗われ、貨物船に鎖で繋がれ……そうして数日中にフランスのカレーからドーバー海峡を渡り、ブリテン島へと搬入される。各国が混迷を極める難民政策に、イギリスはその並外れたユーモアで一条の光を紡いだ。難民を自称する侵略者を自国の利益に交換するシステムが一朝一夕で構築され、欧洲への難民流入は激減した。手土産もなしに保護を要求するだけの難民が、無限大の経済効果を生む商品へと変じたのである。植民地は広大な奴隸牧場としての機能を付与され、後進国での誘拐ビジネスを欧洲諸国は公明に支援していた。

二十世紀後半になると、この奴隸事業も翳《かげ》りを見せる。情報インフラの拡充により公民権運動が興り、ソ連の崩壊で植民地の独立に歯止めを掛ける存在は失われた。奴隸制も世論の熾烈なバッシングを逃れられず、長い歴史に幕を閉じた。表向には。

現在、奴隸制を公認する国家はイギリスただ一国であるが、そのビジネスモデルは有史以来不变である。東欧ではネオナチが若い娼婦を拉致してマフィアに引き渡し、手数料を稼いでいる。トルコへの不法入国に失敗した青年は、炭鉱夫としてアフリカで高く売れる。出自身的全てを剥奪された彼らは、今日も労災なき苦役を命綱なく強いられ、腹のせり出した館主の陵辱に瞳を曇らせる。倫理の問題ではない。人間は家畜への依存なしには生き長らえないのだから。

ここ、ウエールズにほど近いヘリフォードの街も例に漏れず、快い日差しを受ける奴隸らの表情には影が落ちている。商業施設のウインドウを磨く少年が、磨き粉で荒れた手の痛みに顔を歪める。一ペニーの駄賃もなしに家を出された少女は、ぼろ切れ同然のお仕着せを縫う端切れさえ買えない。灰色の街に、灰色の労働力が、行き場なく漂っていた。

そんな奴隸の中で、異彩を放つ存在があつた。横断歩道で歩行者信号の切り替わりを待つ集団に混じる彼女は、あらゆる面で他の奴隸、ひいては女性と異なっていた。信号を無視して車道へ駆け出す人々

なぞ何処吹く風、律儀に青信号の点灯を待機した彼女は、毅然とした足取りで革ブーツの踵をアスファルトに響かせ、二階建ての大手商業施設へマークス＆スペンサーの自動ドアをくぐる。必需品を記したメモを手にする少女は、実用性を重視したブラウンのメイド服に身を包み、くすんだブロンドの頭上に控えめなホワイトブリム（メイド用の力チューシャ）が揺れる。身の丈は高からず、背中でよじれなく交差するシルクのエプロンと、それに劣らず無垢な肌が眩しい。着衣の上からでも窺える、すつきりした身体のラインは、老舗の工芸品と見紛うばかりだ。美貌に五月蠅い自称英國紳士が、雁首がんくびを揃えて情欲を催す美貌が、さも当然と備わっている。何処か眠たげな碧眼は何か考えに耽つているのか、見る者を妖しげな印象に惑わせる。少々のあどけなさが残る化粧つ気ない面持ちも、果たしてそれが本性かも定かない。

欲求不満を隠せない主婦、勤労意欲の片鱗もない移民の店員、不景氣に曇る奴隸で満ちた店舗一階を、そのメイドはのどかな微笑みで悠々歩み、店内備え付けの樹脂籠を脇に抱えた。指先につまんだメモに従い、目当ての商品を機械的に籠へと収めていく。頻繁にこの店を利用しているらしく、経路の選択にも迷いがない。ショッピングカートも使わず、商品の溢れる籠を苦ともしない辺りに、いささか人間離れした氣味悪ささえあつた。線が細いくせして自信に満ち、それを裏打ちする実力が瞳の奥底に覗き見える。気が抜けている様で、他に抜きん出て垢抜けて狡猾な演技派。はばかりなく言つてしまえば、同性から倦厭されるきらいがあつた。極めて打算的な一面を覗かせるも、誰も容易には咬み付けないこの奴隸。その名を、ブリジットという。

奴隸蛮行【1—3】

ものの数分でメモの品目の大半を揃えたブリジットは、最後に酒類の棚へ向かった。抱える籠は、ジャガイモを始めとする農作物、肉、牛乳といった食材で満たされている。その上には、体格ばかり立派でいたずらに気を揉みがちな雇い主を慮り、大量のチヨコレートが積み重なる。

目的の陳列棚に到達すると、ブリジットは手始めに黒塗りの「ベイリーズ」の壇を取り上げた。続いてカクテル作りに定番の「アンゴスチュラ・ビターズ」の小壇を薬指で絡め取り、その手で自分のお気に入り——悪女の唇と見紛う紅が扇情的な「ピムス」をさらう。リキュール（混成酒）の補給を終えた時点で、買い物籠の重量は十五キロに迫つたが、ブリジットはよろめく素振りもなく、ウイスキーの陳列棚へとスカートの裾を翻した。

木目プリントのシートを敷かれた什器には、多様な色形のボトルが店内照明に輝いていた。ブリジットは指差しを伴つて、什器の最上段からウイスキーの品定めに掛かる。十八年ものの「タリスカー」や「マッカラーン」といった高級品は、本日の補給リストに列席されていない。彼女の要求はもつと庶民価格で、角張つた壇を採用している。一つ下の段では桁数が落ち着くものの、いきさかブルジョア感が抜けきらず、凄まじく癖の強い「ラフロイグ」を私費で購入する程、彼女の主人は醉狂でもなかつた。更に下の三段目に至ると、ようやくで日頃嗜むのに躊躇わない面々が並ぶ。ブリジットは穏やかな鼻歌を発し、飴色の液体に満たされた容器群を検めた。右端の値札から順に、視線と人差し指が楽しげなステップを踏む。この三段目にこそ、彼女の主人のお気に入りが陳列されているのだ。

——あのはね、「ボウモア」じゃないの、ごめんなさい。お隣の、「デュワーズ」さんも、お呼びでない。「シーバス・リーガル」違うちがう。「ジョニー・ウォーカー」無難すぎ。良い線いつてる「バランタイン」。でもでもやっぱり、あのは——

即興の小恥ずかしい歌詞を乗せた『英^{ブリティッシュ}国^{・グレナディアーズ}擲彈兵』の鼻歌が、は

たと止んだ。流麗な指遣いが凍り付き、碧眼を縁取る長い睫毛が伏せられる。彼女の指差す先には、およそ壇一本分の隙間が棚の奥まで続いていた。愛らしい使用人の目尻から、微笑みが失せる。ブリジットは鼻歌と指差しを仕切り直し、三段目の残りと更に下の段までを舐ねぶる様に走査した。

——いいえ、よくある間違い、きつとそう。だつて、〈ジェムソン〉あるじゃない。〈パワーズ〉、〈キルベガン〉、〈タラモア・デュー〉。待つて、誰かを忘れてる。ほらほら、そこにはアイルランドの——

震える指が行き着いた先、最下段の左端に居座っていたのは、家計に優しい〈カナディアン・クラブ〉であつた。硬直するブリジットを余所に、昼休み中の建築作業着の男が、脇からひよいとその壇を取り上げる。男はそれからブリジットの容姿を二度見し、名残惜しげに会計の列へ消えていった。当のブリジットは、他人の当て所ない劣情になど構つている場合ではなかつた。その心は目下、奈落の底に落ちてゆきつつあつたのだ。

奴隸蛮行【1—4】

メイドの桜色の唇は固く結ばれ、その美貌から一切の感情が失せていた。再度、陳列品を瞬きも忘れて精査するものの、むべなるかな、そこに彼女の求むボトルは存在しなかつた。

琥珀色の蒸留酒、ウイスキーはその産地で五種に大別される。軽い口当たりのカナディアン。緻密な風味のジャパニーズ。移民が新天地に確立したアメリカン。スマーキーな最大派閥のスコッチ。そして、ウイスキー発祥の地が誇るアイリッシュ。このアイリッシュ・ウイスキーのブランドが一つ、『ブツシユミルズ』の『ブラックブツシユ』こそが、ブリジットの主人のお気に入りであった。

ブリジットは佇まいを正すと、店員に在庫を尋ねようと周囲を見回した。ひよつとすると、切らしているのは店頭在庫だけやもしれない。倉庫の備蓄を一縷の望みに、背後で割り材の補充に勤しむ店員へ声を掛けようとした。が、その背中へ声帯を震わせる寸前、ブリジットは考えを改めた。そして初めからそうする予定であつた様に、ごく自然な所作で酒類の棚を後にした。先の店員を、ブリジットは一瞥だけで評価・分析していた。四十を半ば過ぎた女の左手に指輪はなく、曲がった背中には哀愁より意地の悪さが現れていた。肥えた上半身は胸と腹の境目をなくし、ただただでかい臀部がジーンズの生地を虐めている。その内面は容貌へ具に現れており、引きつった表情筋に他人を慮る余地はない。美貌でいえば明白に醜い容姿を、ジエルネイルや雑多な宝飾品で悪目立ちさせている。ブリジットの主人をして「頭お姫様勘違い売れ残りおばさん」と評されるこの手合いは、心の奥底では自身の見てくれが秀でていない現実を自覚している。彼女らは余りに必然な事実を認め難い為に、僅かでも容姿の優れた他者を妬み、嫉み、そして排斥に躍起になる。馬鹿げていると一蹴する前に、ほんの少し思い返してみよう。多くのヒトの雄が、成人後も男根で物事を考える悪癖を断てない様に、彼女らも女性ホルモンに脳が踊らされているだけの雌なのだと。そこに奴隸という階級が添加されれば、彼の優劣をかざして悪意をぶつけられるのは必死である。英國の靈

長類社会は、かくも無益と不都合に満ちていた。

無用の敵意を回避してから一分で、ブリジットは目的に適った女性店員を発見した。長身で、栗色の髪をボニー・テイルにまとめた二十代前半。ブルージーンズの尻がぷりぷり艶めかしい、男好きのする容姿である。

「失礼致します。ウイスキーの在庫は、出ている限りでしようか？」

腰低く切り出された声に店員は営業スマイルで振り返り、そして呆気にとられた。問い合わせてきた奴隸はあたかもフランス人形の様で、落ち着きある声音は厳かでありながら、快い親しみが滲んでいる。襟に控えめなジャボット（胸襟に着ける、三角形の布飾り）を着けている点から、淑女教育に励む令嬢とさえ見紛い、高貴たる威厳に気圧された。「わ、可愛い！」。空白の一秒間から我に返ると、店員は申し訳なさげに眉を下げた。

「ええ、そうなの、ごめんなさいね。明日には補充されると思うんだけど……」

店員はもう一度謝罪の言葉を重ね、ブリジットは手間を取らせた謝意を述べてその場を去つた。背中に掛けられた、店員の「頑張つてね」の声に、メイドは微笑み手を振る。だが店員の視界から外れると、その面持ちは急転した。蒼い瞳孔は強か収縮し、ガラス玉の如く、がらんどうに霸氣を欠く。傍目には知れないが、彼女の背中を一筋の滴が伝つた。

ブリジットがここまで狼狽するのには、確固たる理由があった。英國の常識的に、奴隸の待遇は悲惨を極める。雇用形態は文字通りの全権を握る主人に委ねられており、難民以下の暮らしを強いられる者もざらである。奴隸を端から消耗品と捉える事業主も多く、肉体的な懲罰行為が一線を越えて殺人へ発展する例は、銀河系の数だけある。この場合は通常の殺人罪ではなく、英國の資産に対する器物損壊、及び奴隸販売企業への弁済金といった罪状が適用される。悪辣な主人に手綱を握られた奴隸に、その機嫌を損ねるタブーは許されない。

というのが、現代英國の常識である。であるのだが、目下のブリジットの焦燥は、雇用主からの懲罰に帰依するものではなかつた。確

かに、彼女の主人には世の一般男性より拘りの強いきらいがある。

ジーンズを窮屈と言つて絶対に履かず、高慢ちきに聞こえるロンドン訛りを嫌つて、アメリカ英語に近い発音を好む。そのくせ、余りにストレートな物言いは下品と、曖昧模糊なやり取りで他者をしばしば混乱させる。執着は酒類にも及んでおり、マティニーにオリーブの実を沈めず、使用するジンは「ボンベイ・サファイア」と規定している。平时に飲むウイスキーは前述のブラックブッシュであり、地下蔵の奥に仕舞い込んだ「レッドブレスト」の十二年は、特別な機会にのみ自身に開栓を許す徹底振りとされている。とはいっても、この男とて一日くらい好きな酒がないだけで拗ねる器ではない。軍人という職業柄、手の内のカードで事を済ませる習慣も染み付いており、自意識とは反する柔軟性も兼ね備えている。かくて加えて、彼の者は夕餉の酒などなくとも、愛しい伴侣との睦言で十二分に至福を噛み締めるのだ。些事に他人を巻き込んで激昂するのは、股間だけが肥大した幼子に他ならぬ。

——にもかかわらず、それを良しとしないのが、航空会社の重量規定より厳格と定評ある家事使用人、ブリジットの矜持である。「それでも私はメイドさん。一点の妥協の余地もあつてはいけないの」。彼女の内には天使も悪魔も存在しない。そこには唯一、無欠を信条とするメイドが控えるばかりである。

奴隸蛮行【1—5】

山盛りの必需品で膨れたトートバッグを両肩に提げ、ブリジットはマークス＆スペンサーを後にした。降り注ぐ陽光が方々の窓ガラスに反射しており、昼の折り返しを告げている。奴隸でごつた返していった街路は、今は幼稚園児を連れた母親らに占拠されている。狭隘な歩道を、中背の母親と五歳くらいの男児が横並びに歩いていた。にわかに男の子が掛けだし、母親から十メートル離れたところで立ち止まる。子供が無邪気に振り返ると、母親はちゃんとそこで我が子を見守っている。「ちゃんと前を見なさい」。特筆に値しない、市井の一幕。誰の記憶にも残らないその光景を、ブリジットだけは心のスクラップ帳に貼り付けていた。

ヒトのDNA構造を解明するまでもなく、子供の可愛い盛りと恭順性は共生し得ない。赤子が持つ原石の純粹さは美しい。だが同時に、穢れなき無知は己の破滅をも容易に招く。赤子はこの世に生を受けた時、母親の羊水の加護を失つたその時から、真っ白な存在ではいられなくなる。透き通つた心は自らの生存本能と好奇心に弄くられ、無垢な輝きを失う。あたかもそれが人間へ至る通過儀礼である様に、無条件に受け入れるべき行いである様に、社会は「成長」「進化」の単語で賞美する。子供という未知のハードウェアへ思慮なく突っ込んだアップデートが、いつか種にとって致命的なエラーを引き起こすとも疑わず。かくして、特定の世代を蝕むシステム障害が頻発する。國家は民への損害補償も有耶無耶に、エラーは社会の外から持ち込まれたウイルスに起因しており、ウイルスの感染源は各自の家庭環境にあると、トカゲの尻尾を切り続ける。もう胴体すら残つていないというのに。

理想の未来をあつらえてやれなかつたと悔い、母親は切に願う。もし許されるなら、我が子には何者の束縛もない自然の中で泥まみれになつてほしい。幼い内にしか触れ得ぬ、生の感動に身を委ねてほしい。どうか、この子が最期まで健やかであります様に、と。創造主がヒトに与えたもうた時間は、ほんの一瞬でしかない。今日、親が当然

に持つ最たる願望は、ヒトの皮を被つた狂犬に食い散らかされる。純粹な赤子は外界の濁《よど》んだ悪意に染まり、靈長類の頂から四つ足の獣へ堕落する。母親は下賤な穢れを最小限に留めんと、不本意ながら我が子を透明なリードに繋ぐ。親心を解きぬ子供の糾弾を堪え忍び、尚も自らの辛苦を悟らせまいと神経をすり減らす。それこそ、ひとえに無償の愛のみが為せる業である。

束の間、ブリジットは件の母子を物思いに眺め、自身の下腹部に触れた。その唇は固く結ばれ、睫毛が伏せられる。齡十九のブリジットには、月經がない。かつては規則的な周期が訪れていたが、十五歳で身を売られた心的外傷が原因で彼女は一切の記憶を失い、子宮の活動が停止した。自分を災厄へ陥れた仇も知れず、強制労働と恥辱に三年間の女盛りをむしり取られたのだ。『振り籠から墓場まで』と、労働党が社会福祉の充実を謳つたイギリスはその実、少女から市民の階級のみならず、^{おとなげ}女性さえも奪掠していた。

大人が大人気を亡くした現代には、こうした少年少女は英連邦全土に溢れていた。真つ当な親の庇護なく、商品として値札を貼られた奴隸が犯罪に手を染める事例は後を絶たない。そもそも、奴隸事業そのものに違法が横行しているのだから、この傾向は自明であろう。彼らは童心に吸収した術を、満を持して行使しているに過ぎない。アメリカの大半の州と異なり、英國の法執行機関は自国民へ容易に銃を抜かない。だが、社会の害虫と見なされた奴隸に対する引き鉄は極めて軽い。

ブリジットが目蓋を開くと、既に母子の姿は消えていた。小さな吐息を漏らすと、メイドは荷を持ち直して歩き出す。人の生には、ままたならない事も多い。それが、世間に奴隸の烙印を押されていては尚更である。少しばかり冷えた彼女の心に、春の陽気が差し込む。母親となる未来が絶望的なのは変えられない。だが今のブリジットには、そちらのくそ餓鬼よつか手を焼かれる主人に、奉仕する責務があった。庶民的な妻としての幸福は得られずとも、彼女はそれ以上の体験を、前向きに見出している。氣落ちした面構え拭い、メイドは人気^{ひとけ}のない住宅街を進んだ。全ては、主人にとつて完璧な使用人であるが

為
に。
。

奴隸蛮行【2—1】

【2】

一二三五時のヘリフオードを、一陣の突風が吹き抜ける。突如、市街上空に木星じみた積乱雲が発生していた。それは周囲の水分を奔放に吸収し、終末を予期させる影を地上に落としていた。降り注ぐ陽光は分厚い迎撃網に阻まれ、天使の梯子さえ垣間見えない。街を彩る春模様に、終止符が打たれた。

水蒸気の天幕が天候の主導を握つて間もなく、下剤を投与された胃腸の如き唸りが、ブリテン島に響き渡る。雷鳴に貴重な洗濯日和の死を察した主婦が、方々で洗濯物の取り込みに躍起になつた。軍人街の妻たちは、子供と自分の下着を最優先で保護すると、まだ空模様に気付かぬ近隣住民へ警報を発して回つた。呑気に庭で寝転ぶ飼い犬を屋根の下に匿い、花木のプランターを風除けで覆つた。木々からけたたましく鳥の群れが飛び立ち、野良猫が路地裏へと駆けてゆく。一転してゴーストタウンと変じた住宅街を、黒のフォード・トランジットが道に迷つた様に右往左往していた。

型落ちしたトランジットはシャシーにガタが来ており、ステアリング操作ひとつで金属摩擦に喘いだ。劣化したタイヤはグリップが利かず、角を曲がる度に尻が激しく振れる。尻が大変なのは、車内でも同様であつた。ろくでなしの首謀、バンの助手席に座すジム・カヴィルは物理的な据わりの悪さから、運転手のジェイソン・マツキニーを見んだ。その実、マツキニーはおんぼろ車輛が残す最大性能を引き出していくので、むしろ勲章に値する働きを見せていたのに。

「こいつは好都合だな」

とうに味のなくなつたガムを悠々と咀嚼しながら、ルーカス・ダウダルは後部座席から陰気な無人街を眺めていた。

「なあにが好都合なもんか。最悪だぜ」

対するバニー・スプリングが、頬のにきびを潰して悪態をつく。ダウダルとスプリングの間に押し込まれたバイロン・ラスキンは黙りこくり、心身共に縮こまつっていた。後席の三人に比べれば、前席の二

人の尻はずつと健康であった。ヘリフォード市街に入るまで、後席の三人は座席の庇護にあやかっていた。その座席は今や取り払われており、三人の尻は鋼が剥き出しの床に直に触れていた。タイヤが小石を踏み付けると、衝撃が三人の臀部を痛撃した。小柄で肉付きの悪いラスキンは、年増車輻との延々たる騎乗位で神経が摩耗していた。彼らの防護をになっていた後部座席は丸ごと外されて、後部荷室の角へ転がされていた。一人の、奴隸の少女と一緒に。

スプリングはにきびの汁を拭うついでに、奴隸の肩を小突いた。少女は鞭で打たれた様に身をすくませると、激流に打ち上げられた川魚の如く身悶えた。頭に目の粗い麻袋が被せられており、ブロンドの髪の先端が覗いている。手足を後ろに拘束されており、白い肌に麻縄が深く噛み付いていた。ブラウンを基調とした上質なお仕着せから、傍目にも少女が高級性奴隸であると窺えた。

「こいつは確かに売り物になる。だけど、たつたの一人じゃ割に合わねえだろ」

スプリングの苦言に、ルームミラーを介したマツキニーが加担する。

「少なくとも、俺らの人数と同じだけは攫わないとな」

マツキニーの発した動詞に、少女が取り乱して喘ぎ、トランジットのリアゲートを蹴り始める。スプリングが暴れる奴隸を引き寄せると、麻袋の側頭部の辺りを拳で打ち据えた。少女は殴り飛ばされても尚、気丈に身をくねらせ、不自由な口で罵りを結ぼうとした。

パネルバンを駆る、社会の落伍者が五人。まともな手段で食い扶持を稼ぐ当然に迎合出来ず、多数派から爪弾かれた無知な愚者。同種と利害観の一致した彼らが行き着き、即席で実行に移した暗い思惑……それが高級奴隸の誘拐、及び密売であった。奴隸を人質に、その雇用主から身代金を取るのは、警察の捜査が介入するリスクが高い。仕入れた商品を早々に換金する方が、ずっと足が着きづらい。裏社会の業者との取引で利益が減じるとしても、五人が五年働くよりずっと高額の現金が転がり込むだろう。ともかく、五人を統率するカヴィル当人は、それが最善と信じていた。

「あんまり商品に傷を付けるな。そいつには高値が付く」

頭目カヴィルの無感な口振りに、スプリングが歯を剥いた。

「（）高説ども。じゃあ教えてくれよ、このくそ天氣でどうしろつて？ 奴隸どころか女ひとり、何処にも残つちやいねえ！ みーんな屋根の下だからな！」

スプリングは大仰な手振りがラスキンのこめかみを小突いた事への謝罪もなしに、そのまま助手席のヘッドレストに腕を回した。「なあカヴィルさんや、教えてくれよ。あなたの賢い計画とやらをさあ？」

助手席が前後に搖さぶられると、座面の基部が厭な軋みを上げた。カヴィルは舌打ちすると、マツキニーの股間に投げやつた地図で、現在地を探つた。数十秒に渡り、カヴィルは湿氣と手油でよれた紙面を相手に格闘した。その間、マツキニーはハンドルを小刻みに切り続け、なるべく一度も通つていない道を選んで、首領の決断までの時間稼ぎに勤しんだ。背後のチンパンジーが凝視する中、カヴィルは呼吸を荒げて、脂ぎった巻き毛を搔きむしつた。やがて汗が鼻の頭を濡らし、手油でよれよれの地図をふやかす。その一滴が、隘路で入り組んだ区画に着弾した。カヴィルは袖で額を拭い、抜け毛の絡む指で塩気たっぷりの着弾座標を示した。

「この辺りで網を張る」

「奴隸がいる根拠は？」

チンパンジーが、椅子をぎいぎい鳴らすのを止めた。

「……、こは私道が多い。資産家も多い筈だ」

焼き切れたニューロンの出任せでしかなかつたが、それを聞いたスピーリングは座席から手を放した。カヴィルはストレスを含んだ二酸化炭素を排出し、地図を隣の膝に放り戻した。剣呑で臭い空気に、マツキニーは閉口したが、爪で跡を付けられた区画へとハンドルを切つた。そこに、高級住宅街などありはしないと確信しながら。

奴隸蛮行【2—2】

ヘリフオードの街外れ、寂れた住宅地から更に隔絶された一角にその物体、もとい平屋は佇んでいる。『サヴェジ日用品店』は、一辺が約二十メートルの正方形に近い敷地面積を有する、灰色のプレハブ建築である。屋上の貯水タンクは元の色が窺えぬまでに腐食しており、廃墟然とした概観が市民の不安を煽る。商業施設を名乗るには汚れすぎた壁が三辺を構成し、窓は殆どない。正面出入口のある一边はガラス張りであるものの、方角は北向きで、表面は鳥の糞便と羽虫の死骸に塗り潰されている。加えて、隣接する建造物群が元より少ない日照を阻害しており、建材の樹冠が文字通りのコンクリートジャングルを形成していた。

店内は外見以上に陰気が籠もり、蛍光灯の半数が黄ばんで明滅している。出入口の脇に立つアルバニア人の用心棒はハーフパンツ姿で、警備企業の社員証さえ下げるはいない。リノリウムのタイル床が欠け、商品を陳列する什器の並びは勿論、渡された棚板まで全てが傾き歪んでいる。棚卸はおろか在庫調査さえ疎かな商品が厚く埃を被り、三号前の「サン」誌がヌード見開きを破り去られて放置されていた。とどめとばかりに、メーカー不詳のコンドームや「おとなのおもちゃ」が、子供の目線の高さで悪趣味な乱痴気騒ぎを繰り広げていた。この汚濁の数少ない強みといえば、商品価格の異様な安さと、廃番商品がいつまでも取り残されている点くらいである。

客層には不登校の学生や筋金入りのホームレス、消耗して瞳の濁つた奴隸と、内装に見合った不景気が主要素を占めている。内壁に丸いものが点々と見られるのは、打ち放しのコンクリートだからではない。未だ完成を見ないこの芸術は、客が噛み捨てたガムでしつらえたのだ。こんな荒廃振りにもかかわらず、店に閉店の兆しは皆無であった。

給料日前の労働者さえ利用を躊躇うサヴェジ日用品店の経営は、カビによる肺炎のリスクを冒しても訪れる常連に維持されていた。厚化粧が崩れた起き抜けの娼婦。髪を搔きむしって舌打ちするビジ

ネスツーツの男性。パークーのフードを目深に、呼吸浅く周囲へ警戒を向ける女——。彼らは出入口の対角線上、店舗の最奥に設置されたレジカウンターに列を成し、三々五々の面持ちで会計順を待つていた。レジを打つのはタトゥーとピアスだらけの東欧系の男で、スツールに腰掛けで骨董品のレジスターをのらりくらり操作している。遅々と進まぬ会計に、ビジネスマンが足踏みで催促するも、店員はつゆほども作業の手を早めず大袈裟に欠伸してみせた。その間にも、会計の待機人数は増え続ける。やつとて娼婦の小計額を表示すると、小汚いレジで物言わぬやり取りが交わされた。目の下にくまの浮かぶ娼婦は会計皿に代金を置くと、それと別に紙幣数枚を皿の下に差し入れた。店員は何食わぬ顔で、娼婦へ釣り銭とレシートを差し向ける。娼婦は購入品をカウンターからひつたくると、鼻息荒く会計の列から外れていった。その手に、随分と分厚いレシートを握り締めて。

自分の会計順が来るや、ヒステリー会社員はエナジードリンクの缶をカウンターに叩き付けた。逆の手には、二十ポンド札の束が震えている。店員は男の逼迫した様子をせせら笑い、揉みくちやの女王を受け取る。タトゥーで真っ青な指先がゆっくりと、不必要に入念に紙幣を勘定する。店員はここでも茶目つ気を発揮し、わざと計数を間違えて客を苛立たせた。残酷なまでに冗長な会計を終えると、印字の欠けたレシートが会社員へ差し向けられる。会社員は店員から紙片をもぎ取るなり、そのまま床へ放る。その指先に、ビニールの小袋がつままれていた。店員が、レシートの下に潜ませていたのだ。額に脂汗を噴出させ、男は充血した目で喘ぐ。「トイレ貸せ、早く！」

「ダ」自由に」と店員が手振りするのも見届けず、男は右手の角にある洗面所のドアを勢い跳ね開け、トイレの個室へ消えていった。

洗面所のドアが半開きで揺れている以外に、サヴェジ日用品点の様子に変化はなかつた。男の発狂に関心を抱く者は誰ひとりとおらず、店内にはレジスターの怠惰な電子音が木霊し、物陰で子供が菓子を服の裏に潜ませる。会計順の回ってきたパークーの女が、懐から抜き出したメモ用紙と紙幣を店員に掴ませる。冷笑を浮かべた店員が膝元から、会社員へ渡したのと別種の小袋をカウンターに置く……。店は

今日も、不気味なプログラムに則つて商あきないを続けていた。

やつぱり、来るんじやなかつたかな——。

近隣から”えんがちょ”の烙印を押される店の日常風景を目の当たりに、小柄な少女は唇を噛んだ。控えめなフリルに縁取られた両肩が、がつくりと落ちる。土嚢と見紛う買い物袋の重み、それはブリジットにとつて苦ではなかつた。

感情の抜け落ちた目が、虚空をさまよう。その右手に、未会計のウイスキーの壇が握られていた。アイリッシュ・ウイスキーがひとつ、『ブラック・ラッシュ』。ブリジットをこの場に招いた、ただひとつ之所以である。

メイドは身近の危険を走査しつつ、会計列へと歩を進める。可憐であり堂々たる足取りは、明るみを厭う落伍者の巣窟にあるまじき威風をまとう。この日、はぐれ者の行き着く奈落に、ブリジットは身を投じた。

奴隸蛮行【2—3】

この日、ヘリフォードじゅうの他の人間と同様に、ブリジットもまた不運の渦中にあつた。ここに至るまでの一時間、彼女は目標物資の確保に方々の商店を巡り、行く先々で「在庫切れ」の苦渋を舐めた。どの店舗も他のウイスキーの在庫は潤沢であつたが、唯一ブラック・ブツシユだけが忽然と雲隠れしていた。現地で”プロブレム”と称される大英帝国とアイルランドの確執は根深いものの、二一世紀においてはほぼ安定しており、経済活動に急な影響が及ぶべくもない。いたずらに禁酒法を再現する神の見えざる手に、ブリジットは無表情の裏で敵意を抱いた。

数件目に訪れたりカー・ショップでは、徒労を重ねるメイドを氣の毒に思つた店主が「グレンリベット」を格安で譲つてくれた。ブリジットは恐縮しつつ店主の厚意にあづかつたものの、嬉しい誤算でさらに重くなつた買い物袋を担ぎ直すと、ブラック・ブツシユの探訪に速歩を繰り出した。

読んで字の如く、アイリッシュ・ウイスキーはアイルランド国内で蒸留されたウイスキーと定義されている。如何に豊かな風味と滑らかな後味を保証されていても、十八年物のスコッチなどでブリジットの目的意識は揺らがなかつた。化粧箱入りのスコッチは彼女が帰路に就く切符、ひいては目標未達成の免罪符とはなり得ない。なぜか？それは彼女が”特殊”であるからに他ならない。

ブリジットが会計列の最後尾に着いた時、列には五人の先客がいた。会計客がテムズ川のヘドロよろしく滞留する様は、ひと昔前の銀行を彷彿させた。その身が奉仕精神の石英原石を磨き抜いた水晶玉たるブリジットには、堕落した店員の心理を解する術がなかつた。バーコードスキャナーの緩慢な電子音を意識の外に、彼女は夕餉の段取りを脳内で演習しつつ、退屈しのぎに自らの癖つ毛に触れる。と、爪先が金糸に触れるが早いか、水仕事慣れした指が異変を検知した。ブリジットは唇をひと舐めすると、意識的に落としていた呼吸を復旧させて、すんと鼻を鳴らした。浮遊する諸々の化学物質が、小さな鼻

腔に導かれる。色とりどりの菌類が、培地を求めて健康な粘膜に殺到した。——うつ、カビくさあ……。腐臭に歪んだ鼻筋を整え、ブリジットは確信めた懸念に出入口へ振り返った。脳裏をよぎつた災厄が、既に具現化していた。イングランド南部の上空を、突発した雨雲が領空侵犯していた。不定形の侵略者はたちどころにカワセミの羽根の如き蒼天を塗り潰し、暗影をヘリフォードの街に落とす。ブリジットをおいて店内に晴天の死を感知した者はおらず、店先の用心棒もスマートフォンの画面に釘付けであつた。かねてより大衆の関心を惹くのは、超自然的な人工の刺激である。この用心棒が空模様より女優の新着流出ポルノにご執心なのを、果たして誰が責められようか。

ブリジットは早朝の天気予報を思い出そうと試み、そしてすぐに取り止めた。気象予報士は本日の晴天を確約したが、現に頭上では濶んだ黒雲が育ち続けている。何にせよ、和やかな白昼は過去のものとなつた。暗雲が幾重にも波打つて要塞を築き、城郭の拡張が急スピードで進む。渦巻く氣流に窓ガラスが震え、用心棒がようやく肌色の画面の外に注意を向けた。店内でも次第に気象状況の認知が広まり、ガラス窓に野次馬が群がる。鋸びた窓枠が縁取る終末の光景に、吹き溜まりの住人はおしなべて間抜け面を晒した。最早そこに、彼女が歩んだヘリフォードはなかつた。日頃の不信心も顧みず神に祈る客から、暴風雨を危ぶむ声が上がる。どれだけの規模なのか。自宅の窓は割れないか。屋根が雨漏りしないか。そもそも無事に帰れるのか。人々は種々雑多の不安、天を仰ぐばかりであつた。

ブリジットは努めて冷静を保ち、エプロンのポケットから山吹色の平滑な円盤を取り出した。メイドの掌中に、真鍮の懷中時計が収まっていた。矜持を重んじる使用人は、時刻確認にスマートフォンなど使わない。音もなく開かれた上蓋の内で、日本製のムーヴメントが一二二五時を指している。蓋の裏に、一対の翼を有する剣が彫刻されている。ブリジットは左目で文字盤を捉えたまま、右目を屋外へ向けた。

——まあ、降られても問題はない……かな。

天候と折り合い付けると、開く時に同じく静かに時計の蓋を閉じ、

業務計画の見直しに着手した。どう足搔こうと、じきに雨は降る。主人の帰宅まで時間的余裕は十分にあり、着替えが残る業務に支障をきたす恐れはない。食事の下ごしらえは前日に済ませており、便器は銀食器に進化するまで磨き上げた。歐州では珍しい、トイレと別個の風呂場も、職務を終えた主人の身を清める——ブリジットが素手で撫でこすつてやる——ために、不要なまでに浄化した。それもこれも、主人への愛ゆえである。

自らの忠犬ぶりを誇るあまり緩みかけた頬を、メイドは慌てて取り繕つた。己の未熟を戒めていると、先の会社員がハンカチを手に洗面所から出てきた。その佇まいは一転、乱れた頭髪を後ろに撫でつけ、背筋はしやんと伸び、落ち着いた足取りで人好きのする微笑さえ浮かべる変貌であつた。それこそ、ヒトの尋常から外れる程に。口笛を吹き鳴らす男は急変した空合いを氣にも留めず、軽やかな身のこなしで店を後にした。夕飯の準備とは別に、ブリジットは早急にこの場を離れる決意を新たにした。

奴隸迎合【2—4】

通常、英国人に傘を携行する習慣はない。観光客向けの理由としては、産業革命期に片手が塞がるのを嫌つたという仮説が如何にもそれらしいが、化けの皮の下には「変態だから」と、チープながらもつともな真実が転がっている。そもそも前出の説が通るなら、産業革命以前のイギリスにろくな食文化があつた可能性を認める証左となる。無論こんなものは戯言で、産業革命時の使用人急需でフランス人が料理人に招かれるまで、この島民は茹で卵にまさる料理を知らなかつた。一説には、十九世紀のジャガイモ飢饉に見舞われたアイルランドへの食糧支援を大英帝国が拒んだのは、自國に秀てる食文化を嫉妬した為とも伝えられている。全く以て、嘘と誠の分別もつかぬ者が英國の土を踏むべきではない。

閑話休題、雨に限つた話ではないが、英国人はその価値観を多民族とまるで異にする。山がちなウェールズ近辺の気象変化は特に頻々で、地元民は霧雨を冷房にビールを飲み、長雨の夜を穏やかに語り合ひ、土砂降りをBGMに踊り狂う。如何なる降水量においても、彼らは雨天を愉しむ気概を備えている。それが、心のダムの容量を超えるまでは。

上空の乱雲が地上に娯楽を提供する思慮を持ち合わせず、自然の猛威に個人のダムが決壊する未来に、人々は恐怖した。そしてそれは、五分前のブリジットが先んじて見越した筋書きであつた。

四度目の時刻確認に開かれた懐中時計が、一二三〇時を刻む。ブリジットが真鍮の殻を閉じると同時に、彼女の直前の少年が会計を終えた。両目が落ち窪む、明らかに未成年と見えるその手に、煙草の巻紙が握られていた。——可哀想に。奴隸の憐憫は、自分より上位の存在へ寄せられたものではなかつた。会計カウンターの奥、店員のタトゥームみれ腕が横柄に手招きする。

もし、あんなのが旦那様だつたら……。

ぞつとしない仮定を否定し、メイドは感情のブレーカーを落として前進し、カウンターの端から一步距離を置いて、ウイスキーを天板に

置いた。それまで無関心だった店員の鼻孔が、耳たぶに空けたのと同じくらい拡がった。興奮で吹き鳴らされる口笛に、メイドの精神がダメージを受ける。

「おいおい、こいつはぶつたまげたな」

店員は両目を半月に、高級性奴隸を舐め回した。卑俗な値踏みもすげなく、ブリジットは事前に構えた長財布の小銭を手繰る。オイルを塗り込んだ黒革の縁から、既に女王ふたりが双眸を覗かせている。「札入れと別に持つ、硬貨の収納容器。手際に長けた者その他に持つべきではなく、さる者は概して要きない」。このメイドの辞書が収録する、小銭入れの記述である。彼女の定めるところの財布とは、品物の売買において貨幣の迅速な提示を使途とする用具であり、間違つても店舗従業員と他の消費者の寿命を浪費させるお荷物ではない。持論の証明に、その手にあるのは色気からつきしの男物である。多感な年頃に性意識を捨てられるのは、己に確固たる自負がある故であつた。もつとも彼女の場合、自国の経済構造に人格を歪められたところが大きいのだが。

店員はスツールを脇へ蹴やり、ねつとりと不敵な笑みでスキヤナーを手に取つた。「見ない顔だな。IDを出しな」

ブリジットが胸元から取り出したカードホルダーに、店員がLEDの赤い光を照射する。レジの液晶画面に「承認」のデジタル表示が浮かぶと、ブリジットはカードホルダーを早々に仕舞つた。

これは奴隸が常備を義務づけられている身分証明書であり、各個体の雇用主や血液型などが記されている他、内部に埋め込まれた電子チップには公共施設の利用やタバコの購入、渡航といった権限の有無が登録されている。電子チップ、または表面の二次元コードを提示しない限り、奴隸は小便さえままならなかつた。

スキヤナーがウイスキーのバーコードを読み取り、くすんだ緑色の数列がディスプレイに浮かぶ。

「いかしたチョイスだな。けど女の子にやきついだろ?」

ウイスキーをいじくる店員の茶々に、メイドはただ小首を傾げるばかりであつた。変態が性奴隸に期待する応答に代えて、第一級の使用

人は手振りでその注意を下方へ導く。艶めかしい所作に魅せられた淫欲の目が、白い指が示す先で釘付けになる。位置を元のままの会計皿に、小計額ちょうどの現金が顕現していた。それも、紙幣と硬貨全てが、女王陛下のあらせられる表向きに。

「あんた手品師か？」

超常体験に軽いそら恐ろしさを覚えたものの、店員は眼前の性奴隸になお惹かれた。興奮した息遣いに、タンクトップの胸元でサメのタトゥーが躍る。

うわあ、ミスつたあ……。

ブリジットは会計からの離脱を急き、その場限りの釈明に労を惜しんだ稚拙を悔いた。最低限の分別も備えぬけだもの相手に、女王の蔑視が通じる道理はなかつたのだ。

店員は奴隸から片時も目を離さず、会計皿の現金をレジの抽斗ひきだしへひっくり返す。見開かれた両目が、上玉の獲物を標的にぎらついていた。普段は受け取るレシートの受理を断り、会計を終えたブリジットの左手がウイスキーの壜へ伸びる。指先が琥珀色に触れる寸前、壜がカウンターの奥へ逃げた。見上げると、ウイスキーを奪取した男が悪戯っぽく舌を鳴らしていた。感情の予備電源作動を阻止し、ブリジットは語氣穩やかに語り掛けた。

「ごめんなさい、務めがありますので……」

「忘れもんぢ哉」

言うなり男は背後のラックから小箱をもぎ取り、奴隸の前へ放つた。カウンターを滑る紙箱に、その筋で世界市場の二五パーセントを占める、〈デュレックス〉のロゴが光る。自らの内で波立つものを殺ぎつつ、ブリジットは『可愛いメイドさん』に徹した。愛と安全を謳う紙箱——極太のコンドームをそつと押し返し、渾身のジョークを紡ぐ。

「あいにく、フランスに知人はおりませんでして……
「あんだつて？」

相手の知性に合わせたつもりの言葉遊びも、ポーランドの不法移民には受けなかつた。——こんな一生の恥じやない！ ブリジット

は無駄知恵を働かせた浅慮に恨み節を奏じ、男が顔の横で揺らすウイスキーを一瞥した。ガラス壇に映る光景に、他の会計客の姿は認められない。ブリジットと店員を除き、店内は天候を無為に見守る野次馬が出入口にたむろするばかりである。会計済のウイスキーを人質に取られ、メイドは窮地に立たされた。

奴隸蛮行【2—5】

一九世紀のヴィクトリア朝、英國がその榮華の最盛期を迎えたのは、周知された事実である。が、その舞台裏で屋台骨を支えていた使用者に焦点が絞られるのは稀である。

英國の国税調査は、一九〇一年時点での国内の使用人数を約一五〇万人と計上し、その内の約一三〇万が女性であつたと示している。屋内使用人に限ればその男女比は一対二二と、字面にして一種のハーレムを匂わせる。この二二は更に家政婦長や侍ハウスキーパー レディーズメイド女、料理長……と、個々が専門とするで細分される。雇われ先の都合で、一人の使用人が複数の役職を兼務する事例も少なからず見られたものの、基本は技能別に割り当てられた職務のみを命じられていた——最下級の集団を除いて。

当時の英國では産業革命を背景に、事業で成功した一部の労働者階級、いわゆる労働貴族が台頭し、上流階級に食らいつこうと躍起になっていた。家具の足を布で覆つてまで性を否定したこの時代において、外面は何よりも重んじられた。新参者の中産階級が貴族へ面通しを許されるには、己の明瞭な価値の表明が求められた。他者の私産を覗き見る、げに下品で変態極まる審査を通過するには、所有する土地や有力者とのコネクション、高貴なる血縁関係などが好都合であったが、そもそも労働貴族になどならないのである。いつの世も、お上は理不尽で頑固で、頭が悪い。

しかしてこの不条理に、今日の英國紳士の礎を築くジェントリ卿紳は抜け道を見出した。『有閑階級』と称される様に、この時期の上流階級の価値觀には、暇を持て余して消費活動に勤しむ体たらくが、美德としてまかり通つていた。この醜惡な美的感覚は特に女性に対して求められ、妻は家事や育児を使用人に放り、帰宅した夫を労う家庭の天使像たる役割を任せられた。安樂椅子から一歩も動かず、子供の面倒も観ずにぶくぶく肥えてゆくのは天使ではなく、女王蜂であろう。何にせよ、広大な領地を一望するお屋敷カントリーハウスに比べれば、使用者の雇用はそう高い敷居ではなかつた。

とはいゝ、ぱつと出の成り上がり労働者が使用人に割ける身銭にも余裕はなく、多くは娘つ子ひとりを雇うのが精一杯であつた。言わざもがな、学校や工房で専門技能を修得した者は皆無に等しく、その出自は田舎の農村からの出稼ぎや口減らし、身寄りのない孤児、新大陸から持ち込まれた黒人奴隸という有様であつた。年端もいかぬ少女がある日身ひとつで親元から離され、都市部の見知らぬ邸宅で掃除に洗濯、食事の仕込みに暖炉への石炭補給、果ては悪ガキの面倒に至るまで、一切合切の給仕を命じられるのだから、人権などあつたものではない。当時、使用人のホームシックを訴える手紙を運んだ郵便配達員は、霧の粒の数ほどいる。こんな次第であつたから、見習い未満の使用人に仕事を一から教え込んだり、悲哀に暮れるのを慰めたりして、天使像になり損ねた妻が多かつたのにも不思議はない。この未熟で不憫な少女らこそ、先述した最下級の家事使用人・雑用女メイド オブ オールワーク中である。彼女らが英國史に下ろした根は深く、形態こそ幾らか変われ、現代においてもその姿は散見される。そして、人はそれを奴隸と呼ぶ。

閑話休題、未曾有の曇天が襲来する二一世紀のイギリスはヘリフォード。暗雲に覆われた街の一角、人生の落伍者が滞留する吹き溜まりで、ある雑役女中の末裔が、業務規定に明示されない雑務オールワークにかかずらつていた。彼女に課された任務は二つ。一つは、主人が愛飲するウイスキーを持ち帰る事。もう一つは、主人が愛してくれた己の操を、眼前の不埒な野獸から守り抜く事である。澄んだ碧眼が見据える先、スラヴ系の店員の指先で、琥珀色の「ブラック・ブッシュ」が揺れている。男の顔は銀色のピアスで溢れかえっていた下衆の尖兵たる男を前に、ブリジットは微笑みを絶やさずにいた。その張りつけた笑みの裏で、虫唾が全力疾走していた。

奴隸蛮行【2—6】

ブリジットの、財布を握る手が強張った。彼女の他に会計待ちの客がいない目下、この場に性奴隸の肩を持つ者はいない。時間は何処までも、上物を前に舌舐めずりする店員の側に着いていた。

ブリジットの司令部は、次に切る手札の選択にフル稼働していた。動物は同種の個体と争いになつた時、本能的に「威嚇」「降伏」「逃走」の何れから行動を選択する。この反応は魚類から靈長類にまで例外なく備わっており、偶発的な事故や共食い等の生得的なをメカニズム除いて、自然界での同族殺しは起こり得ない。この法則は、現代の人間社会にも浸透しており、サヴァエジ日用品店の会計カウンターで進行中の悶着にも、この法則が適用可能である。

今日の先進国では、善良な市民の多くは争いを厭い、敵対者に譲歩するきらいさえある。先の行動モデルに照らし合わせると「逃走」がこれにあたり、大抵の市民は物品を諦めて店を去る。敵前逃亡からの不戦敗を喫し、体裁の悪さが尾を引いて陰鬱な気分に塞ぎ込む。勿論、支払った金は手元に戻つてこない。慘憺たる恥辱には違いないが、観点を変えれば、これも立派な処世術であり、極めて社会的な生存戦術である。下衆の不法に泣き寝入る代わりに、蒸留酒ひとつで不貞と性病を抱き込む不条理は避けられるのだから。

ところで奴隸、特に性奴隸においては、その身を損傷する行いは即ち、所有者の資産を害する罪業と見なされる。また、性奴隸を保有する人間はその嗜好から、極めて独占欲が強いという統計が記録されている。この歪んだ処女信仰は、レイプ被害に遭つた性奴隸の不当解雇が続発する理由を裏打ちしている。合意の有無にかかわらず、奴隸は危険な人物・場所から「己」を遠ざける責務があつた。ひとえに、住む家を失わぬ為に。

にもかかわらず、ブリジットは件の会計カウンターに留まり、ウイスキー泥棒の店員へ正対し続けた。深い蒼に縁取られた瞳が、酷薄な店員を一直線に見据える。両者の間に沈黙が訪れてから、三十秒が経過していた。並み居る性奴隸であれば、無駄金を費やした失態への申

し開きを案じている頃である。されど、ブリジットの使用人論理は平凡なそれを遙かに逸していた。

ブリジットの胸中は自らの保身などではなく、まるで真逆の自責で張り裂けそうになつっていた。その小さな胸には、身体に見合わない責任感が圧縮されている。それが電子レンジの卵の如く弾け、誇り高き己の分身から大目玉を喰らつっていたのである。「主から預かつた財を悪漢に奪われ、あまつさえ汚名を持ち帰る使人など、一ペニーの価値もない」と、いささか度を過ぎたこの問責を、ブリジットは信じて疑わない。一方、彼女の雇用主は何をおいても彼女の安全を尊んでいるのだが、そんなのは完璧メイドさんの中つたところではない。崇高なる矜持とは、裏を返せば独りよがりの自己満足である。

束の間の長考の末、ブリジットは呼吸を整えて店員へ向き直つた。
「お気持ちは嬉しいのですが、急いでいるもので……」

小首を傾げ、眉根を寄せる少女から発せられたのは、月並みなお断りの句であつた。世の女性が理想、或いは妥協点へ至るまで繰り返す、退屈な謝辞。だが無味な音の羅列も、高位の性奴隸が調律すれば、傾国の睦言にまで昇華する。滑らかな声音には一切の作為が窺えず、あたかも一時の逢瀬に後ろ髪引かれるが如き声風こわぶりは、一流奏者が搔き鳴らすストラディバリウスに等しかつた。

「そう時間は取らせねえって」

さりとて、すけべ丸出しの野獣に芸文を解する脳はなく、特級使用者のリップサービスは虚無へと聞き流された。ブリジットは立て続けの裏目に舌打ちをこらえたものの、己の理性が翳かげる先触れを察していた。

次なる策に貧したブリジットへ、店員が追い討ちを仕掛ける。壇を握ると逆の手でカウンター下を探り、ジッパー付きの透明な小袋を取り上げた。先客へ渡されたのと同じ不自然なまでに白い粉末が、卑語まみれの指先で揺れていた。

「あんただけの、初回サービスだ。まけてやるよ」

店員はこれ見よがしに、メイドの鼻先で包みを揺らしてみせる。瞳孔がかつと見開かれ、濁った黒目が絶えず細動していた。——あんた

も欲しいんだろう？

サヴェジ日用品店の実態は、コロンビアやペルー産の粉末コカインをロンドンへ運ぶ中継拠点であり、店の従業員はすべからく英国内に拠点を構えるロシアマフィアの息が掛かっていた。正規の警備会社へ業務委託していないのも、経営基盤の黒さ故である。

店員の人外じみた口角の上がりに、首に彫られたタトウーのサメまでもが涎を垂らす。ヤニ臭い呼氣に不快指数が測定不能に陥りながら、それでもブリジットは使用人魂を固持し続けた。

「そのご厚意だけ頂戴いたします」

「おいおいおい、つれねえな。自分に正直になれよ」

欲望のボルテージが限界を迎える、店員の語氣もいよいよ圧を増す。まして相手は無力な奴隸で、万人に雌伏して然るべき弱者である。司法の盾なき”持たぬ者”を、高貴な人間様が畏れるべくもない。だからこそ、店員の煽りに遠慮はなかつた。

「なあに、最初はどいつもおつかなびつくりだ。でも始めちまえば、もう愚図なご主人様の枯れ木にや戻れなくなるぜ」

——ああ、そう。

メイドは長い睫毛を伏せると、手を口許にくすくすと笑声を発した。忍び笑う奴隸に店員は少したじろいだが、低俗な冗談がツボにはまつたと独善的に解釈すると、一緒になつて喉を鳴らした。波模様を彫られた頬が、勝利の確信した余裕に緩む。あとは日の前のメスが、ちらつかせた餌に飛び付くのを待つのみであつた。先の忌詞いみことば_{ルサンチマン}に、ブリジットを縛る奴隸道徳が解除されたとも知らず。

駄目押しとばかりに、店員は手中の薬包を奴隸へ放り寄越した。耳まで裂けそうな笑みに、黄ばんだ歯が糸を引く。ブリジットは財布をスカートのポケット——元より、ハンドバッグは持ち合わせていない——へ収め、いつもと同じ眠たげな半眼で飛翔体の軌道を追つた。墮落の顆粒が、緩やかな放物線を描いて接近する。

あの人がこの場にいなくてよかつた。

事態は最早、感情のブレーカーがどうこうの話ではなかつた。薬包が終末弾道に達するのを合図に、蒼い瞳に影が落ちる。セイフティ安全装置が外

れ、雑役女メイドオブオールワーク中は五月蠅い害虫駆除に腰を上げた。

店員の視界を、黒い影が横切つた。ぱしん、と乾いた音に続き、遠く離れた床で軽い物音が立つた。面食らつた店員が音の所在を見る
と、奴隸へ投げやつたはずの薬包が、割れたタイルに中身の殆どを零
していた。正面へ向き直ると、しゃぶり尽くそうと考えていた性奴隸
が、感情の欠落した仮頂面を浮かべていた。ドラッグの包みを真一文
字に払つた左腕が、機械めいた所作で腰の前へ戻される。

「てめえ！」

末端価格にしてグラムあたり三十ポンドを下らぬコカインを台無
しにされ、悪漢は奴隸の胸ぐらへ勢い掴みかかつた。その右腕は体躯
の劣るメイドの襟飾りジャボットにさえ達せず、数秒前の薬包を再現するよう
に、迷いなき一閃に打ち落とされた。前腕へのたつた一撃。それで悪
漢のバランスが崩れ、肩からカウンターに激突する。自分の身に何が
起きたのか理解しようと慌てて目を泳がせる悪漢を、その頭上から藍
色の蔑みが睨め付ける。

「恐縮ですが——」

ルーマニア男は再燃した怒りで会計カウンターに肘を突き、体勢を
立て直そうと試みた。それと同時に、不躾な奴隸に身の程を知らしめ
ようと、逆の手をウイスキーの壇へと伸ばした。

男の手が何かを掴むことはなかつた。世界が三つの色で満たされ
た。ひとつは、綾織り生地のブラウン。ふたつ目は、光沢あるタイツ
とガーターベルトの黒。それから、ほんのり紅潮した穢れなき柔肌。
神秘的な光景は瞬きをする間もなく、強烈な外力によつて網膜から剥
ぎ取られた。反射的に目蓋を閉じた男が恐る恐る薄目を開くと、会計
カウンターが視界いっぱいに広がつていた。いつの間か両脚が肩幅
より広く開かれ、身を起こすにも、上方から異様な力で押さえ込まれて身動きさえ叶わない。おまけに、左腕が自分の背中に密着したま
ま、関節を極められているらしかつた。

遅れてやつてきた痛みが、男の後頭部と膝裏に訪れた。呻く暴漢の
耳元で、ストラディバリウスがそつと、おぞましい旋律を奏でた。

「——お戯れも、節度を識るべきかと」

男は上流英語^{グラスカット}など聞き分けられなかつたが、鼓膜を始点に血の気が失せるのを感じた。いつたいどうなつてゐるつてんだ？　スキンヘッドに珠の汗が浮かぶ。男は背後からメイドに襟首を押さえつけられ、一切の動きを封じられていた。

店内に味方がいなのは、ブリジットに限つた条件ではなかつた。客は相変わらず窓ガラスにへばりついて雲行きを眺めていたし、出入口の用心棒は、妻に電話して車に防水カバーを掛けるように喚いていた。暴力メイドを視界に收めているのは、レンズにクモの巣が張られて久しい、自分の真上に吊られた監視カメラだけである。

ルーマニア人は癪癩にものを言わせて拘束から逃れようとしたが、奴隸に襟首を尋常ならざる力で押さえ込まれており、耳のピアスが会計皿を空しく叩くばかりであつた。無理矢理に拡げられた股関節が、腱の限界を間近に見苦痙攣する。それでも、役立たずの用心棒へ叫ぶ力は残つていた。突つ伏しているせいで満足に膨らまない肺へ酸素を取り込み、声帯に全身全靈を込める。窓の向こうで乱雲がひとりわ大きく唸り、風が逆巻いた。

男の血管の浮き出る首筋を、固く冷たい感触が撫ぜた。神経毒を盛られたように、脊髄が芯まで凍り付く。行き場を失つた叫びが、今際の息も同然にすきつ歯「#「すきつ歯」に傍点」を抜けていつた。首筋のサメのタトゥーが、エラにナイフをあてがわれて喘いでいた。「恐れながら、改めてお詫び申し上げます。『急いでいるもので』

ぎざぎざの白光が閃いた。鼓膜を聾^{ろう}する雷鳴がそれに続き、「ぽつぽつ」と氣構えさせる暇もなく、無数の太矢がヘリフォードの街へ放たれる。地表に着弾した雨の爆風が、濃密な霧を住宅街を包み隠した。メイドは男の返事を待たずにブラック・ブッシュをかすめ取ると、トートバッグへ音もなく収めた。青白い雷光を受ける顔に、虚ろな微笑が繕わっていた。

「それでは、佳き一日を」

本来の目的を果たしたメイドは、黒塗りの刃を握る右手を支点に、両脚を振り上げカウンターを飛び越えた。一瞬の圧で首のサメが軽い裂傷を負い、かすれた悲鳴が上がる。

「クールヴァ……！」

悠然と歩き去る奴隸様へ負け犬が恨み節を毒づくと、その鼻先に小さな紙片が舞い落ちる。目を細めて焦点を合わせると、応急絆創膏だと分かつた。

「ニエ マ ザ ツオ」

メイドさんは一顧だにせず、来た時と同じ気高い歩調で出入口へ歩み去った。右手のナイフは、もう何処にも見当たらない。大敗を喫した店員は、奴隸を追い掛けるどころかカウンターに突つ伏すなり、我を忘れて拳を天板に叩き付けた。そこに靈長類としての知性などなく、罵倒の文句も結べずに金切り声を張り上げながら、終わりなき自傷行為に埋没した。無理もない。最底辺を這いかしづく奴隸が、犯罪組織においてシノギのひとつでしかないメス奴隸風情が、高位にある人間様の自尊心を完膚なきまでに踏みにじつたのだ。

背後の慟哭をかき消すように、メイドは楽しげなメロディを口ずさんだ。

「あの人にはね、〈ボウモア〉じゃないの、ごめんなさい。お隣の〈デュワーズ〉さんも、お呼びでない——」

奴隸蛮行【2—7】

大雨が襲うヘリフォードの外れ、プレハブ構造が立ち並ぶ住宅街を、陰険な空気を満載した黒のフォード・トランジットが走っていた。五人の誘拐犯と一体の性奴隸を乗せたパネルバンは車一台分の隘路を当て所なく彷徨い、急に方向転換しては来た道を戻るといった、不審な走行を繰り返していた。それもその筈で、車内の誘拐犯は各自の意見を異に、壊滅的な内部分裂を起こしていた。ハンドルを握るマツキニーは、助手席の首領・カヴィルの見当違ひな指示に、神經とタイヤをすり減らしていた。車外の雨は勢いを増すばかりで、人気など微塵もない。そもそも、撥水コートのないフロントガラスでは五メートル先さえ見通せず、ワイパーの一本が三分前から動かなくなつていた。道案内を仰ごうにも、親分に干渉すれば火の粉が掛かる。車内の成り行きを静観して、このまま一ブロック毎にハンドルを切り続けるのが最善と腹をくくつた。

座席を取り払った荷室では、巨漢のダウダルがガムを噛んでフォーケを歌い、弱冠十九歳のラスキンはジャンク品の拳銃を握り締めて縮こまっている。残るスプリングがコンソールボックス上に身を乗り出し、血色悪くこけた頬をカヴィルに寄せた。

「おいおいカヴィルさんよお、どーこに奴隸がいるつてえ？」

スプリングは額に手をかざして、地平線を見回してみせた。

「ねえねえ、どうするのぉ？ カヴィルちゃあん」

スプリングの指が、コンソールボックス上でリズムを刻む。カヴィルは同胞のちよつかいに構わず、鼻息荒く住宅地図を睨んでいた。鼻の先に構えた地図を凝視する目は血走り、首を経て胸までが血の氣に赤く染まっている。誰の目にもカヴィルが爆発寸前なのが明らかで、今やお頭の器でないのも露呈していた。スプリングはルームミラー越しに、荷室に横たわる性奴隸へ顎をしゃくつた。

「で、どうすんの？ 今なら一発ヤつて、そこらにポイすりやいい」

「なら、俺が最初だ」

音痴のフォークソングが止まり、ダウダルの野太い腕が奴隸の肩を

掴む。姦通の危機を気取った奴隸は身をよじるも、仰向けに荷室を転がるだけだった。今後の予定を既に誘拐から輪姦に変じたスプリングが、にやけ面でダウダルに言い寄る。

「なあ、待てって。誰だつて他の野郎の後で——」

「文句あんのか」

倍の体躯にねめつけられると、スプリングはかぶりを振つて退いた。おしゃべりを封じられた雑魚を余所に、ダウダルの両腕が暴れる奴隸の股をこじ開ける。

「くそ、ワニピースじゃねえのか……。おい、ちび助、上を剥け。口とパイオツは好きにしろ。俺のタイプじゃねえ」

急な朗報に、ラスキンは銃を尻の上のウェストバンドに挟んで立ち上がる。被支配階級の存在が、少年の矮小な妄想を増長させた。手駒の身勝手を見過ごせず、名目ばかりのリーダーが助手席から荷室へ跳び込む。

「ふざけんな、誰がここを仕切つてると——」

胸を強打されたをカヴィルが、荷室から吹き飛ばされた。ダウダルが、奴隸の下着を剥ぎ取る妨げを一撃するのを、ルームミラーが映していた。一部始終を見ていたマツキニーは、元リーダーの背中が自分に迫つているのに気付かなかつた。

重力と遠心力、速度と慣性、それら全てがねじれ絡んでひり出された暴力だつた。空中で制御を失つたカヴィルはマツキニーの左半身へまともに激突し、その衝撃でアクセルが最大に踏み込まれた。急速するエンジンの制止に、マツキニーはアクセルを戻してブレーキを踏み付けた。ところが車は減速せず、足下で癪癪めいた怒声が上がるばかりである。

「馬鹿！　俺の手だ！」

激痛に喚くカヴィルが起き上がりようと、床に手を着く。バンが再加速し、カヴィルは頭からセンターコンソールにぶつかった。カヴィルが姿勢の安定に掴んだのは、アクセルペダルであつた。その腰から拳銃が転がり、マツキニーの足下へ滑つてゆく。マツキニーは隘路の爆走に必死でハンドルを切り、確実にブレーキペダルを連打する。が、

またも制動が利かない。ペダルの真下、床との間に拳銃が噛まれていたのだ。サイドブレーキを掴もうにも、その先端は白目を剥いて伸びるカヴィルのジーンズの股間に埋まっていた。英國では、小便の後にきちんとジッパーを上げる義務がある。

バンは尚も加速を続け、雨粒がフロントガラスを這い上がつてゆく。視界も何もあつたものではなく、マツキニーは直感だけで車体の安定に尽力した。高度一万メートル以上で及ぶ性行為を俗に『マイル・ハイ・クラブ』と呼ぶが、時速一〇〇マイル（約一六〇キロ）で住宅街を尻を振るパネルバンでレイプに勤しめる程、この小悪党らの肝は据わつていなかつた。荷室の誘拐犯は互いにぶつかり、宙返りを強制され、内装に身を打ち据えられた。攫われた奴隸は状況も知れぬまま喚きつつも、頭部を庇つて危機に備えた。

マツキニーはかつてない集中力を発揮し、暴走車輛の鎮静にあつた。速度計の針は最高速を離れ、身体に掛かる圧が減じていくのが感じられる。マツキニーは呼吸を整え、びしょ濡れの片手を相棒のジーンズに差し入れた。むつとした熱気を搔き分け、指先でブレーキレバーの感触を探る。カヴィル帰属の生温かいダミーに幾度も邪魔されながら、ジェイソン・マツキニーは遂にレバーの先端を掘り当てた。「やつたぞ！」

ロツク解除のノブを押し込むと同時に、前方の視界が開けた。住宅地を抜けて幹線道路に達した事実を把握するのに、マツキニーはコンマ一秒を要した。目前に迫り来る、白い構造物を認識する猶与はなかつた。

ハンドルを切る間もなく、バンは正面から構造物——奇しくも、世代違ひのフォード・トランジットの横腹に突つ込んだ。時速六〇マイルの体当たりに白のトランジットが横転し、助手席を下に擱坐する。道行く自動車が次々と追突の二次被害を生じ、周囲はクラクションと悲鳴で溢れかえった。

黒の誘拐トランジットはフロントガラスに蜘蛛の巣が走り、グリルから白煙を吐いていたものの、奇跡的に原形を留めていた。幸か不幸か死者はなく、大きな怪我を負つた者もいない。マツキニーは萎んだ

エアバッグを顔から引き剥がし、状況確認に目を凝らした。急激な血圧の変化で、視界がモノクロに色を失っていた。シートベルトを振り解いて運転席から転げ落ちた先で、数多の光が明滅し、バケツをひっくり返した雨に乱反射していた。思考は未だ明瞭としなかつたが、すぐこの場を離れなければならぬ事だけは分かつた。

「おい、助けろ！」

声の出所を辿ると、額から流血するカヴィルが、運転席から自力で出られなくなつていた。マツキニーは単身で逃げる事も出来たが、拘置所に送られた馬鹿親分が道連れを謀るのが目に見えたので、渋々手を貸した。ベコベコの助手席からカヴィルを引きずり出す頃には、方々でスマートフォンのカメラがストロボを焚いていた。

「見せもんじやねえぞ！」

逆上したカヴィルが、天に向けて拳銃を発砲した。無煙火薬の炸裂が、ほの暗い幹線道路に煌めく。大気を裂く銃声に、野次馬のシャツターはなりを潜めた。その代わりに、更なる阿鼻叫喚が事故現場を包囲した。積もり積もつたカヴィルの愚行に、マツキニーもぷつんした。

「いい加減にしろタコ！」

詰め寄つてカヴィルの胸ぐらを掴んだその時、横転したトランジットのリアゲートが、内側から破られた。数人の男が荷室から這い出すと、各々が別々の方向へ散会し、雨の中へと姿をくらました。マツキニーは束の間の怒りを揉み消され、戻りかけている色覚を疑つた。男らは、全員が明るい緑と黄色の珍奇なツナギを着ており、腕に鋼鉄の枷がはめられていた。男らが出てきた車輛は窓に鉄格子を備えており、前後を全く同型のセダン二両に挟まれていた。先程まで認識出来なかつたが、周囲で瞬く光が青色であつた事に、マツキニーは気付いた。その光の出所は、二台のセダンのルーフ上で機械的に回る回転灯だつた。回転灯に照らされずとも、マツキニーの顔が青ざめた。彼らのバンが突っ込んだのは、二両のパトカーがエスコートする、囚人護送車だつた。

「奴隸がいねえ！」

バニー・スプリングの叫びでマツキニーは我に返り、フロントが潰れたバンの荷室を覗き込んだ。積み荷が滅茶苦茶に散る中に、攫つた奴隸の姿は認められない。荷室の隅では、ラスキンがまたも拳銃を手に小さくなっていた。

「いたぞ！」

元来た住宅街を、ダウダルが指差す。その五十メートル先で、件の奴隸が腕を縛られたまま逃走していた。強風が頭を覆う麻袋をむしり取り、色濃いブロンドがたなびく。

「ぼさつとすんな、追え！」

カヴィルの怒号でダウダル、スプリング、ラスキンの三人は得物を手に野次馬を押し退け、住宅街へ駆け出した。その後に続こうとしたカヴィルが、はたと振り返る。マツキニーが、その場に立ち尽くしていた。

「ぐずぐずするな！」

カヴィルの命令は、副官の耳に届かなかつた。ここに至り、果たしてあの性奴隸を追う価値があるのか、マツキニーは疑問を抱いた。交通事故による心身のショックもあり、精神に乖離が生じていた。自分は何をしているのか。どうしてこんな事になつてているのか。ややもすると、別的人生があつたのではないか。秒毎に小さくなる奴隸の中を見つめ、彼女の逃走を阻む理由が何処にあるのか、ぼんやりと夢想していた。そして不意に、自分の両親はどんな顔をしているのだろうと、鍵を掛けて久しい記憶を紐解きかけた。

護送車を先導するパトカーから、二人の警官が這い出てきた。どちらも消耗しきつた様子で、一方は無線機を口許にあてがい、もう一方は腰の警棒に手を掛けている。警棒を抜いた警官が、マツキニーに誰^{すいか}何を試みるや、鋭い破裂音が警官の足下に小孔が穿つ。

「行け！」

拳銃を構えたカヴィルがマツキニーの肩を掴み、住宅街の方角へ押しやる。マツキニーの背後で、更に三発の威嚇射撃が放たれた。駆け出したマツキニーの心に、先の迷いはなくなつていた。最早、後戻りして済む話ではない。覚悟で踏ん切りを付ける猶与もなく、マツキ

ニーは人の心をもぎ捨てた。奴隸誘拐犯の逮捕か、はたまた囚人の脱走に加担した闖入者の拘束にか、応援に寄越されたパトカーのサイレンが迫っていた。

奴隸蛮行【2—8】

乱心する敗北者を尻目に、ブリジットはトートバッグの肩紐を正し、店の出入口を目指した。豪雨が全方向から店の外壁を叩き、会計の殴打音を搔き消していた。規格外の降雨に利用者がどよめき、そこに戸外から数人の避難民が駆け込んできた事で、店内は騒然となつた。爆増した湿気でカビ臭さは倍加し、住処が水没したドブネズミが縦横無尽に駆け回る。出入口の傍らで、用心棒が濡れ鼠となつて放心していた。

狂乱の中、ブリジットは懷中時計の蓋を弾いた。——二四〇時……うん、これなら大丈夫、だよね。タイムテーブルの修正が不要と断じたブリジットの正面、サヴァエジ日用品店の出入口から三十メートル離れた道路上を、ずぶ濡れになつて走る影が認められた。身の丈は約百六十センチ。ブリジットのそれとよく似たブラウンのメイド服を着て、こちらへ向けて走つている。——女の子……性奴隸、だよね？ 濃いブロンドの髪を振り乱す少女の姿を、ブリジットは何処か不自然に感じていた。両腕を振らずに走つているというのもあるが、自身に通ずるものも少女から氣取つていた。

ずぶ濡れの少女はそのまま置物の用心棒の脇を抜けると、出入口で蹴躡いて、店の床へ肩から盛大に転がつた。異常な来訪者に、店内が新たなぎわめきに揺れる。多様な憶測を交わす野次馬を搔き分け、ブリジットは我先にと少女の許へ膝を突いた。少女の両腕は後ろ手に拘束されており、口にはタオルで猿轡が噛まされていた。ブリジットは肩で息をする奴隸少女の身を起こしてやり、猿轡を解いた。それから、痛々しい喘鳴ぜんめいを発して礼を述べる美少女の顔を見定めた。——やつぱり！

「リタでしょ？ 何があつたの？」

少女が目を丸くして、自分を介抱する同胞に向き直つた。

「うそ、信じられない。ブリジット？」

首肯するブリジットに、リタなる少女は安堵の表情を浮かべたのも束の間、慌てて何か語を発しようとして、激しくむせた。

「落ち着いて、何が起きてるの？」

「警察に通報して……急がなきや、貴女も危険なの……！」

「警察」の単語に、野次馬が再びどよめく。そこへ、店の用心棒が人波を割つて現れた。

「あんな、嬢ちゃん。何があつたか知らねえけど、他人の敷地でそう勝手されちやあ困るんだよ。ここにポリ公を呼ぶつて？ ふざけちやいけない」

奴隸を卑劣に見下ろす用心棒に、リタは反論しようとしてむせた。旧友の背中をさすりながら、ブリジットは通報は不要と断じていた。彼女の耳は雨音の中から、こちらへ接近しつつある、パトカーのサイレンを拾っていた。加えて、もつと近くに迫る複数の足音を。

「いいか？ 迷子なら、俺がおうちまで親切に送り届けてやる。だから警察を呼ぶ必要はない。オーケー？」

「ああそりゃ、必要ない」

ガシヤン、とハリウッド映画で馴染みの音に、場の全員が振り返った。人々の視線の先に、そばかす面の男が、ポンプアクション式のショットガンを構えて立つていた。その銃口は、既に用心棒へ向かれていた。そばかす面に遅れて、更に四人の男が後方から走り現れる。各々の手には、例外なく銃器が握られていた。男の一人が前に歩み出て、降伏して両手を上げる用心棒の顎を拳銃で小突く。

「悪いな、兄弟。ちよいと場所を借りるぜ」

ブリジットの腕の中で、リタの身体が強張り縮こまつた。か細い声で謝罪を述べる友人——奴隸調教施設での同期——に、ブリジットは朗らかに応じた。

「大丈夫だよ、すぐに帰れるから」

一分前まで所在さえ知れなかつた親友の気休めに、リタは頷きながらも震えを抑えられなかつた。——そう、大丈夫。その言葉は、ブリジットの内では氣休めなどではなく、確實に掴み取る未来を保証するものであつた。彼女に課された任務は三つ。一つは、主人が愛飲するウイスキーを持ち帰る事。第二に、偶然に再会した親友を、眼前の不埒な変態集団から救い出す事。最後に、主人の帰宅までに夕飯の支度

を済ませる事である。

——とは言つたものの、どうしたものかな……。店の床を濡らしてにじり寄る五人組を見上げ、ブリジットは積み上がった雑務に頭を悩ませた。

- 二〇一〇年 四月一五日 一二四三時
ヘリフオード・サヴェジ日用品店において、奴隸拉致犯による立て籠もり事件勃発。

奴隸蛮行【3—1】

【3】

神が六日間で仕上げた球形のジオラマに、穢らわしい綿埃が付着した。昼食時を過ぎた春のイングランド上空に、時節をわきまえぬ乱気流が進駐していた。灰色の煙幕が滯留し、粘ついたネズミ色の影を地上に落とす。雲間に閃くねじくれた雷光は、下界であえぐばかりの人間を嘲っていた。

そんな煤けた灰色のただ中に、場違いな色がぼうと浮かび上がる。濶んだ灰褐色を透かして、原色の青が騒々しく明滅する。神が、塗装前のマスキング処理を忘れたのではない。罪深き人間が、創造主の拙い工作に悪戯しているのだ。

荒れ狂う風雨の下、ヘリフォードの街は機能停止に陥っていた。臨時の帰宅ラッシュは濁流と化して幹線道路を襲い、方々で交通事故が続発した。数ある事故現場のひとつでは、炎上する車輌の対処にあたっていた消防車の横つ腹に救急車が突っ込み、双方の隊員に市民を上回る被害が生じた。

平日のまだ昼過ぎでありながら、大半の商業施設が閉店の札を下げた。血相を変えた店主が従業員を家へ追い返す光景が散見される中、悪天を顧みず営業を続ける店舗も確かに残っていた。競合相手のいない市場で一時の寡占を享受する目論見だろうが、核戦争の最中にシエルターから繰り出すのは火事場泥棒くらいである。実際、住宅街から市民の姿は消え失せ、家屋の戸口は固く閉ざされた。他者との競争なくして、資本主義は成り立たないのである。そんな災厄のただ中に、ひときわ煌々と青い輝きを放つ施設があつた。

生命を脅かす暴風雨にもかかわらず、灰色の住宅街の角地に建つサヴェージ日用品店の玄関先は、大量の来客で賑わっていた。平屋の建物は、全周から複数の眩いスポットライトの照射を受け、曇天の街並みをよそに白昼の砂漠と見紛う有様であった。店舗敷地に二十台を超える車輌群が殺到し、五十人を上回るギャラリーが傘も差さずに動き回っている。群れだつた車輌は店の敷地に収まらず、隣接する車道を

埋め尽くすまでに至った。車種は殆どが四ドアのセダンで、ごく一部にSUVや大型のバンが認められる。一見するとクルマ好きのの集会だが、どの車にも個性的な改造は見受けられない。だとしても、それらは目に見えて善良な一般車からかけ離れていた。塗装は何れも白を基調としており、側面に青と黄の格子模様を配して外観を統一している。車体を支えるサスペンションにはことごとく負荷が掛かり、縁石に乗り上げようものなら底面の擦過は避けられない。大半がルーフに回転灯を備えており、人工着色料じみた青い閃光をのべつ幕なし振りまく。没個性の強制は来客へも及び、一様に防水仕様の黒い上下、螢光イエローのジャケットという厳格な服装規定に従つていた。全体主義的ながらも強烈なアイデンティティは、くすんだ街路に悪目立ちするばかりであった。外衣の随所で断続的に光る反射板が、彼らの所属を生氣なく示す。曇天の下で煌めく日用品店を前に、ウエスト・マーシア警察の面々は俯き、冷雨に唇を噛むばかりであった。

奴隸蛮行【3—2】

寒々しい集会の場に、この数十分でちつとも珍しくなくなつたサイレンの音が近づいてくる。数人の警官が音の方角を見やると、一台のパトカーが数ブロック先で急カーブを切り、自分たちの方へ真っ直ぐ向かってくるのが見えた。荒々しい運転とハイビームの光芒から危険を察し、付近の警官が路肩へよける。その数秒後、セダンのパトカーは急ブレーキに尻を振り乱して濡れた路面を滑り、直前まで新米巡査が立っていた場所を通過し、別のパトカーに車体の助手席側が接触する寸前で制動を果たした。長大にのたうつブレーキ痕が、路面と先発の警官らの鼓膜に刻まれていた。

無秩序なパトカーからのサイレンが止み、運転席から中年の制服警官が顔を覗かせる。自分が原因のどよめきを意に介さず、中年は顔面蒼白な新米警官を呼び寄せて情報を聞き出し、事が済むなり邪険に追い払つた。それから駐車位置もそのままにドアを乱暴に押し開け、シートを支えに車外へ這い出た。中肉中背の男は雨除けに額へ手をかざしたが、大自然はその浅ましい試みを一笑に付した。抵抗むなしく濡れそぼる中年警官の顔に、折り重なる雨雲に劣らず折り重なつた皺が彫り込まれていた。

アンブローズ・バグウエル主任巡査部長は、三日前に五十六歳の誕生日を迎えた。高校卒業と同時に警察官となり、現場一筋の三十余年を過ごした。若い頃に妻が「たわしちゃん」と愛でた毛根はすつかり後退し、僅かな最終防衛ラインには白いものが目立つ。肉体の限界を痛感しており、ここ数年で退職の単語がよぎらぬ日はなかつた。朝は節々の痛みで目覚めるのが常で、肥満ぎみの自重をやつとで支えている。人生の折り返しもだいぶ過ぎ、辞書が謳う正義と社会の不条理に挟まれて磨耗する日々は、反吐の海に溺れる心地であつた。実際問題、バグウエルはこの三日前に反吐と仲良くやつていたし、大本を辿れば、二年前から反吐の大海上で浮き沈みしていた。

アンブローズ・バグウエルの悪夢は今より二年前、母校の同窓会に出席した事に端を発している。会場に踏み込んだ直後、久しく再会し

た同輩と手を握り交わそうとして、バグウエルは血の気が引く心地を味わった。旧友は例外なく奥さんを同伴し、仲睦まじげに腕を組んでいた。周囲を見渡せば、単身での参加者はバグウエルの他になかった。

バグウエルの脂の乗った背筋を、冷たい滴が伝う。彼の不安に応えて、旧友は出会いしなに妻の所在を尋ねてきた。バグウエルはその都度「カミさんの都合が合わなかつた」と自己弁護を重ね、級友とその妻は気の毒そうに眉根を寄せた。如何な馬鹿でも、五十を過ぎれば物事を嫌でも察する。彼らの声音に含められていたのは同情ではなく、自己中心的な旦那への蔑みであつた。遠い過去には、花も恥じらうほど愛し合つたバグウエルとその妻であつたが、今やその関係は寝室を別とするまでに冷えきつっていた。

バグウエルは疎外感と劣等感、過去には同列であつた友人との間に穿たれた涸れ川^{ワルツ}に打ち据えられ、ふらふらと会場を退出した。学生時代の思い出話に花を咲かせる参加者に、彼の消失に気付く者はいなかつた。

バグウエルは当て所なく彷徨い、嫉妬に狂つて独り飲みつぶれ、酒場の用心棒につまみ出された。路上で幼子のように泣き崩れる中年を、通行人が鼻白んで嘲つた。衆目から顔を伏せて丸くなり、バグウエルは夜通し羞恥を噛み締めた。

翌朝、自らの吐瀉物で窒息しかけて跳ね起きたバグウエルは、霞む朝日に膝を折つて両手を組み、妻への贖罪に余生を投じようと誓つた。温かい家庭像への羨望が、バグウエルに再生の機を与えたのだ。それまで露とも顧みなかつた家庭への帰属を、バグウエルの本心はは渴望していた。それに、ろくに出世せず、預貯金もない自分になびいてくれる女など、妻の他にいるはずもない。一度生じた憧憬に気付かぬ振りなど出来ず、その心根を急速に侵食した。

この悔悟を境に、アンブローズ・バグウエルは更正の日々を送つた。毎晩のビールを断ち切り、麦汁に代わつてヨーグルトと野菜スムージーを燃料とした。早朝のフィットネスに励み、弛みきつた腹を引っ込ませる努力をした。成果はちょっと出た。退勤後は何処へも寄り

道せず、涙ぐましく貯金に勤しんだ。誰にも内緒で開設した預金口座を、我が子のように慈しんだ。無味乾燥な日常を脱し、バグウエルは幸せを噛み締めていた。退職予定日を翌年の妻の誕生日に見据え、退職に備えて業務の引き継ぎに奔走した。年甲斐なく心が踊り、夢のように充実した二年間であった。危なつかしいほどに。

今から三日前の夕刻、バグウエルは定時で退勤し、足取り軽く帰路に就いた。誕生日を迎えた自分を、愛する妻はどんな言葉で迎えてくれるだろうか。ひよつとすると、忘れてしまっているかも知れない。妻のそんな抜けた部分も大好きだつたと、思い出し笑いに頬が緩む。期待を抱くバグウエルが自宅玄関をくぐった時、夢はそつと幕を下ろした。

そこに妻はいなかつた。新婚祝いで買ったダイニングテーブルに、素つ気ない書き置きが残されていた。長年連れ添つた夫の総合成績が、たつた一枚きりのメモ用紙に収まっていた。

半日後の早朝、バグウエルはビール壇を手に、自宅前でゲロ池に沈んでいるのを隣人に通報され、部下に回収された。以来、署内の誰ひとりとして、彼に触れる者はいない。

自ら生み出したエゴに裏切られ、バグウエル感情のゴミ箱を求めては荒れ狂つた。入念に組んだ退職計画を破り捨て、妻を思い出す品の一切合切を燃やした。へそくり預は金聞いた事もない銘柄の酒に変わり、味も分からぬままゲロに帰した。ちゃんと出勤はしていたが、数百本の信管が刺さる不発弾が約束する安全などありはしない。そんな男がサヴァエジ日用品店での立て籠もり事件の指揮を執ると知つて、果たして人質は正氣でいられるだろうか。

奴隸蛮行【3—3】

アンブローズ・バグウエルは新米警官から訊き出した地点を目指して、靴底を引きずるように歩いた。三日前の誕生日から、彼の表情筋は憎惡以外の形を取らなくなっていた。季節外れの寒氣に手指の感覚は失われていたが、代わりに膝の関節が粗挽きされるような痛みを訴えた。

下半身の疼痛にバグウエルの限界が訪れると同時に、目当ての車両を視界に捉えた。その巨大なバンは塗装こそ他のパトカーと変わりないものの、アンテナの針山がルーフに林立していた。近くの地面で無数の配線がのたくつており、途中から一つに束ねられてバンの内部に引き込まれている。バグウエルはバンのリアゲートに迫ると、真っ赤にかじかんだ拳を叩きつけた。せわしない殴打に扉が開かれると、戸口のドアボイを押し退けて車内へ踏み入った。バンの荷室は薄暗く、精密機器が散乱して立つ場所を探すにも一苦労だった。三人の制服警官が車内に詰めており、各自が複数の液晶画面と睨み合っている。凡庸な警察車輌を装うこのバンには、凶悪犯罪に対抗するハイテクの粹が尽くされていた。付近に展開する警察官の通信基地局としての機能は勿論、国内のニュースやSNSをリアルタイムで追跡し、有事とあれば監視カメラをハッキングして映像を同期、さらには偽りの映像を流して欺瞞もこなす。それはさながら、移動式の司令部と呼べる代物であった。

「現状はどうなってる?」

防水制服の滴を払うバグウエルの問い掛けに、最奥の席の巡査が振り返る。その目元に疲労と、挨拶もなく自分の縄張を濡らす上司への敬意が表れていた。通信監視を務める巡査は口を固く結び、人質事件のあらましが整理されたクリップボードを差し出した。労力の染みた資料へバグウエルはは一瞥もくれず、上着のポケットへ両手を突っ込んで沈黙を貫いた。資料が空を漂う十秒が過ぎ、監視官は肩をすくめて目頭を揉んだ。——我らが巡査部長殿は、外様のデスクワーク組に口頭での要旨説明をお求めだ。監視官は舌打ちを寸前で押し殺し、

鼻梁をすり落ちる眼鏡の位置を直した。疲弊した脳が、決死の合理化を以て自我の維持を試みていた。「大切な仕事道具に、ゲロが付かずには済んだじやないか」と、祈りめいた呪詛に神経をつなぎ止めると、監視官は埠外の任務に取り掛かつた。

監視官が手垢にまみれたマウスを握るや、矢印形のポインターが五基のディスプレイ上を縦横無尽に飛び交う。目まぐるしく切り替わる画面と、おぞましいビートを刻むのクリック音の合間を縫つて、監視官の要旨説明が挟み込まれる。死にゆく脳細胞の処理限界を振り切る負荷に、バグウェルは眩暈を覚えた。許容量を超える負荷に顔を背けるロートルをよそに、端末を駆る巡査の瞳が爛々と煌めき、不規則な情報の濁流から砂金を洗い出す。

——四月十五日、十二時四十分。現地の通報を統括する管制室に、一件の通報が飛び込んだ。

「黒いバンが、囚人護送車に突っ込んだ」

この通報を皮切りに、市民からの立て続けの緊急連絡に電話回線がパンクする。

「囚人服の男が路地に向かつて走っているのを見た」

「二十くらいの男たちが、犯罪者の脱走を手引きしたみたいだ」

「銃を持った連中が、女の子を追いかけてる」

「うちの子が、何処にもいないので！　早く連れ戻してよ、こんな天気じゃ死んじやうじやない！　首輪は緑色の革製で——」

十二時四六分。個人の携帯電話が発した十七件目の通報に、現地の警察官は戦慄した。

「もしもし、え？　事件か事故かだつて？　そんな場合じやないんだつて。サヴェジ日用品店つてきな臭い店なんだけど、そこに武器を持った連中が押し寄せてるんだよ。人数は……うわっ！　おい、今の聞こえたか！　銃声だよ！　こんなとこいられない！」

市民の嘆願を聞きつけ、法の尖兵が雄叫びを上げた。ウエールズ各地でパトカーのサイレンが唸り、手漉きの公安職員は一も二もなく現場へ急行した。法執行官らが現地に到着すると、既にネタを嗅ぎつけた地元マスコミがうようよしていた。警察は出歯龜の排除に奔走す

る合間に、サヴェジ日用品店の従業員を自称する外国人ふたりに任意同行を求めた。また、立て籠もり犯が籠城を始める前に解放された民間人へも事情聴取が行われ、これが奏して本件に関する貴重な情報が得られた。なお、店舗従業員らは不法滯在と麻薬密売のかどで、拘置所での追求が確定している。

短時間で作成された資料によれば、本件の容疑者はカーディフ出身の無職、ジム・カヴィルを筆頭とする、五人組のならず者であった。四月十五日の午後一二時四三分、サヴェジ日用品店を武装占拠した犯行グループは十五体の高級奴隸を人質に取ると、店内にバリケードを築いて籠城、徹底抗戦の意図を表明する。事件解決の初期段階として、犯罪交渉人が籠城犯と電話連絡を取ると、電話口のカヴィルは荒唐無稽な条件を提示した。一つ、自分たちを安全快適に離脱させるVIP車輛の手配。二つ、「金塊でいっぱいのスーツケースをいっぱい」。加えて、店舗に接近する動きがあれば、人質の殺害もいとわぬ考えをほのめかせた。受話器の間近で銃の撃鉄を起こす音を残し、カヴィルは電話を切つた。降りしきる豪雨の下、法の守護者たちは不平等条約に頭を垂れる他なかった。

奴隸蛮行【3—4】

事件の要旨説明を果たし、監視担当が冷えたコーヒーを啜る。己の事前演習なしの仕事振りに満足しており、バグウェル「くそ」巡査部長の如何なる問いかんにも応じる態勢が整っていた。バグウェルは毛の寂しい肌寒いこめかみを搔き、カフェインで一服する部下を見下ろした。

「……それで、そこまで把握しながら、どうして機動部隊を突入させない？」

素つ頓狂な物言いに、監視官はむせ返った。悶える同僚をひとりが介抱に駆け寄り、残るひとりは信じられない低脳を目の前に意識が飛んで、警察無線の処理どころではなくなった。手前てめえで説明を求めておきながら、巡査部長殿は話半分も理解してなかつたのである。

監視官は想定外のパンチから持ち直すと、鼻血が混じるコーヒーを袖で拭い、床に落とした眼鏡を掛け直した。

「いいですか？　たつた今申し上げたように、人質は高級奴隸です。ここまでお分かりですね？」

「当然だろう。さつさと突入させたまえ」

監視官は大きく仰け反り、その目を覆つた。その心中は、事件を解決するより先に、目の前の無能を介護施設に叩き込む欲求に駆られていた。

実のところ、バグウェルは本件の責任者などではない。本来の担当者は別におり、バグウェルよりずっと上級の刑事が現場を統括する手筈だった。この人事に、天災とそこに付随する人災は考慮されていかつた。暴風雨と交通事故で幹線道路に動脈瘤が生じ、当初の担当者は渋滞に囚われて身動きが取れなくなつていた。当局は代理の刑事を求めたが、護送車から逃亡した凶悪犯の対処もあり、手近な刑事資格者は出払つていた。人質事件に割ける人手は、現場近くの駐在警官に頼るしかなく、当局は刑事が到着するまでの繫ぎにバグウェルを割り当てざるを得なかつたのである。

「こちらをご覧下さい」

監視官は佇まいを正すと、一枚のディスプレイをペンで指し示した。液晶画面に、四つの似通つた動画が同時再生されている。それはサヴエジ日用品店内の防犯カメラのリアルタイム映像で、それぞれ別の区画を写していた。くすんだレンズの向こうで武装犯が往来し、床に座る人質の集団に警戒を向けていた。色あせて不鮮明ではあったが、店内の切迫感を伝えるには十分だつた。

「ご覧の通り、容疑者は正面出入口と会計後ろの裏口に、什器を使つてバリケードを築いています。この質量の障害を取り除くのは時間が掛かります

建物正面は一面ガラス張りですが、鋼鉄製のグリルシャッター（目の粗い格子状の防犯シャッター）が隙間なく下りています。シャッターを構成するパイプは工業用バーナーで焼き切れる太さですが、飛び散る火花は目立ちますし、正面からの接近はそれこそ現実的ではありません。

手段がどうであれ、容疑者から気付かれずに作業を終えるのは困難です。突入の意図を悟られれば、人質に危害が及びます」

「だつたら、その前に済ませばいい。何の為に爆弾があると思つているんだ」

監視官の頭蓋の底に、ふつふつとあぶくが生じる。

「……巡查部長の仰る通りです。建物の適切な箇所にプラスティック爆薬を仕掛ければ、ガラスは元より、錠の落ちたドアや堅固なシャッターも破断は容易でしょう。ええ、誰しもそう思い至りますとも」監視官はペンを持つ指を震わせ、ペン先で防犯映像のあちこちを連打した。

「だからこそ、容疑者はそれを見越して発破が想定される場所……つまり、裏口ドアや窓ガラス、壁の薄い箇所に、人質を分散して配置しているんです。これでは手が出せませんね？」起爆したら、ドアやガラスの破片が人質を襲うんですから」

噴火も秒読みの激情に胸を上下させる監視官を、バグウェルは車内に入った時と変わらない、不遜な半眼で傍観していた。やがて呆れに鼻息を漏らすと、脂肪の乗つた指で防犯映像を指した。

「人質はたかが奴隸だ。騒ぎを余計に長引かせる方が、警察の威信に
関わる」

殆ど動きのない映像を見据えるバグウエルの視界の外で、監視官は
口をぱくぱくさせた。

「……お言葉ですが、高級奴隸に被害が及んだ場合、相当なバッティング
を被ります。ここは慎重を期すべきです」

「おいきみ、随分と性奴隸の肩を持つじゃないか」

バグウエルの冷笑に、三人の技術職が凍り付く。当人が作り出した
冷たい空気に、バグウエルは気付かなかつた。

「第一、人質は全員が性奴隸なんだろう？ 犠牲者が出たところで、賠
償責任を問われるのは奴隸の販売元で——」

「不用意な発言は控えて下さい。メディアに聞かれたら、それこそ威
信に関わります」

びしゃりと放たれた戒めに、バグウエルは明らかに不快感を示し
た。

「言動に気を付けろよ若造、誰がここを取り仕切つていると思つてい
る」

バグウエルは指で監視官の胸をつつき、昨夜のアルコールが残るた
め息を車内に撒き散らした。それから反抗の意も顕わな監視官に背
を向けると、片耳にヘッドセットをあてがう通信担当の肩を叩いた。
「待機中の警察官に、即時の突入を命じろ。茶番はもうたくさんだ」

感情と諸々が抜け落ちた指示に、これまで黙つていた通信担当の堪
忍袋の緒が切れた。肩に乗るぶよぶよの手を振り払い、ヘッドセット
をかなぐり捨ててバグウエルの襟首に掴み掛かるイメージが、その脳
内に出来上がつていた。通信担当が衝動に突き動かされてバグウエ
ルへ振り向いたその時、憎い上官の背後で別の動きがあつた。

奴隸蛮行【3—5】

バンの荷室を、敵意の籠もる足運びが揺るがした。バグウエルの上半身が大きく左へ傾くや、通信担当に触れていた手が虚空を手繰る。バグウエルは外力に対抗して肥えた自重を支えようとしたものの、配線につまずいてリアゲート脇の内壁に背中を打ち据えられた。制服の胸元を、青筋の浮いた腕が揉みくちゃにしている。無能上司と鼻が触れ合う距離で、監視担当官が激昂に息を荒げていた。

「常識がないのも加減しろくそ野郎！ 突入なんかさせられるか！」激しい搖さぶりにバグウエルのシャツのボタンが弾け、車内を跳弾する。

「……きみ、この手は何だ。こんな真似をして、ただで済むと思つていいのか？ 今なら情状酌量の余地を与えてやる」

狹まる氣道から絞り出した警告など歯牙にも掛けず、監視官の両手は力がこもる一方だった。バグウエルは努めて平静を繕おうとしたが、その瞳は二十あまり年下の男が向ける敵意に畏れをなしていた。情報班のあと二人が慌てて監視官を引き剥がすと、バグウエルは大げさにせき込んでみせた。

「この件は上に報告するからな、覚悟しておけ」

猫背で凄む姿は、尻尾を卷いてずらかる寸前の子犬に似ていた。

バグウエルと監視官が物理的に引き離されると、通信担当が先のクリップボードをバグウエルへ突き出した。同僚が一足先に憤懣をぶちかましたので、彼は牙を剥くタイミングを逸していた。

「必要な情報は、全てここに記されています。どうか確認を願います」「それならさつき聞いただろ。時間の無駄だ」

荷室の隅にへたり込んで喘鳴を発するバグウエルの頬に、クリップボードの角が突き刺さる。

「口外できないからこそ、文書にしているんです。読んで、それから理解して下さい。どうやら巡査部長殿は、先の説明で言外の意図を察していただけなかつたようですので」

バグウエルは通信担当の言葉尻に胆汁がこみ上げたものの、荷室に

怒れる獅子を増やすのもぞつとせず、クリップボードの拝見を甘んじて受け入れた。

資料の前半には、先に監視員が説いた事件のあらましに加えて、五人の容疑者の来歴、判明している容疑者の武装状況、囚人護送車に衝突した盗難車の出所が明記されていた。いずれの容疑者も小悪党の域を出ず、犯罪歴は月並みなごろつきと同然であつた。これら性をその甲斐性くらいしか保てず、バグウェルは資料から首をもたげた。「これがどうしたつて？」

「いいから続けて」

目下からの不当な扱いに、バグウェルの自制のヒューズが焼き切れ。が、通信担当の軽侮の視線を受けるや、すぐすごこと資料の默読に戻った。

情報班が重要視する事項が、資料の後半に集約されていた。そこには人質全員の名簿が綴じられており、各々の顔写真や生年月日、健康状況、果てには奴隸となる前後の来歴が具に記されていた。リベラル団体向けのフルコースである。捜査資料を今度こそ読みすると、バグウェルは眼精疲労を演じつつ問い合わせた。

「こんな荒い映像で、どうやって奴隸の身許を特定したんだ？」

監視担当が鼻で笑つた。背中を壁に預けて両足を投げ出しており、業務への復帰は絶望的である。諦めの境地に達したため息をつき、通信担当は再び仕事の手を止めた。情報班の苦悩の由縁は、かつてヒトだつた少女らへの憐憫ではなかつた

「なんにも難しくありません。タグが勝手に教えてくれますから」

現代英國において『タグ』という単語が発せられた時、それはほぼ例外なく『奴隸個体識別および防犯追跡装置』を指す。その名の通り、奴隸の位置情報を四六時中追跡するGPS発信器であり、個体の盗難や脱走時の対処を主眼とした多機能端末である。装置が発する信号は奴隸の所有者のみならず、奴隸に関与する犯罪を抑止する観点から、今日では各法執行機関へも開示されている。あえて言及するまでもなく、法執行機関にはウエストマーシア警察も含まれていた。

一秒でも早く自分の仕事に戻るために、通信担当が早口に模範解答

を並べ立てる。

「本件で最大の問題は、人質の所属……つまり、奴隸の雇用主にあります。名簿上の三名が警察に直接の資金援助を行つております。少なくとも五名は何らかの形で政界に影響を持つています。彼らが愛玩する奴隸に危害が及べば、その問責が警察に向くリスクが生じます。ここまでは理解いただけましたね?」

死にかけの脳細胞が返答する間は置かれなかつた。

「……最悪なのは、容疑者が立て籠もりに選んだ店舗です。サヴェジ日用品店は、以前から麻薬取引でマークされていました。人質が日常的に当該店舗を利用していて、それをメディアが嗅ぎつけたら、こそつて警察を糾弾するでしょう。事件解決どころか、マスコミを遠ざけるだけで手いっぱいなのが現実です」

「近所に凶悪犯まで放たれたしな」

勤労意識を搔き集めた監視官が、自分の席に戻る。

聞いた内容の五割方を噛み砕き、バグウエルはやつと入署一年目の巡査に近づけた。

「C.O.19（ロンドン警視庁の銃器犯罪専門部隊。S.W.A.Tと同様の武力介入を行う）の出動要請は済んでいるのか？」

この日初めてバグウエルが発した「それらしい」単語に、情報班の面々が目を伏せる。

「三十分前に先発隊が派遣されましたが、到着は早く見積もつて三時間後です」

通信担当の疲れ切つた物言いに、バグウエルの顔が紅潮する。

「そんなに掛かるものか。ヘリのひとつや二つあるだろう」「正気ですか？　この嵐では自殺行為ですよ！」

通信担当が、埃にびっしり覆われたデイスプレイを指差す。事務職の不衛生に嫌味を吐く寸前で、バグウエルはそれがイングランドの最新の気象図だと気付いた。ブリテン島を、上空から禍々しい单眼の怪物が視姦している。通信担当が天井を仰ぎ、事務椅子が軋みを上げた。

「陸路だつて使えたもんじやありません。大雨で、幹線道路は何処も

渋滞です。首都警察^{ヤード}の到着を待つ間に、マスコミが規制線を突破するでしようね」

仰け反った体勢から一転、通信担当は腰を曲げてうな垂れた。

「それこそ、S A S の手でも借りなきや——」

「S A S だと？」

不穏な声音に通信担当が見上げると、全盛期のソヴィエトより鮮やかなバグウエルの赤ら顔があつた。誇張ではなく、頭頂部から湯気が立ち上っている。その手の中で、樹脂製のクリップボードに亀裂が走った。

「S A S だと？　冗談じゃない！　あんなごろつき連中の手など借りるものか。国家の寄生虫どもめ！」

上気したバグウエルの地団駄に、壁に掛かるコルクボードが落下する。中年の癪癩に、情報部の三名は啞然となつた。

警察の手に余る凶悪犯罪には、往々にして軍特殊部隊の介入が見られる。支援対象は国内に限らず、一九七七年のルフトハンザ一八一便のハイジャックでは、新生間もないドイツ警察特殊部隊の支援に、S A S からアドバイザリー一名が派遣されている。国際テロが頻発する昨今、警察と軍の連携は強まりつつある。

そういうつた理屈が、アンブローズ・バグウエルには通らない。地元警察の制服に袖を通してこのかた、バグウエルは三つの人種に憎悪を抱いている。一つ目は、職務質問に眞面目に応えないS A S 隊員。二つ目は、酒場でしょっちゅう喧嘩騒ぎを起こすS A S 隊員。それから、夜半にピンポイントで自宅前にゲロ爆弾を落としていくS A S 隊員である。元S A S 隊員の暴露本はベストセラー入りが確約されているので、書店はショーウィンドウを黒ずくめの戦闘員の表紙で埋め尽くす。そのガラス一枚を挟んだ先で、現役のS A S が噛み煙草を道路に吐き捨てているのも知らずに。市井は彼らを手放しに持てはやし、酒場の上客と崇める。だがバグウエルにとって、S A S は単なる田舎のチンピラでしかなかつた。喧嘩の仲裁に入った警官を下着姿に剥いて嘲る、最低最悪のろくでなしだつた。

驚掴みにした帽子を壁に叩き付けたところで、バグウエルの発作に

一旦の収束が訪れた。制服は乱れ、不慣れな運動に肩を上下させてい
る。荒い呼吸の合間を縫つて、かすれた声が発せられる。

「いいか、S A Sなんかお断りだ……。やつらから接触があつても、絶
対に応じるな」

「ですが——」

通信担当官の正論に、癪癩の第二波が寄せる。不条理を乗せた怒号
が腫れた声帯を震わせる。上官の乱心に通信担当が身構えると同時
に、バンの荷室が闇に包まれた。

突然の停電に、その場の全員が慌てふためいた。四人の男が浮き足
だつてぶつかり、なにか重い物が倒れ、短い悪態が飛び交う。情報班
は機材の再起動に起動スイッチを連打し、ヘッドセットでマイクに語
り掛けたが、ハイテク機器が眠りから覚めるることはなかつた。

「どうした？ なにが起きたんだ？」

「知りませんよ！」

「だつたら原因を突き止めろ！」

「やつてますよ！」

プロらしからぬ返事にバグウエルは遺憾を抱き、通信担当は分から
ず屋にマグカップを投げつける誘惑に駆られた。荷室に明かり取り
はなく、今ならざくさに紛れての闇討ちも難くない。悪魔の囁きに
机の上を手探りし、気づけば手中からカップの感触が消えていた。リ
アゲート付近から鈍い衝突音と情けない悲鳴が生じ、通信担当は自ら
の愚行に身をこごめた。聞き苦しい呻きと、激しい悪態が続いたせい
で、何者かが戸外からリアゲートを叩く音に、車内の四人は気づかな
かつた。罵声のエコーに満ちる荷室に突如、一條の光が差し込んだ。
「バグウエル巡査部長はいらっしゃいますか？」

開け放たれたリアゲートの先に、さつきバグウエルが轢きかけた新
人警官が立っていた。一筋の稻光が瞬き、荷室の様相が明るみに出
る。ひっくり返したおもちゃ箱みたいな車内に、壊れかけの警察官
の人形が四つ転がっていた。しかも、その内の一體はうつ伏せで泥だ
まりに浸かっており、新人警官は状況を把握できず混乱した。
「ノックくらいしたらどうだ

新人は「しましたよ」と言いかけて、泥まみれで身じろぐバグウエルの姿にぎょっとした。腹に据えかねる上司とはいえ、その額から鮮血が滴っているのは、気分の良い光景ではない。床に倒れ込むバグウエルの傍らに、空っぽのマグカップが三つ転がっていた。新人が泥と認識した液体は、濃く煮出したコーヒードームだった。情報班の三人は互いに顔を見合わせつつ、巡査部長を襲つた“不運な事故”を理解した。誰の戦果かはさておき、嫌なやつに一矢報いた非公式な事実が、三人のアイ・コンタクトで共有された。

「なんの用だ」

血みどろの中年を目の前に、若者は言葉を失っていた。バグウエルは役目を果たさない伝令に舌打ちしがけ、すぐに息を呑んだ。萎縮する哀れな巡査の背後から、初老の男性がぬうと音もなく現出した。その手に傘はなく、くたびれたダッフルコートの裾に水滴が滝を作つていた。

「きみ、道案内ありがとう。身体を冷やすんじゃないぞ」

男は新米巡査の肩を叩くと、今まで歩いてきた道へそつと背を押した。新米巡査は不安げに何度も振り返り、男はその度に小さく手を振つた。

若者の姿が曲がり角の先に消えると、ずぶ濡れの来客はもの悲しげにごちた。

「うちのせがれも、あれくらい素直なら可愛いんですけどねえ」

男は眉を下げつつ、悪天に不釣り合いな笑みをバグウエルに向ける。実力が伴うかはさておき、バグウエルは職業病から、男性の人相を検めた。身の丈は一七五センチほどで、肩幅が少し広い。明るいブロンドの毛髪が半分白くなり、程々に整えた口髭も同様である。全体的に肉付きが良く、コートの内側のフランネルのシャツ越しでも、ふによんとせり出た下腹部が窺える。傍目から明け透けな品定めをよそに、来訪者はバンの惨状を覗き込んだ。

「……どうやら、お取り込み中のようで」

「どちら様で？」

無愛想な誰何に、男はひょうきんに手を打つてみせた。

「いやはや、これは失礼しましたな」

男は芝居がかつた苦笑で、懐からネックストラップを引き出すと、バグウエルの眼前に顔写真付きの身分証を振つて見せた。

「近くの陸軍基地から参りました、クラプトンと申します」

英國陸軍のIDカードを前に、バグウエルの顔の左半分が引きつる。投射される不快の念を痛痒ともせず、クラプトンを名乗る軍人はコートのポケットから砂色のベレー帽を取り出し、濡れた頭に被せて形を整えた。所属部隊を示すクレストには、一対の翼を有する剣——陸軍特殊部隊・SASの徽章が刺繡されている。

「そこの騒ぎについて、ちよつと込み入ったお話をありますね」

バグウエルは両手をパンツのポケットに収めた。この瞬間で何者より憎い敵が、すぐ目の前にいる。握り締めた拳の内で、爪が掌の脂肪に食い込んだ。

奴隸蛮行【4—1】

【4】

ヘリフォードじゅうを探しても、聴覚への不快指数で、サヴェジ日用品店に比肩する施設は類を見ない。乱雑に積まれた商品が絶えず地滑りを起こし、散乱した商品を客が踏み越えていく。陳列棚は利用者の粗野な物色に蹂躪され、物品の破碎音がやむことはない。雑誌の発売日には、新刊がグラビアのページを破り取られる痛みに咆哮する。レジの奥でリピート再生されるスプラッタ映画が、十五分ごとに金切り声で時を刻む。たまに頭上から聞こえるがさごそは、ネコをも食い殺すネズミの王の健在を示している。そういうつた鼓膜を蝕む不淨の日常が、今はひとつも聞こえない。

平生に比べると、店内は不気味なまでに静まりかえっていた。（敷地面積）の空間には、決まった場所を行き来する足音と、男の低い呻り声、それから、少女のすすり泣く水音が木霊するばかりだ。薄いコンクリートの外壁を隔てた戸外では、降りしきる雨が天井を叩き、人類の油断を見計らった雷鳴が大気を引き裂く。占領下の強制収容所めいた環境音は、実際、それに近い状況から生じていた。

切れかけた螢光灯が明滅する下で、兵役年齢の男が五人、店内を練り歩いている。背骨が折れそうなほどふんぞり返るその手には、大小様々な銃器が握られている。五人の武装集団を除いて、店内に男性は存在しなかつた。もつと厳密に言えば、店内の”人間”は、彼ら五人だけだった。

五人のごろつきは、埃の舞う店内を大股で闊歩し、時々立ち止まつては、地べたで縮こまるヒトならざるものに銃口を向けた。にやける男たちの示威行為の矛先では、上玉の性奴隸らが身を震わせる。そこでは十五体の奴隸が、アウトロー五人の人質に取られていた。全員が両手を背中で縛られ、リノリウムの床に座らされている。人質の大部分が、膝を抱えて嗚咽を漏らしている。それ以外は生氣の抜けた瞳で、螢光灯に求愛するハエを追っていた。ただひとりの例外を除いて。

——ほんと、ついてないな。

ブリジットは肩を落とし、整った鼻をため息で鳴らした。他の奴隸と同じく、ブリジットの両手首も麻縄で拘束されていた。引き締まつた小振りな尻を、冷たい床が苛む。彼女がいるのは、長大な陳列棚に挟まれた通路のなかごろで、店舗の中央近くに位置していた。

ブリジットは手首をひねり、何度目かの縄抜けを試みたが、麻の戒めに隙間を作るには至らなかつたので、無用な労力とは潔く決別した。

武装集団は、奴隸たちの両足までは縛らなかつたが、その場から移動したり、立ち上がることを禁じた。この禁則を、人質らは従順に受け入れた。表面上は、ブリジットもそうしていた。誰の目からも疑いようなく、サヴェジ日用品店は立て籠もり犯の支配下にあつた。その事実を不承不承に認識した上で、ブリジットはこの窮状を脱する案を模索していた。この汚らわしい店舗から速やかに離脱し、仕事終わりの主人を温かい夕餉で迎えるという予定を、どうにかして元のレールに戻そうとした。

「……ごめん、こんなことになるなんて」

不意に対面から掛けられた声に、ブリジットははつ顔を上げた。自分の爪先から三メートル正面で、自分のものと酷似したメイド服に身を包む少女が、目蓋を赤く腫らしていた。

「気にしないで。それに、すぐに助けが来るから、心配ないよ」

言いながら、ブリジットは意識的に笑顔を繕つた。自分をこの騒動に巻き込んだ要因への嫌味ではなく、思い掛けず再会した旧友を気遣つての行動だつた。

思案に耽溺するあまり、辛氣くさい表情を浮かべていたであろう己を、ブリジットは戒めた。——一番つらいのは、この子だもの。私がしつかりしなきや。

目蓋を涙で腫らす旧友を、ブリジットは盗み見た。濃いブロンドの髪が雨に濡れて垂れ下がり、涙で薄化粧が崩れていた。それでも、見る者を惹きつける美貌は健在だつた。不謹慎ではあるが、調教施設にいた頃の彼女になかつた、儂げな魅力すら、ブリジットは感じていた。

ブリジットとリタがいる場所は、他の人質から大きく隔離された。理由のひとつは、厄介事を持ち込んだリタへの、他の人質による罵倒を収束させるためだつた。もうひとつは、額面通りの意味で、ブリジットとリタが他の奴隸から抜きん出ていたからである。社会に適合する才能が皆無なごろつき五人でさえ——むしろ、本能も丸出しひのけだものだからこそ——その二体の奴隸の質に気付いた。彼らは二体の性奴隸を他の人質より有用な交渉手段と見なし、その価値を失うのを恐れた。浅ましい皮算用でしかないが、一応は物事を考える相似をする個体がいるらしいと踏んで、ブリジットは犯行グループの練度を推し量つた。

——だとすると、ちょっと困るな……。

旧友を思いやるブリジットの脳裏で、チエスの名人戦の如き攻防が繰り広げられていた。無限大に枝分かれする未来がのひとつひとつを、ブリジットは走査していく。自分が理想とする数時間後の展望から逆算し、そこへ至る糸口を求めて、最も低リスクで確実な解を洗い出そうとした。高精度のA-Iをして致命的なエラーを吐き出す難題であつたが、小さな使用人はその最適解を弾き出した。

独力で組み上げた作戦に、ブリジットは最善を尽くしたという確信があつた。それでも彼女は、手中の案の実行に二の足を踏んだ。にわか作りの計画は、完成と同時に減点方式で採点された。ブリジットの分析眼は、垣間見えた光明の、その裏に落ちる影の規模を推し量つた。彼女が導き出した数式は、ボタンの掛け違えひとつで核爆発を起こす危険を孕んでいた。

その作戦には不確定要素があまりに多く、完璧な使用人の仕事に程遠い出来に、ブリジットは己の未熟を痛感した。さりとて、手札は限られており、プランBを熟考する猶予もなかつた。

——そう、あるものでやるしかない。

自らの主人が属する組織の戒律を胸中で反芻すると、ブリジットの深い蒼色の瞳が決然と輝いた。その奥には、必要とあらば、昆虫の踊り食いさえ辞さない覚悟が宿つていた。

—三年前—

ブリジットとリタは、奴隸調教施設での同期で、三年間の苦楽を共にした仲だった。当時、身売りのショックから記憶を失っていたブリジットに寄り添い、彼女の心を繋ぎ止めたのがリタだつた。本名はマーガレットだが、本人は愛称以外で呼ばれるのを忌み嫌つた。事業の失敗の補償に自分を売った親が与えた名というのもあつたが、一番の理由は、かの”鉄の女”マーガレット・サツチャーを想起させるためである。

薄っぺらい紙切れ一枚で人権を失つたにもかかわらず、リタは己の信念を曲げなかつた。調教施設での彼女は常に毅然として、奴隸への命令に理不尽な点が一点でもあれば、とここん食つて掛かつた。リタの論説には隙がなく、将来の商品に傷を付ける訳にもいかないので、誰もがリタの扱いに閉口した。彼女の前では、人間階級の優位は死んだも同然だつた。リタはいつしか、関係筋から『レディ・スレイヴ』の異名で畏れられるようになつた。奴隸階級に没しながら、彼女は己の高潔と正義に忠実だつた。

対して、記憶喪失からアイデンティティを手放したブリジットは悲惨だつた。その心は赤子も同然に空虚で、現実逃避に籠もる殻さえ失つていた。集団社会で弱者が淘汰されるように、同期の奴隸の八つ当たりの矛先がブリジットへ向けられるのは、ごく自然な成り行きであつた。ブリジットは現地奴隸社会のヒエラルキー最下層に置かれ、日夜、同性の陰湿な責めに晒された。理由なき無形の暴力は、丸裸の心身を着実に蝕んでいつた。

ブリジットの崩壊が秒読み段階にまで迫つた折、その日は訪れた。ある朝、ブリジットの独房めいた個室に、新たな収監者が放り込まれた。状況を飲み込めないブリジットの手を、その来訪者が握つた。
「あたし、リタ。今日からルームメイトになるから、よろしくね！」

自分とよく似た顔をほころばせる女に腕を揺さぶられ、ブリジットは唖然とするばかりだつた。それが、リタとの出逢いだつた。

奴隸蛮行【4—2】

性奴隸ふたりの邂逅は、数奇な偶然の産物であった。ある時、リタが在籍する調教施設の責任者が倒れた。救急搬送された先の病院でレントゲンを撮ると、胃のなかごろに底暗い影が確認された。リタという優秀な問題児の放つ威風が——端的に言えば、積み重なるストレスが中間管理職の胃袋を貫徹したのだ。

かくして施設のトップは緊急入院し、次点の職員に所長のお鉢が回った。新たな責任者の額を大粒の汗が流れ、前任者のやりかけの書類に染みを作つた。腹部の痛みに倒れ、ストレッチャーで救急車へ運ばれる前任者の映像が、脳裏にこびりついていた。映像は延々とリピート再生され、その内に、ストレッチャーに乗せられた患者の顔が、自分に変わつていた。

組織の欠員を埋めるのは容易だが、健康な臓器に代えは利かない。組織図の改訂を後回しに、新所長はデスクの固定電話を取つた。自分の精神と臓器の危機に直面したことで、奴隸番号一〇一三——リタという、奴隸の皮を被つた女帝の移籍が、彼の急務となつた。幸運にも一本目の電話で、彼の延命は成し遂げられた。自治領の平定に安堵すると同時に、新所長は内線のボタンを押し込んだ。

調教施設の本棟地下、奴隸の個室が連なる廊下に、肩幅の広い男ふたりの足音が響き渡つた。彼らは、調教中の奴隸を監視する守衛だつた。片方は三十代前半のスキンヘッドで、もう一方の四十代後半は、軍隊風に髪を刈り込んでいた。二人組は目的のドアの前で足を止めると、クリスマス・リースめいた鍵束でドアを解錠した。ドア脇の札には、一〇一三の番号が振られていた。

看守ふたりがノックなしに押し入つてきたので、ベッドに腰掛けるリタは眉をひそめた。即座にパーソナルスペース侵害を糾弾する声が上がるも、男らは奴隸の戯言を黙殺し、肅々と仕事をこなした。彼らでリタを両脇から宙吊りにすると、個室から引きずり出した。連行される同僚を目の当たりにした他の奴隸がパニックを起こし、ドアを叩く音が廊下を満たした。閉鎖空間に反響する阿鼻叫喚が男らの鼓

膜を痛めつけたが、その歩調を鈍らせるには至らなかつた。絶望にむせび泣く奴隸たちを尻目に、二人と一体が乗る、地上へのエレベーターのドアが閉じた。

灰色の調教施設正面のロータリーに、社章のない、白のバンが停まっていた。男らはバンの後部ドアを開くと、荷台に敷き詰められたマットレスにリタを放り、その細い腕に手錠を掛けた。

「ちよつと、事情を説明しなさいよ！」

リタは横たわつたまま、スキンヘッド目掛けて足を振り回した。彼女の中で、戦いはまだ終わつていなかつた。果たせるかな、渾身のキックは蹴りやすそうな頭に届かず、すぐにリタの両足首はスキンヘッドに押さえ込まれた。

「なによ、男ふたりして輪姦すつての？ 呆れた！ 図体ばかり大きくて、卑しいつたらない！」

噂に聞くレディの物言いにげんなりするスキンヘッドの脇から、年かさの相棒が颯爽と身を躍らせた。野太い腕でリタの首を押さえつけると、もう一方の手で罵倒の出所を塞いだ。男がリタの口元から手を離すと、張りのある唇に、ゴルフボールに似たボールギヤグが噛まされていた。

人語を奪われてもなお、リタは反抗を続けたが、男ふたりは荷台から飛び降りてリアドアを施錠し、そのまま運転台に乗り込んだ。スキンヘッドがエンジンを始動させる間も、リタは必死にリアドアを蹴破ろうと試みた。バンの前方では、機械式のゲートが開きつつあつた。鉄格子が完全に開ききるのを待たず、奴隸を載せたバンは発進し、小高い丘から人の世へと下りていった。

外見こそ平凡なそのバンは、特異な内装をしつらえていた。運転台と荷台の間に隔壁があり、天井近くに郵便ポストほどの覗き窓がはめられている。その隣のスピーカーは、運転台の人間が”積み荷”に指示を与えるために使用する。荷台は床のみならず、壁と天井にまで極厚の緩衝材が張られている。全ては細心の注意を要する配達のため、富豪に性奴隸をお届けするのに万全を期しての改造であつた。

それまで縦横の壁に体当たりを繰り返していたリタであつたが、バ

ンの発進から数分もすると、疲労から一時休戦を余儀なくされた。それでも、せめて運転台の痴れ者へ無言の恨み節をぶつけようと、揺れる荷台でふらふらと立ち上がり、極厚ポリカーボネートの覗き窓に額を押し付けた。そして、息を呑んだ。

朝の低い太陽の下、バンは複数車線の道路を走行していた。特筆するもののない光景であつたが、頭上を過ぎ去る案内標識は、リタの目を奪うのに十分な代物であつた。間もなく左手に巨大な構造物が現れ、それが標識に記されていた情報と結びつけられた。マンチエスター空港。奴隸に没落して半年、リタは初めて自分の所在を知ったのであつた。

奴隸蛮行【4—3】

バンは空港へは向かわず、南西へと進路を取り、やがてM6自動車道に乗つた。性奴隸護送バンはさらに南進してバーミンガムへ入り、都市部から外れたほの暗い林道のつづら折りを進むと、警衛付きの巨大な門扉に行き当たつた。バンのエンジンが切られ、男ふたりに荷台から降ろされたりタは、もう暴れなかつた。彼女は九十分間のドライブ中ずっと頭をフル回転させ、自分がここに移送された理由を推量つていた。合点のいく結論は得られなかつたが、調教課程をほとんど修了していない身で売られるとは考えづらかつた。警衛がグラタン皿ほどの錠を外して、重厚な鉄扉が押し開かれた。おどろおどろしい音を立てる門の奥に、リタが元いた施設と瓜二つの建造物がそびえていた。

正面の建物から、警衛の連絡を受けた施設職員がやつてきた。五代半ばと見える職員は、配達人の男ふたりと二三言三言交わすと、リタの頸を掴んで品定めの目を向けた。非人道的な扱いにリタは神経を逆撫でられたが、じつと辛抱した。そうして三十秒ほど検分すると、職員は不服そうに眉根を寄せた。「本当に使えるんだろうな？」

訝しむ職員に、クルーカットの配達人が答えた。「使つてみりや分かる。それに、こいつはもうおたくの奴隸だ。調教も処分も、おたくで全部やるこつた」

処分という単語に、リタの動悸が速まつた。スキンヘッドの手が、リタを施設職員へと押しやつた。荷物の引き渡しを終えた配達人ふたりはバンのエンジンを再始動し、開いたままのゲートを抜けて施設を走り去つた。職員は遠ざかるバンに舌打ちし、それからリタの猿ぐつわを引っ張がした。唾液でべとべとのボールギャグは、正門脇の植え込みへと捨てられた。

職員に肘を掴まれ、リタは新たな住居へと引っ張られた。その道すがらで職員に聞かされた用件が、自らの終着点が間近に迫つていると、いうリタの懸念を振り払つた。

リタがマンチエスターから、ここバーミンガムの調教施設へ移送さ

れたのには、企業幹部の一人に労災案件をもたらした以外の、別の理由があつた。彼女の腕を引く水先案内人曰く、この施設は問題を抱えていた。それも急を要する案件で、処置を誤れば会社に甚大な不利益が生じることであつた。リタが、自分を束縛している奴隸企業のピンチを嘲笑う前に、案内人が言つた。「そこで、お前が選ばれた」リタは、訳が分からないと空いている腕で肩をすくめた。地階へ下りるエレベーターの中で、リタが疑問を投げた。

「企業で片付けられないトラブルを、奴隸見習いがどうこうできるとは思えないのだけど」

案内人の反応からリタは、計画の立案者が彼でないと察した。その中年の顔に、今のリタよりも深い困惑が浮かんでいた。あまりに不憫で、リタは思わず同情した。

目的階への到着を報せる電子音が鳴り、ゴンドラのドアが開いた。その先に、場所は違えど、リタにとつて馴染みの光景があつた。真っ直ぐに続く、薄暗い廊下。左右に等間隔で配置されたドアの一枚ずつに、頑丈な外鍵が備わつてゐる。一人と一体がエレベーターから出ると、廊下の様子を窺おうとする目が、あちこちのドアの覗き窓に現れた。余計な注目に不快を示しながら、案内人は廊下を進んだ。

「親切で教えてやるが、一〇一三号、お前は崖っぷちにいる」案内人は、野次馬に向けて鬱陶しそうに手を払つた。

「リタよ。つまり、あたしはまだ処分されないのね」

「じゃあ、誰が決めるの?」

案内人はリタを苛立たしげに睨んだが、生意気な奴隸と会話を続ける余裕は残つていた。「ここにはいない、我々の上司様が決める。そのご意向は、今後のお前の働き次第で変わるかもしれないし、どうにもならなかつたら、さつきの二人より物騒なやつらがやってきて、我々の知らない場所へ不良品を持つていく」

「それなら安心ね」

奴隸の口元が、不穏な笑みに歪んだ。

「大した自信だな。まだ何をするかも知らないくせに」

「教えてくれないからじゃない。勿体ぶつてるのはそつちよ」

噂と違わぬ減らす口に、案内人は早くも心が折れかけた。

「……それで、あたしは何をすればいいの？」

リタは一転して、真剣な面持ちに変じていた。廊下の突き当たりのドア前で、案内人が足を止めた。腰の多用途ベルトから鍵束を引き出しながら、案内人が告げた。

「こいつの護衛だよ。おはようからおねんねまで、四六時中ずっとな」

鎧の浮いたドアの奥、せせこましい個室の隅に、『こいつ』——奴隸番号B—20は、膝を抱えてうずくまっていた。リタの胸が、ふつふつと沸いてきた期待に膨らんだ。それが顔をもたげた瞬間、リタは案内人の腕を払いのけ、個室へ飛び込んでいた。案内人が制止に口を開いた時には、リタは既に自分と似た容姿の少女を抱きすくめていた。詳細を聞く必要はなかつた。——この子は助けを求めてる！

「あたし、リタ。今日からルームメイトになるから、よろしくね！」

リタの力強いハグに、無意識ではあつたが、可愛い妹分がそつと擁を返した。

奴隸蛮行【5—1】

【5】

アンブローズ・バグウエル巡査部長は嫌悪も露わに、クラプトンなる男のＩＤカードを睨んだ。樹脂製のホルダーに収められた英國陸軍の認識票は、眼前のリチャード・クラプトンが五六歳の少佐で、その身長が一七四センチメートルであると主張していた。添付された顔写真は、当人と同様にリラックスした笑みを浮かべている。

バグウエルは認識票が偽造品でないと認め——元より見分ける技能もないが——来訪者へ懇懃な視線を向けた。

「陸軍の将官殿が、何のご用で？」

「いや、そう仰々しいものではないのですよ。ただ——」

「いいから、手短に願いますよ。こつちも暇はないのでね」

給与等級へのやつかみを隠そうともしない声音に、クラプトンが幾乎も動じた素振りを見せなかつたので、矮小な巡査部長の苛立ちがほとばしつた。クラプトンは濡れた肩をすくめ、ゆっくりと頷いた。「そう焦らんで下さいな。さつきも申し上げた通り、ちょっと込み入つておりましてね……ここで口外するのは、はばかられるのですよ。それに、落ち着いてお話しできる雰囲気でもないようだ」

バグウエルの肩越しに、クラプトンはバンの車内を一瞥した。薄暗い荷室で、三人の情報部員が、制御を失つた監視機材の復旧に奮闘している。

「恐縮ですが、ちょいとお付き合い願えませんかね」

クラプトンはリアドアの脇へよけ、バンから降りるよう、うやうやしく促した。

「悪いが少佐、私はこここの責任者だ。この場を離れるわけにはいかない身でね。他の者をあたつて——」

「貴殿が突つ立つていたところで、彼らの作業の邪魔でしかない」
あつけらかんと言い放つクラプトンにたじろぎ、バグウエルは背後の荷室へ首を巡らせた。情報部の三人はあちこちの端末をいじくる

のに忙しく、返事を寄越す余裕さえなくなつていた。クラプトンがゆつたりとした口調で、再び車外へと手招きする。

「では、ゞ同行願いましようか、バグウェル巡査部長？」

悠然と構える闖入者にバグウェルは呻き、不承不承ながら、ぬかるんだ地面に足を沈めた。

クラプトンの先導で、バグウェルは冷たい雨が降りしきる市街を歩かされた。途中で何度も曲がり、光の届かない路地を数本通過し、はたと足を止めるなり、来た道を戻るといった奇行を、クラプトンは繰り返した。業を煮やすバグウェルが意図を問うても、陸軍士官は口元に指を立てて語を継がせず、次第に二人の視界から警官とパトカーが消えていった。

そうして十分ほど歩き続け、街路樹としてそびえ立つオークの木の下で、クラプトンは足を止めた。「この辺りでいいでしょ？」

「随分と道に迷われたようですね」

トレイドクラフト
バグウェルの嫌みを、クラプトンは聞き流した。この十分間、彼が諜報技術としてSDR（監視探知ルート）を行っていたのを、相手が理解できるとは思えなかつた。

二人の頭上で、よく繁つたオークの葉を雨が叩いていた。クラプトンはダッフルコートの懷から魔法瓶を取り出すと、付属のカップに湯気の立つ緑色の液体を注いだ。

「こうも冷え込むと、たまりませんな。おつと、申し訳ないが、貴殿の分はありませんよ」

「結構だ。それより、さつさと用件を言いたまえ」

「おや、煎茶はお嫌いですか？　まあ、好みは分かれるでしょうね」
バグウェルの肩が爆発寸前でわななくのを歯牙にも掛けず、クラプトンはずず、と日本茶を堪能した。
「さて……バグウェルさん？」

「巡査部長だ」

無用な階級問答に、クラプトンは応じなかつた。「あなたのお望み通り、单刀直入に言いましょう」

陸軍士官は魔法瓶を仕舞い、同じ年頃の警察官と正対した。その顔

から、腑抜けた笑みが消えた。

「進行中の籠城事件の全権、そいつを私に委譲していただきたい」

奴隸蛮行【5—2】

予期していた通りの発言に、バグウエルの表情筋が痙攣した。レンコートのポケットに収めた拳に、鬱血するほどの力がこもる。

「そういうた要請は、しかるべき部署にしていただきたい。私はあくまで、一時的な責任者なのでね」

「ええ、承知しております。それでも、今この瞬間に現場を統制しているのは確かだ」

一拍を置いて、クラプトンは言い捨てた。「たとえ、部下にお荷物と見なされていてもね」

「何が言いたい？」

安い挑発に乗った中年警官に、陸軍少佐は冷笑を向けた。

「あなたが心配なさらずとも、おたくの上層部とは話がついている。あなた方の上司は分別があるようでね、二つ返事で受理してくれましたよ。

当然でしょう？　こいつは単なる立てこもり事件じやない。なにせ、やんごとなき方々の愛玩動物が”フオコ”の取引場所にたむろしていたんだから、関わったところでリスクしかない」

「フオコ？」

無知を晒す同年代に、クラプトンは呆れて目を剥いた。

「クリスタル・メス——人為的に濃縮された、高純度のメタンフェタミンですよ。コカインが可愛く思えるくらい依存性が高く、それ以上の悪影響を人体に及ぼすアッパー・ドラッグ。そして何より、どんな麻薬よりもカネになる。

サヴェジ・くそ・日用品店が、そういうた違法薬物の取引所である事実は、官憲でなくとも、この辺りの住民は周知している。あの店舗の実態は、ペーパー・カンパニーを介したロシア・マフィアが運営する、ポンドを横流するためのパイプラインだ。ところが、腐敗経済の検挙に足る証拠がこんなに揃っているのに、我が国の政府は令状のひとつも寄越さないもんだから、世の中不思議ですな。お上の交友関係が気になるというものだ」

自分のブラック・ジョークに、クラプトンは皮肉っぽく口角を上げた。「まったく、治外法権なんぞ認めるからこうなる」

「それはあなたも同じだろう」

バグウエルの憎しみのこもつた瞳が、その小さな眼窓で揺れた。
「あなたは警察の垣根を勝手に越えて、我々の領分を土足で踏み荒らす無法者でしかない。そちらがそういう態度なら、こちらも相応の対処を取らせてもらう」

「構いませんよ」

バグウエルは、胸元のウォーキー・トーキーのスイッチを押し込み、現在地の番地を読み上げ、目の前の業務妨害の排除に数人を寄越すよう命じた。すぐに付近の警察官から応答がなされるはずが、左耳に挿入したイヤープラグは沈黙を保っていた。

三十秒も応答がないのを不審に思い、バグウエルはレインコートの下から通信機器のコードを引っ張り出し、接続を確かめた。何も問題はなかつた。

役立たずのポンコツめ。バンの機材の不調といい、全部このくそ嵐のせいだ。

胸の前で乱雑に絡まるコードもそのままに、バグウエルは私用の携帯電話を取り出そうとした。せわしなく動く腕が、コードに引っ掛けた。巡查部長の手から携帯電話が取り落とされ、塗れた地面を滑つてクラプトンのつま先にぶつかる。

「落ち着きなさい、バグウエルさん。連絡が取れるのは、あなたが誰からも好かれていないからじゃない。まあ、それは今日に限つての話だが」

「何が言いたい?」

英語圏では聞き慣れぬ掛け声を伴つて、クラプトンは携帯電話を拾い上げた。「よつこい……しょつ

絡んで団子になつたコードと格闘するバグウエルの眼前に、携帯電話の液晶画面が突き出される。

画面の隅に、圏外を示すデジタル表示が浮かんでいた。

奴隸蛮行【5—3】

唚然とするバグウエルに携帯電話を返し、クラプトンは左手をダブルコートのポケットに差し入れると、箱状の物体を取り出してみせた。全体が黒い樹脂製の直方体で、数個の緑色のランプが明滅しており、上面からアンテナめいた棒状の部品が八本伸びている。それが携帯式の通信妨害装置《ジャマー》であるとバグウエルが気付くのに、大した時間は掛からなかつた。

「……いつたい何のつもりだ」

「先程から申し上げているでしよう？ 事件対応の全権私に移し、事件についてあなた方が集めた情報を提供してほしい。ただそれだけですよ」

急に、思い出したとばかりに指を弾き、クラプトンが続ける。「それと、この件に関わった人間すべてへの箝口令《かんこうれい》の施行と、当該データの抹消をお忘れなく。あとは——」

「ふざけるな！」

雨音を切り裂いて、巡査部長の怒号がひと氣のない通りに木霊した。「さつきから下手に出ていれば、好き勝手に言いやがつて、何様のつもりだ？ 挙げ句の果てには、正式な許可もなく指揮権を寄せせだと？ 私を事件の責任者から外したいなら、正式な解任命令を持つてこい。あんたが本当に上層部と掛け合つたなら、用意できるだろう？ はつたりもいいところだ！ 他人をおちよくるのも大概にしろ！」

ひと呼吸で憤懣をぶちまけると、バグウエルは軽い酸欠に陥つた。激しく上下する肩の周りに陽炎が生じ、赤ら顔のせいで、塞がりかけていた額の傷から鮮血が吹き出した。

「……ガス抜きは終わりましたかな？」

バグウエルの口から唾が飛ぶコンマ数秒前から、クラプトンは両耳に指を突っ込んでいた。その顔は交渉相手とは真逆に冷静そのものだつた。

息も絶え絶えな巡査部長に、クラプトンは中断された要求を再開した。「警察から我々への指揮権の委譲、情報の提供と削除……それら

が済んだら、現場から全職員を遠ざけ、報道機関への規制を強化していただきたい」

「我々を部外者にするつもりか？」

かすれ声の抵抗に、クラプトンは指を振つて否定した。

「解釈の違いですよ、バグウェルさん。よーく、考えて下さい。事件が円満に解決したら、我々は早急に撤収します。うちの連中は、私と違つてカメラ嫌いなんでね。指揮権の見返りに、手柄は警察にお譲りしましょう。

我々が去つたら、あなたは部下に警戒の解除を命じて、最初に目につけた報道員に、最前線で尽力したご自分の武勇伝を語ればいい」クラプトンの饒舌が、トーンをひとつ落とす。

「これはあくまで仮の話ですよ。もし万が一に、事件が好ましくない結果に終わつたとしても、あなた方は知らぬ存ぜぬと、しらを切れる。横暴な陸軍が、あなた型の調査情報を奪い、現場をめちゃくちゃに荒らして全てを台無しにされた……そう弁解すればいい。なんなら、私を告訴したって構いません

その時はその時で、地元の不良に対する手立てのない軟弱者の烙印が捺されるでしょうが、それでも人質奪還に失敗するより、ずつとましだ

クラプトンは苦笑しながら肩をすくめた。

「迷う必要なんかありませんよ。むしろ、あなたが何も考えないのが、今も現場で雨に凍えている方々のためだ」

「どういう意味だ？」

ようやく通常の呼吸を取り戻しつつ、バグウェルは目を丸くした。

クラプトンは力なくため息を漏らすと、哀れみの目を向けた。
「……まつたく、『箸にも棒にもつかない』つてやつだ」

奴隸迎合【5—4】

「えー……今、何と言つたんだ？」

バグウエルは目をしばたたき、クラプトンの言葉の理解に苦心した。無理もない。なにせ、地球の裏側のちつちやな島国だけで使われている言語なのだから。

クラプトンが鼻で笑つた。

「誰も教えてくれないだろうから、私が代わりに言つてやろう。あんたはどうしようもない無能だよ」声音に、底暗い怒りが声音に含まれていた。抑揚ない侮蔑に間髪入れず、矢継ぎ早の糾弾がバグウエルに浴びせられた。

「周囲に害をもたらすしかない、出来損ないの粗大ゴミ。それ以外にどう説明がつく？ 事のでかさが、まるで見えていない。

幸いにして今この時まで、あなた方の交渉人は職務を堅実に全うしている……あんたとは違つてね。上手くいけば、相手さんは無血開城、人質全員が無事に解放されるかもしれない。

だが一分後に何が起きるかなんて、いつたい誰が説明できる？ おっと、神のお導きなんて言うなよ。敬虔なお祈りで最善のシナリオが実現するなら、どうぞ今すぐ拝めばいい。甘つたれた願望がどう役立つか、私も見てみたいのでね」

クラプトンは両腕を広げ、その場で回つてみせた。バグウエルの存在など忘れているかのように、大仰な身振りを交えての独白が続く。「ああ、そうさ。この世界には、誰かと考えを一にしない不信心者がうようよしてゐる。それなのに、堕落した市民は、平和が蛇口から無尽蔵に出てくると思つていやがる。いざ敵を前にした時に、そういうぼんくらは決まつて、ロザリオを胸に嘆願するつて訳だ。馬鹿が。自分の信ずる神を盾にするやつがあるか。敵への命乞いに組む腕があるなら、聖書を持つのと逆の手に剣を握るのが信徒つてもんだろうが」そこまでひと息に言い終えると、クラプトンの顔から不意に怒氣が抜けた。数秒前まで振り回していた腕を脇に垂らし、厚ぼつた目蓋を半分おろした。

「……だが、そんな無理を強いるのも酷つてもんだ」

肉付きの良い指が目頭を揉む。気の触れた陸軍士官にぽかんと口を開くバグウエルなど一顧だにせず、クラプトンは背後のオークに背中を預けた。

「わたしや性善説を信じてる訳じゃないがね、動物つてのは元来、同族を殺せないように作られてるんだ。血肉をむさぼることしか頭にないピラニアでさえ、同胞との争いとなると、ちつちやな尾ヒレで互いをはたくだけ……おい、随分と可愛いじやないか」

濃い口髭に縁取られた口角が、いびつに持ち上がった。

「だが、人間はどうだ？ 同じ人種、肌色、信教でりながら、無防備な同種を殺しまくってる。不思議だと思わないか？ いいや待て、思わなくともいい。あんたの道徳なんかに興味はない」

バグウエルの鼻先に、一本指が立てられる。

「警察学校で教わらなかつたか？ 緑の豊かな牧場に羊がいっぱいて、呑気に草を食^はんでいる。柵の外には、無防備な羊を食い散らかそ^うと、狼の群れが涎を垂らしている。狼が柵を越えて牧場の平穏を脅かすその時、牧羊犬は命を賭して羊たちの盾となる……黎明期から変わらない、司法機関の存在理由だ。

安全な自宅で紅茶をする日常をあえて捨て、市民の守護を最前線で担う牧羊犬を担うのが、我々軍人や警察官だ。羊がごく当たり前に浴する安寧を維持するためだけに、牧羊犬はそ身を死地へ投げ入れる」

やにわに、クラプトンはバグウエルに迫り、脂肪に覆われた胸板に指を突き立てた。

「それが、あんたときたら何だ。何でも良いから畏敬が欲しいと、ボスザル気分に酔いしれるだけの下心で大勢に迷惑を掛けているのが、どうして分からぬ？」

野太い指がたるんだ胸板を何度も突き、のけぞつたバグウエルが後ろへ下がっていく。九十キロの脂肪が、たつた一本の指に圧倒されていた。

「正直、この辺りの官憲の仕事には恐れ入つたよ」

クラプトンはバグウエルから距離を取ると、頭上の繁つた樹冠を仰ぎ見た。

「突然の異常気象と、同時発生した凶悪犯の逃走による人員不足、指揮系統の混乱にもかかわらず、彼らは籠城現場の包囲と周辺住民の安全確保、情報資料の作成、犯罪交渉人の手配を、事件発生から一時間と掛からずに済ませていた。心より平伏するよ」

クラプトンの瞳に、冷たいものが宿つた。

「そんな彼らの献身を、愚図の老いぼれがぶち壊そうとしている」
バグウエルは何か言いかけたが、クラプトンに先程より強く胸骨を

どつかれて、息を詰まらせた。

「優秀な牧羊犬が、あんたのせいで要らん手間にかかずらつているのが、まるで分かつちやいない。いいですか、バグウエルさん。さつき申し上げた要求を復唱してあげます。その壊滅的なおつむじや、ひとつつも憶えていないでしようからね。感謝していいんだぜ、お馬鹿さん？」

クラプトンはバグウエルの狭い額を爪弾くと、すぐ上の制帽をひよいとさらつた。バグウエルが取り返そうと腕を伸ばすより先に、クラプトンは奪つた制帽を自分の頭に被せた。据わりを整えながら、唇の片一方を意地悪くつり上げる。

「どうです、似合いませんか？ 何なら、明日からあんたと交代しても面白そうだ」

クラプトンは自分の冗談に笑いながら、バグウエルにS A Sのベレー帽を差し出した。

「まあ、務まるはずもないでしようがね」
バグウエルの中で堰^{せき}が切れた。

奴隸蛮行【6—1】

【6】

—三年前—

バーミンガムの外れ、人目を避けて小高い丘に建つ奴隸調教施設の食堂に、けたたましい衝突音が木霊する。トレイを手に配膳列で朝食を受け取る奴隸、既に長テーブルで今日を生き延びるカロリリーを摂取していた奴隸全員の目が、音の所在へと向けられる。白いリノリウムの床に、樹脂製の食器と、それが乗っていたトレイがぶちまけられていた。ひっくり返ったトレイと床の隙間から、地に落ちるまでは料理だつた物体がはみ出している。惨状の間近に、数秒前までトレイを抱えていた少女が立ち呆けていた。

その少女——奴隸符号B—20は、生氣の抜けた目でその場に膝をつくと、散乱した食器と廃棄物の処理に取り掛かつた。この施設では囚人服に等しい白いワンピースの胸元が、床の汚れと同じ色に染まっている。

食堂には、厨房で作業中の者を含めて五十体を超える性奴隸の卵がいたが、雑巾や水入りのバケツを用意する個体はいなかつた。彼女らはB—20と、その背後で自分の食事を手に含み笑いを浮かべる五人組の奴隸を視界に入れまいと努め、黙々と自分の作業に専念した。

不用意に関われば、ただでは済まない。食事中の奴隸たちのはいじめの現場から遠ざかろうと、食事の手を速めた。彼女らは数年内に身壳りされる運命を快く思わなかつたが、不良品として“処分”されるほど、やけっぱちにもなつていなかつた。健康を損ねて容姿の劣つた性奴隸に、良質な買い手は付かない。哀れな同期の道連れで馬鹿を見るより、少しでも待遇の良い主人に引き取られようと、無用のストレスから我が身を遠ざけていた。よかつた、今日の標的も“あいつ”だ、と。

食堂の四隅に控える守衛は、各員が左耳に通信機のイヤープラグを挿入し、両手を前に組んだまま彫像の如く沈黙していた。彼らの職務はあくまで奴隸の脱走の阻止であり、奴隸同士のトラブルへの介入は

固く禁じられていた。これには守衛が奴隸に対して何らかの情を抱くのを防ぐ以上に、商品の価値を物理的に損なうリスクを避ける意図があつた。屈強な男が緻密な陶磁器を粉碎する事態を、施設の運営陣は何にもまして危惧していた。守衛は商品に火急の危機がない限り彼女らへの接触は許されず、女の醜い示威行為を傍観するほかなかつた。

B—20は食糧の残骸を素手で搔き寄せ、トレイに集めていった。ごた混ぜの廃棄物を半分ほど集めると、脇から現れた足がトレイを宙に蹴り上げる。数メートル離れた床にトレイがけたましくがひっくり返り、新たなゴミ溜めがこしらえられた。B—20の背後で、五人組が忍び笑う。B—20は動じることなく眼下の元シーザーサラダを平皿に寄せ集めると、追加の清掃業務に腰を上げた。蒼く陰の落ちた瞳は微動だにせず、次の粗相の始末におぼつかない足取りを向ける。トレイを蹴った五人組の親玉が、B—20の曲がつた背中を嘲笑つた。

「見た？　あんなに汚しちゃつて。今日の洗濯当番に同情しちやう」
ブロンドの髪をポニーtailにした奴隸が、その肩を小突いた。
「ひどい女。あの子がその洗濯当番じゃないの」

それを聞いた三人目のブルネットが、大げさに目を丸くした。「あら大変。そうと知らなかつたから、あたし洗剤ぜんぶ捨てちやつた」五人組の嘲笑が、低い天井に反響する。朝食前の日課に満ち足りるとい、五人組は席の物色に取り掛かつた。いじめ現場近くの奴隸数体に緊張が走る。今日に限つて、どうしてこの席を選んでしまつたのか。彼女らの後悔は、長くは続かなかつた。

奴隸蛮行【6—2】

厨房へ繋がるドアが、勢い開け放たれた。五人組の談笑が水を打つように息み、両開きの扉へ食堂中の注目が向けられる。蝶番の可動限界に達した扉が脇の壁にぶつかり、数人の奴隸が身をすくませた。朝食も済まさぬ時分からの度重なるアクシデントに、吐き気を催す個体もいた。

水音の響くドアの奥から、雑巾の束と水を張ったバケツを手に、黒い調理着姿の少女が現れる。いくつかの奴隸グループで、相談の席が設けられた。

「あれ誰?」「知らないけど、昨日ここに来たばかりの子だつて」「新しい職員じやないの?」「だとしたら若すぎる。でも奴隸なら、この施設に入るレベルじやないし……」

全方位から向けられる視線を意に介さず、少女は未だ振り子運動を続けるドアを足で止めると、衛生帽をその場に脱ぎ捨てた。濃いブロンドの髪が調理作業で蒸れ、毛の束が額に貼り付いている。ほのかに紅潮したつややかな肌は、不干涉を貫く守衛を遠目にも釘付けにしそうしたオスの本能を、女性は敏感に察知していた。

「嘘でしょ? ゴールトンから仮頂面が消えた」「それよりマーランドよ。あんなに鼻の下伸ばしちゃって」「ねえ、フインチの勃<『た』>つてない?」

食堂は密談に盛り上がり、随所でかしましい単語が飛び交った。料理着の少女は振り乱した髪を後ろに束ね、ゴム長靴を鳴らしてB—20の許へ駆け寄ると、その肩にそつと触れた。

「やらなくていい」

B—20は後片付けの手を止めず、雑巾とバケツを受け取ろうと手を伸ばした。水拭きの許可は下りなかつた。奴隸符号T—01—リタはB—20の細い手首を掴み、作業を中断させた。

「やつちやだめ」

「でも……」

ようやく開きかけたB—20の唇を、リタの指が封じる。

「ブリジット、これはあんたの仕事じゃない。分かつてくれるよね？」
力強い”お願ひ”を受けると、B—20は両腕をだらりと脇に垂らした。

「うん、ありがと」

生ゴミにまみれたB—20の手を、リタはキツチンペーパーで丁寧に拭つてやつた。

「ブリジットって？」「さあ？ B—20のことじやない？」「でも、こつて愛称とか禁止されてるでしょ」「それより、新顔の話しようよ」「あの顔、どこかで……」

誰もが食事を忘れて与太話に花を咲かせる最中、この施設で三年間を過ごす一体の奴隸が、記憶の洗い出しに没頭していた。その奴隸は程なくして目当ての記憶を探り当てるとき、息を呑み、白熱する猥談に待つたを掛けた。

「ねえ、あの子もしかして”レディ・スレイヴ”じゃない？」

その一言で、淫らな火は沈められた。関係筋に名高い固有名詞は守衛の耳にも届き、下心に緩んだ顔が痙攣する。——レディ・スレイヴだつて？

「これ借りるね」

リタは床にひっくり返ったボウルを拾い上げ、B—20が寄せ集めた生ゴミの山にくぐらせた。器の中に、生野菜と肉団子だった何かの山がこさえられた。

「シャワー浴びて、部屋で待つて。朝食は部屋に持っていくから、それから一緒に食べよ？」

まごつくB—20の肩を食堂の出入口へ押しつつ、リタは一番近くにいた守衛にアイコンタクトを送った。奴隸、それも調教途上の商品に睨まれた守衛は、通信機の周波数を調教部門に合わせると、時間外のシャワー利用許可と奴隸収容区画での食事、およびその日のB—20の予定調整を要請した。一連の連絡を済ませると、守衛は不意に疑問を抱いた。ぼんやりとした意識が、まどろみから覚めるように再起動する。自身の直前の行動を思い返すなり、はつと我を取り戻した。脳を何らかの超常的な外力、恐らくはレディ・スレイヴの名で知られ

る奴隸の術中にはまつていた事実に辿り着くと、守衛は非現実的な体験に総毛立つた。

奴隸迎合【6—3】

問題児五人組もまた、厨房のドアが開いた時を切り抜いたまま、石膏像のように固まっていた。トレイ上の紅茶のカップが指に触れた熱で、親玉は気を持ち直した。慌てて白昼夢を振りほどくと、こうべを巡らせて他の四人の様子を窺つた。取り巻き全員がまだ夢うつづだと分かると、そつと胸を撫で下ろし、それから四人の踵を蹴つて回つた。配下たちは目を覚ますなり、親玉に蔑みの目で睨まれて、ばつの悪さに目を伏せた。

ぐずな取り巻きに、親玉は憤りを募らせた。ただでさえ、闖入者に朝の日課ぶち壊されたこともあり、身勝手なストレスは破裂寸前になで膨れ上がつていた。穏やかな気持ちで食卓に着くには、B—20のトレイをもう一度蹴飛ばす必要があつた。独善的な欲求をみなぎらせると、親玉は生ける清掃ロボットへ向き直つた。

ほくそ笑みながら視線を向けた先に、床を這うB—20の姿はなかつた。五人組が仰天して辺りを見回すと、取り巻きのひとりが、食堂から出る間際のB—20の後ろ姿を見付けた。五人組から制止の声が上がるのを待たず、小さな背中は出入口の奥へと消え、扉が閉まつた。

お気に入りの玩具の逃亡に、親玉は言葉にならない唸りを上げ、取り巻きへに食つて掛かつた。

「なんで止めなかつたの！」

暴発した怒りの矛先が自分たちに向けられたので、四人の取り巻きは困惑した。配下のひとりがなだめるも耳を貸さず、金切り声でそれを遮つた。

「誰のせいでこうなつてるの！　あんたらがしつかりしていれば、こんなに怒ることもなかつたのに！」

鼓膜を突き刺す怒声に窓ガラスが震え、周囲のざわめきが鎮まり、食堂中の注意が再びカースト上位の奴隸たちへ集められる。

ここに至つて、守衛たちも事態を重く受け止め始めた。通信上で相談が設けられ、すぐに全員一致で介入の決議が下された。厨房のドア

から最も近い場所にいた守衛が、責任者の指示を仰ごうと、携帯電話を取り出した。

だが、決断が遅すぎた。

「持つてなさい」

親玉は食事のトレイを手下のひとりに押し付け、血走ったまなこで、この騒動の根本の原因をきつと睨んだ。

厨房からの来訪者は相変わらず、廃棄物で満たしたボウルを手に、汚れた床に片膝をついていた。知らない顔だつた。新入りだとすれば、なおのこと気に食わない。組織のかしらへお目通しを怠つた不届き者に、親玉は憎悪をたぎらせた。

確かに親玉は、この施設では容姿の優れた方であつた。とはいゝ、決定的に秀でた造形でもなく、二十歳前にしてはどうの立つている目鼻立ちは万人受けするものでもない。誰よりも本人がその事實を自覚しており、奴隸という境遇も相まって、親玉の劣等感はいよいよ肥大化した。同様の心根を持つ者を侍『はべ』らせ、秀でた容姿の奴隸——自分より僅かでも裕福な買い手が付きそうな女を虐げることで、卑しい自己をようやく保つていたのだ。

奴隸蛮行【6—4】

最悪な環境で生き抜くのに必須の自己肯定を、あの新顔は台なしにされた親玉は、怒り心頭に歯を剥き出して、汚物の中心に佇む調理着姿の奴隸へ、大股で突き進んだ。

守衛たちは、両手を腰の前に組んだまま、施設責任者と電話が繋がるのを待っていた。目の前を猛スピードで焼けていく導火線の対処を、彼らは現場にいない者の判断に委ねていた。守衛たちが、自らの行動に伴う結果と責任を秤に掛けているのをよそに、この場で最も卑しい存在たちだけが、選択の自由行使していた。

逃げなければ。

それまでギヤラリ一として安全圏から動静を見守っていた奴隸たちが、後片付けも疎く《おろそ》かに続々と席を立つた。フードコートでもマナー違反であるし、奴隸身分にあるまじき叛逆である。だが、事の終わりに懲罰が待っていたとしても、身の安全にまさるものはない。当該施設において、件の五人組による嗜虐行為は茶飯事であり、平凡な日常のワンカットでしかなかつた。施設の運営陣が看過する限り、この被害担当の犠牲の上に成り立つ平和は永遠を約束されたも同然であつた。

レディ・スレイヴが、不可侵条約を破り去つた。

女の勘で雲行きを悟つた奴隸が、次々と席を立つた。間もなく、でかい火の手が上がる。施設生活の長いベテラン奴隸たちは、まだ空気の流れを読めない幼い奴隸や、怖い物見たさでその場に留まろうとする奴隸の手を引いて、その場から離れようとした。くずつて言うことを聞かなければ、肩に担いで移動させた。まだ殆ど手を着けていない朝食から引き剥がされて、泣き出す個体もいた。年上の奴隸たちの多くは、飢えの苦しみを知つていた。それでも彼女らは心を鬼にして、ひもじきに喘ぐ幼子らを脇に抱えると、脱兎の如く出入口へなだれ込んだ。

確かに、この施設に収容されている奴隸たちは、自分が件の五人組の標的となることを恐れていた。だが彼女らが最も恐れるのは、商品

として出荷後に売れ残ることだった。買い手のつかなかつた奴隸が如何なる結末を迎えるのか、施設職員が時たま口にする“処分”が何を意味しているのか、奴隸たちは知る由もないし、知りたいとも思わなかつた。底暗い深淵に引き込まれずに済むなら、朝食を一度抜くくらい屁でもない。

逃げ出す奴隸たちへ目もくれず、親玉はレディ・スレイヴなる奴隸の頭上に仁王立ちした。一メートルと離れていない場所に自分が来たにもかかわらず、ちよつと名の通つたくらいの奴隸の視線が自分へ向けられないことで、頬の筋肉が引きつった。

「あんた、どういうつもり？」声音に、溢れんばかりの侮蔑が込められていた。荒い鼻息が背後に迫る最中、新入りの奴隸は、アリの行列を見下ろす幼児の姿勢のまま微動だにしない。

「聞こえなかつたの？ いつたいどういうつもりなのか、そこで丸くなつてるあんたに、理由を訊いてやつてるのよ」

「リタよ」眼下の奴隸から、今度は反応があつた。呟かれた声に臆した様子はなく、声量と不釣り合いな力強さがあつた。

それがはつたりの強がりか、はたまた致命的な鈍感がなせる奇跡かは、親玉の閥知するところではなかつた。この場で重要なのは、足下の奴隸が自分へ然るべき畏敬を払わなかつた事実であり、その不敬を断じて己の権威を維持することのみに、親玉は意識を集中していた。「……どうも、おつむの出来がよろしくないみたい」

親玉の目配せを受けて、取り巻きが忍び笑いを発する。

「もう一回だけ訊いてあげる。次はちゃんと答えること。いい？ あんたがいつここに来たのかは知らないけど、いつたいどういう了見で

――

まくし立てる物言ひが、尻すぼみに萎んでゆく。それまで彫像の如く佇んでいた奴隸が、不意に肩越しに振り向いた。半開きの目蓋に縁取られた明るい碧眼が、まばたきもせずに親玉を見据えていた。その光彩に、喜怒哀楽のどれにも属さない、猛禽と見紛う鋭利な光が宿り、頭上の匪賊を射貫いた。

獰猛な敵意をまともに浴びた親玉は、その場で立ちすくんだ。不遜

な新入りへの罵倒を改めて吐き出そうと知恵を絞っていた。

親玉に妙案が舞い降りることはなかつた。リタは親玉を注視しますつくと立ち上がり、身動きの取れない相手をじっくり踏みした。親玉はリタより十センチほど身長が高く、奴隸の身では何の意味も持たないが、年齢も四つ離れていた。身の丈で勝る相手を、リタは物怖じする素振りもなく観察した。対する親玉は、未知の脅威に晒された本能が脈拍を乱し、リタに見つめられた箇所ひとつ一つが焼けつく錯覚に陥つていた。

親玉の左胸に留められたプレートに、リタは注目した。小さな唇が、白い樹脂板に刻まれた識別符号を読み上げた。

「それで、あんたがA—72……」

リタの双眸が、再び親玉へ向けられる。親玉は先の戦慄を予期して身構えたが、自分を見上げる碧眼は、期待を裏切られた落胆に曇つていた。リタは親玉から一步距離を取ると、興味を失つたとばかりに鼻を鳴らし、本人の容姿とは真逆の、百年の恋も冷める不細工なため息をぶちまけた。

「なーんだ。どんな大物かと思つたら、サル山のボスを気取つた年増じゃない」

奴隸蛮行【6—5】

怒りに駆られたA—72の右腕が、リタの頭頂部へ伸びる。分をわきまえないメスガキを掴もうとした手が、虚空を握りしめた。A—72が捕らえようとした頭髪が、空っぽの拳のすぐ左でふんわり揺れていた。

A—72は、今度は左腕をリタの折檻に振り上げた。A—72の指先がリタの髪に触れる寸前で、リタはすっと腰を落として攻撃をかわした。その顔は余裕綽々で、眼前の相手を嘲り微笑んでいた。A—72が、リタの両肩を押さえ込もうとして、伸びきった両腕を振りかぶる。その間に、リタが右足を半歩引いていたことに、その場の誰も気付いていなかつた。

重心を低く身構えたままのリタが、両脚をばねにしてA—72の懷へ飛び込んだ。A—72は、肉弾戦のプロではなかつた。少なくとも、この奴隸調教施設は「矮躯の敵に距離を詰められた際の対処」を必修事項に定めていなかつた。慌てて両腕を引き戻そうとするA—72の胸元から、何かがとてつもない勢いで迫る。その正体を、A—72が認識することはなかつた。そもそも、固有名詞として辞書に載つてすらいなかつた。ぐちやり、と水気たっぷりな音が食堂に木霊する。A—72の顔面に、リタが生野菜と肉団子だった何かのボウルを叩き付けていた。

腰の回転が加わつたりタの一撃は、汚物をぶつけるだけに留まらず、A—72を宙に浮かせ、背中から床へ沈めた。顔面に張り付いたボウルの隙間から、上半身の痛みに悶え喘ぐ声が漏れた。ギャラリーから上がるどよめきに、どこか称賛めいたものが混じつた。

「こいつ！」

A—72の手下のひとり、ブルネットの奴隸が、リタ目掛けてスプリントで突つ込んでくる。体重の乗つたタックルを、リタはひらりと最低限のサイドステップでかわした。攻撃をし損じてつんのめるブルネットがリタを再び視界に捉えた途端、見事なタイミングの平手打ちに迎えられた。乾いた打撃音にギャラリーが湧き、鼻血を噴くブル

ネットの崩れ落ちる音をかき消した。

リノリウムの床に五体投地したブルネットを捨て置き、リタは残る三人のいじめ集団に向き直つた。

「次、そこのブロンド！」

自分もブロンドなのを差し置いて、リタはA—72から食事のトレイを押しつけられたポニー・テイルを怒鳴りつけた。トレイの手下は目がしきりに泳ぎ、唇を噛んで首を震わせた。

「意気地なし。じゃあ、あなたはどうなの？」

次に指名された赤毛の手下も、全身で辞退を示した。

「情けないつたらない。あんた、ケルトの血が入ってるんでしょ？」

アイルランド人らしく、蜂起のひとつでも起こしたらどうなの」

英國において細心の注意を要する話題でさえ、レディ・スレイヴに掛かれば啖呵のレパートリーでしかなかつた。

「じゃあ残つてるのは……駄目そうね」

五人目の栗毛が腰を抜かして小失禁していたので、リタは目頭を揉んだ。

「ほんと、肩すかしね。まあ、いいや。えーと……うん？」

落胆に肩を落としながら、リタは調理着の前ポケットを手探りした。

「あつれえ？　こに入れてたはずなんだけど……」

数秒前の威勢は消え失せ、リタはその場でぐるぐる回りながら、全身のポケットを叩き、手を突っ込んで失せ物を見つけようとしていた。

声をうわずらせて悪戦苦闘するその背後、汚物の散った床で動きがあつた。強烈な反撃と痛みから立ち直つたA—72が、顔にはまり込んだボウルを引き剥がし、ゆつくりと半身を起こす。肩が震えているのは、冷たい生ゴミのせいだけではなかつた。

時を同じくして、守衛の電話が遂に責任者と繋がつた。

「マネージャー、食堂で奴隸同士の暴力沙汰が起きています。既にかなり大きな騒ぎと……申し上げづらいのですが、負傷した個体もあります。即時の介入許可を求めてく……ええつ？」

守衛が電話相手の言葉に驚いた。

「あつた！」

ようやく探し当てたそれを目の高さに掲げるリタの背後で、重い水音が響いた。

奴隸蛮行【6—6】

音の出所へリタが振り向くより先に、木槌で殴られたような衝撃がその背中を襲つた。手にしていた布きれが、床に落ちた。前方にたらを踏みながら、リタは外力の原因を突き止めようとしたが、今度は下腹部に鋭い痛みが走る。身を折り、淑女らしからぬ呻きを発する腰の前で、自分のものではない足首が交差していた。

上半身が重い。すぐ後ろから、酸味の効いた臭いが漂つてくる。一しまつた。自分の背中で起きて いる事態を察し、リタは恐る恐る背後を覗き見た。鼻息の掛かる距離に、しおれたワカメを額から垂らすA—72の顔があつた。生ゴミで戦化粧した悪鬼の形相に、さしものレディ・レイヴも小さな悲鳴を上げた。

敵の闘志が揺らぐ様に、A—72の口角が意地悪く歪む。リタの背中に飛びついたA—72は、その六十キロ近い体重で、高慢な新参者の自信を潰そうとしていた。

A—72の左腕が喉に伸びてみると、リタは反射的に顎を引っ込めた。正しい判断だつた。順当にいけばヘッドロックを極めていたA—72から、悪態らしきものが発せられた。

「離しなさい、卑怯者！」

レディ・レイヴの怒号は、A—72には愉悦のメロディに聞こえていた。背中の重荷を振り落とそうともがくりタの一挙手一投足が、A—72の脳にドーパミンを分泌させた。

A—72は体術の心得こそなかつたが、長い四肢がその分を補つた。左上腕をリタの頸の下にねじ込もうとしながら、右腕でリタの後頭部をぐいぐい押しやる。本人は喉を圧迫するつもりだつたが、腕が長いせいで、実は首の横の頸動脈まで締めていた。

涼しくほくそ笑むA—72と対照的に、脳への酸素供給が滞つたりタは、耳まで真っ赤になつて奮闘していた。後ろへ向けてがむしやらに肘打ちを放つたが、フジツボのようにぴつたり張りついたA—72が暴れるせいで狙いが定まらず、汚物まみれの床で千鳥足を踏んだ。どうどうリタの鼻から一筋の鮮血が垂れたのを見て、守衛のひとり

が制止に入ろうと駆け出す。もうふたりが、それに続こうとした。

〈駄目だ、手を出すな〉

イヤープラグから飛んできた指示に、三人の動きが止まる。声の主に、三人が非難の目を向けた。今しがた使つていた携帯電話を懐にしまい、指示を出した守衛が肩をすくめた。〈仕方ないだろ。上からの命令だ〉ますます訳が分からないと、守衛たちは互いに顔を見合せた。

流血沙汰にギヤラリーから悲鳴が溢れていたが、当のリタはそれどころではなかつた。脳に残された酸素に猶予はなく、首の下ではチョークを掛けようとする腕が、気道へ着実に迫つていた。傍目からも、A-72の優勢は明らかだつた。

背中の異物を引き剥がそうとする腕から、次第に力が抜けていつた。敵の憔悴を氣取り、A-72は身を乗り出ると、リタの耳元で囁いた。

「これからは、あんたも可愛がつてやるよ。”あいつ”と一緒にね”甲高い高笑いが、食堂に響き渡る。リタにはもう、何も聞こえなかつた。聞く必要もなかつた。

ぐらぐらと煮えたぎつた憤怒が、鍋蓋を吹き飛ばした。

奴隸蛮行【6—7】

リタは腰を深く落とし、ゴム長靴の底に床を噛ませて、その場に踏みとどまつた。姿勢の安定を取り戻すと、目を細め、鼻腔と脳の間の僅かな空間に酸素を補給してから、チョークを極めているA—72の左腕を、両手で掴んだ。

リタの動作を降参の嘆願と解釈して、A—72の笑いが熄^やんだ。

「そんなのじや足りない。もつと惨めに——」

リタは体内に残された酸素すべてをアデノシン三リン酸の生成に使い、曲げた膝を一気に伸ばしながら、地面へ身を投げる勢いで、上半身を前方に振り抜いた。一本目の鼻血がほとばしつた。全身全霊のお辞儀に、A—72の身体が引っ張られる。

真下で起きた急な動きに、A—72は脳内麻薬の酩酊から醒めた。とつさにリタから離れようとして両脚のロツクを外したが、左腕をリタの両手と頸にがっちり押さえ込まれていた。攻勢の瓦解を知ると、A—72から引き裂くような奇声が上がつた。空いている右手でリタの肩や後頭部を打撃し、顔を引っ搔こうとしたが、まるで意味をなさなかつた。

有機的なサイレンに、食堂の傍観者たちがたまらず耳を塞ぐ。最も被害を受けるはずだつたりタは、生存本能から脳が五感を鈍らせていたので、ほぼ無音の次元に意識を置いていた。武芸を究めた者のみが至れると伝わる、不可視の世界。絶体絶命の危機的状況と、極限まで研ぎ澄ました自尊心が、脆弱な少女にその聖域の謁見を許した。

火事場の膂^{りょりょく}力に、A—72の長身が宙を舞つた。固定された左手を支点に、伸びきつた長い脚が天を突き、ぐるりと大きな弧を空に描く。コンマ数秒の後、鈍い落下音が轟き、続いてくぐもつた厭な水音が木靈した。

レディ・スレイヴが放つた流麗な投げに、ギャラリーは言葉を失つていた。

投げが決まつた直後、リタはA—72から距離を取り、敵の反撃に備えて拳を目線の高さに構えた。

背中からどうと地に投げ落とされたA—72は、未体験の外力に脳処理が追いつかず、大の字に仰臥して目を白黒させていた。宙を一回転した遠心力と、己の武器であつた六十キロ余りの体重を乗せた投げを一身に受けたA—72が放心していられたのは、ほんの四秒間であつた。

突如としてA—72の間抜け面が歪み、苦しげに身をよじつて掠れた声を発した。それから白目を剥いて弓なりにのけ反り、口からごぼりと胃液を吐き散らすと、身をよじつた姿で意識を失つた。

生ゴミの海に大破着底したA—72に何が起きたのか、奴隸たちは理解できず、そのおぞましい光景に身を寄せ合つた。

今度こそ敵の無力化を目視確認すると、リタは戦闘態勢を解き、調理着の袖で鼻血を拭つた。先ほど取り落とした布きれを拾い上げ、A—72の首筋に触れると、手近な守衛を呼び寄せた。

「脈はある。痛みで気を飛ばしてるだけよ。さつさと医務室へ運んで」

上司に指示を仰いでいた守衛が、事前に手持ち式の担架を用意していた。気絶したA—72を担架に乗せる守衛ふたりは、レディ・スレイヴの命令に沿う自身に疑問を持たなくなつていた。彼らの意識は、新鮮なゲロに触れないよう作業を進めるということに注がれていた。

奴隸蛮行【6—8】

食堂から搬送されるA—72を、リタは恨み混じりの視線を投げる
と同時に、一分前まで敵対していた奴隸の身を案じてもいた。

リタの背負い投げを受けた直後、A—72の体内では驚くべきメカニズムが働いていた。外部からのストレス——床に放られた衝撃がスイッチとなり、脊髄反射で神経伝達物質・アドレナリンの分泌が促進される。大量のアドレナリンが血中を駆け巡ることで心拍数が跳ね上がり、潤沢な酸素が筋肉に供給される。人体の神秘を凝縮した天然のドーピング行為は、ヒトの奥底に眠る動物としての本能を呼び覚まし、卓越した運動機能や、強靭な胆力をその身に宿らせる。要するに、火事場の馬鹿力でパンチが強くなったり、痛みを感じなくなったりするのである。脳内麻薬の呼び名に違わず、血管収縮によるアドレナリンの鎮痛効果は市販薬の比ではなく、銃撃戦を無傷で切り抜けたはずの警察官が、同僚に指摘されて初めて自分が被弾していたのに気付き、緊張が解けた途端に血が噴き出すという類の超常的なエピソードは珍しくない。

誠に残念ながら、ヒトがアドレナリン超人でいられる時間は極めて短い。血中に放出されたアドレナリンは即座に分解酵素の餌食となり、ものの数秒でその一生に幕を下ろす。アドレナリン亡き後の人体には、その身に過ぎたる力への代償が待っている。耐えがたい脱力感と判断力の低下、そして忘れていた痛みが一気に押し寄せてくるのだ。A—72は、脳内麻薬が与えた貴重な四秒間を反撃に活かせず、遅れてやつてきた激痛にノックアウトされたのである。

素人相手に有段者レベルの武力で応じたことで、リタは幾ばくかの後悔を覚えていた。相手は数で勝つていたが、それを加味してもフエンアな勝負ではなかつたと、頑固な騎士道精神が戦闘直後の彼女を苛んでいた。

リタが自責の念を振り切れないでいると、A—72の搬送と入れ替わるように、小さな人影が食堂に飛び入ってきた。開戦前にリタが逃がしたはずのB—20は、乱れた調理着姿のルームメイトへ一直線に

駆け寄り、細い腕で抱きついた。汚れた衣類はそのままで、赤く腫らした目蓋がリタの鎖骨に押しつけられる。謝罪の言葉を繰り返してすすり泣くB—20の背中を、リタは慈しむように撫でた。

「ずっと見てたんだね、可愛いおばかさん。部屋で待つてりやいいのにさ」

「だつて、私がいなければこんなことには——」

震える唇を、リタの指が制した。

「あんたのせいじやないよ、ブリジット。あたしは自分で選んだ道を進んでるだけ」

ブリジットを抱きつかせたまま、リタは輪状の布きれを左上腕に通し、樹脂製のクリップで留めた。

「それに、自分の命運も掛かってるしね」

自作の腕章を眺めるリタの瞳が、一抹の不安に曇った。

もし男に生まれていたら——。物心ついた時分からしつこく付きまとう逃げ口上を、リタは揉み潰した。嘘も貫き通せば真実になる、どうでしよう?

拙い出来の腕章には、一対の翼を有する剣の刺繡が施されていた。英國陸軍の精銳部隊の徽章を、完成度はともかく、そのまま模したモチーフには、一説のスローガンが添えられていた。

「危険を冒す者が勝利する、か……」

リタの呟きに、ブリジットが怪訝そうに首をもたげる。

「何でもないの。気にしないで」

疑問符を浮かべるブリジットを、リタは力強く抱擁した。短いハグを解くと、喧嘩騒ぎから逃げそびれた奴隸たちへ視線を投げた。

「さあて、そろそろやらかしますかね!」

急に暴君の照準線に捉えられて身構えるギャラリーの前に、リタは堂々と進み出る。その場の奴隸全員が、間近で瞳を覗き込まれる錯覚に陥った。

「傾注せよ、愚鈍なる奴隸ども! 隸属と侍従、行き着く先はいずれかひとつだ! 決断の時だ、選べ!」

少女の形をかたどり、奴隸の皮を被つた権威が、腕章を通した腕を

高々と振りかざした。

「危険を冒す者が勝利する！」

『特務監督奴隸』略称・SASは、業績の振るわない奴隸調教施設の利益率向上を目的に試用が開始された。英国人らしく名称だけは格式張った本制度は、蓋を開ければ具体的な施策は皆無であり、奴隸たちの監督と指導を任せられているものの、実際に評定を下されるのは監督官であるリタ当人である。レディ・『マーガレット』・スレイヴを主人公とする等身大の人形遊びこそが、この実証実験の本質であった。

実験場、もとい上層部の道楽開催地にはバーミンガムの調教施設が選ばれた。施設の責任者は、上層部が早く人形遊びに飽きるのを願いつつ、リタをB—20の警護に就かせた。型破りな人形は、着任早々に暴力沙汰を起こして上層部を喜ばせ、役員の胃を痛めた。

ところが、実験は関係者の思惑の及ばぬ展開を繰り広げた。安直な言葉遊びの産物でしかなかつた肩書きを、リタは最大限に活用した。調教課程の奴隸でありながら、一定の権限を得たりタは、数週間の内に、施設運営に欠かせぬ存在にのし上がつた。商家出身のリタは調教施設を大航海時代の英國植民地に見立て、委任統治者としての職務を順風満帆にこなしていく。抜群の経営センスと歯に衣着せぬ物言い、奴隸同士のいさかいに単身で介入する勇姿に憧憬を抱き、レディ・スレイヴを目指す奴隸が続出した。向上意欲は奴隸の商品価値を底上げし、リタの特務監督奴隸着任から、バーミンガム施設の年次収益は首位を獲り続けた。

若き経営者、奴隸の頂点として確たる実績を築いたリタはその反面、使用人の本分たる家事雑用は不得手であつたため、それはそれで職員を悩ませたが、その不器用を補つて余りある懷刀が、敏腕奴隸に付き従つていた。B—20ことブリジットは、リタという核の傘を得たことで、無用の抑圧から解放されると、素材の持ち味を存分に発揮した。うろんな表情が生氣を取り戻すと、あどけなさの残る容姿からは想像も及ばない、秘めたる色香を振りまき、ブリジットが歩いた後には花が咲くとの噂が一人歩きするほどであつた。なかんずく、微笑

みから垣間見える暴力的なまでの妖艶さを危険視され、一時はブリジットの直視を禁じる措置が講じられたほどである。

互いに正反対の印象を持つリタとブリジットは、しばしば太陽と月に例えられ、しかも背格好が似ているので、施設外の人間からは姉妹と誤解されたものである。施設内で密かに、この二体のファンクラブが設立されたのも、決して不思議ではない。

リタがバーミンガムへ移った二年後、商品として出荷の日を迎えた。太陽と月は引き離された。当人らは知る由もないが、この二人が調教期間に裏の社交界で生んだ収益総額は、業界で五本指に記録されている。

レディ・スレイヴ自身は調教施設を去ったが、彼女の功績は高額奴隸の調教指南として今日も研究が続けられている。当時のレディ・スレイヴを知る職員にその人物像を訊くと、決まった応答が寄せられる。「ありやあ、鉄の女だつたよ」

奴隸蛮行【7—1】

〔7〕

—現在— サヴェジ日用品店

「まつたく、我ながらとんだお転婆ね……」

青く泥臭い郷愁から立ち返ると、リタは居心地悪そうに嘲笑した。たたずまいを直そうとして、そこで自分が両手足を縛られて地べたに座している現実を思い出し、なおのこと憂鬱になつた。

ハエのたかる蛍光灯が明滅する店内を見渡すと、気が滅入る光景ばかりが網膜を冒した。薄暗くて不潔な日用品店を、同じくらい汚い五人の若者が練り歩いている。全員が銃で武装し、さも得意げに肩で風を切つている。戸外の大雨が建物を叩く音に混じつて、少女のすり泣く声が店内に木霊する。悲痛な嗚咽が発せられる度に、男たちはせら笑つた。

あたしのせいだ。

果てなき後悔と義憤が、リタの心の内で渦巻いていた。この場における悪者が若者五人なのに疑いはないが、そいつらが人質を取つて籠城する展開を招いた己を恥じて、圧死しそうになつていて。

「でも、そのお転婆さんは死にかけの弱虫を助けてくれた。でしょ？」すぐ隣から掛けられた声に、リタは少しだけ首をもたげた。自分と背格好のよく似た声の主と視線が合うと、余計に胸が詰まつた。

「そうね。で、今は大事な友達を危険に晒してる」

リタの頭が、再び膝の間に沈む。つまらないプライドが、他者に涙を見せまいとあがいていた。

「リタは悪くないよ。どのみち、私は店を出られなかつただろうし」「お人好しは変わらずね、ブリジット。ここを生きて出られたら、歯が全部折れるまであたしを殴つてね」

「駄目だよ、商売道具は大事にしないと」

ブリジットは慈愛を込めて囁くと、リタの肩にぴつたり寄り添つた。やけっぱちの旧友の身体は芯から冷えきつており、小型犬のように震えていた。大雨に濡れたのが唯一の理由ではないことを、ブリ

ジットは重々理解していた。

「笑えないけど、ありがと。そんな冗談を言えるんだから、いい雇い主に逢えたんだね」

くぐもつた声音に、先程よりは元気が窺えた。

「仰る通り、素敵な旦那様に恵まれました」

「ふうん、好きなんだ？」

「うん、大好き」

瞬きも許さぬ、鮮やかな居合い切りだつた。奥手だと思つていた親友がこの一年ですっかりオンナになつていていた衝撃に、リタの尻が跳ねる。涙を拭うのも忘れて左隣を向けば、爆弾発言の主が柔軟な笑みを咲かせていた。

「それも冗談？」

目をしばたたくリタに、ブリジットがかぶりを振る。「意外だつた？」

「あんたのことだから、すつごい買い物がつくとは思つてたけど……」「買い被りすぎだよ』『すつごい』の深意には触れず、月並みな謙遜の裏では、桃色の幸せオーラが花弁を巻き上げている。

「……えつと、その御仁は議員先生か何か？」

初めて耳にするリタのうわずつた声音に、ブリジットは噴き出しそうになるのをこらえた。

「エリート軍人さんだよ」誇らしげに、調教時代からちよつぴり育つた胸を張る。

耳にした職種と現在地から、リタはブリジットの主人の生業を容易に推測できた。まして、彼女はここからそう離れていない邸宅に雇われているのだ。「まさか、S A Sなの？」

「うん。とっても強い、特殊部隊の少尉さん」

さも当然と言い放たれた響きに、リタは天を仰いだ。なお、当の少尉殿はその出生の一切が不詳の元奴隸であり、十四歳まで北アイランドでテロ活動に従事していた、業火に焼かれるべき人でなしである。

奴隸蛮行【7—2】

ブリジットが現状を以て平静を保つてゐる依拠を得たことで、リタの表情が晴れた。「じゃあ、そのご主人がもうすぐ助けに来るんだね？」

犯行グループに聞こえぬよう耳打ちして、親友の明るい肯定に備えた。

「それはないかな。今日は首都へ日帰りの出張に赴かれたから」まるで歴史書の如く、ブリジットはこともなげ言つてのけた。「だから、お疲れの御身をちゃんとお出迎えしたいんだけどね……」

それに、こんな醜態をあの人晒せるもんですか。

ブリジットの目論見をよそに、リタは食い気味に問いただす。「でも、S A S の基地そのものはこの街にあるでしょ？ だつたら、有事に備えて待機してゐる隊員はいるよね？ この店の外は警察が固めているんだし、今すぐにでも突入できそうじゃない？」期待の眼差しは、焦りに泳いでいた。

ブリジットは完璧を自負する使用人だが、おためごかしばかりの営業マンではない。質問に対しても、必ず事実だけを述べる。「待機中の隊員はいるよ。既に先遣隊が到着しているはず」

「じゃあ——」リタの瞳に、輝きが戻りつつあつた。

「でも、救出作戦にゴーサインが出る可能性は低いと思う」

求めていた甘言は、淡泊なひと息に打ち碎かれた。絶望に打ちのめされた哀情が零となり、リタの頬を伝う。「どうして——」

「私たちの存在」留守電の機械じみた声が、痛々しい喘ぎを遮つた。

「リタは、この店がどんな場所か知つてる？」数秒前の笑みはいざこかへ、抑揚のない問がリタへ投げ掛けられる。

「その……分からない。この辺りに来たのは初めてだから。攫われてからはずつと頭に袋を被せられてたし、逃げ出すのに必死だつたら」

ブリジットは領き、静かに語を継いだ。「ここはね、巷ではちよつと有名なドラッグ密売所なの。従業員は東欧のマフィアの末端で、麻薬

の売上を元締めに上納してゐる」

「それと私たちに何の関係が——」

自ら回答に辿り着いたリタに、ブリジットが深く頷く。

「そう、人質すべてが高級奴隸という事実が、事件解決を遅らせてゐる。

タグの情報から、人質の身許は調べがついているはず。容疑者の特定よりずつと先にね。もしも奴隸の所有者に権力者が混じつていて、としたら、司法機関はメディアへ圧力を掛けなきやならない。所有する奴隸が薬物中毒になつていたなんて世間に知られる訳にはいかないから、人質の救出より報道規制に人手を割く」

息継ぎもなしに、ブリジットの状況分析はつらつらと続く。「厄介なのは、私たちは奴隸は”モノ”だけど、その所有者は”ヒト”だつてこと。薬物に依存する奴隸は、当然罰せられる。

でも、そんなどうしようもない奴隸を案じてくれる、変わり者のご主人様がいるかもしない。ひとりか、あるいはもつと多くの声が、ばかな小娘の無事を願つているとしたら……事件への対応が慎重になるのは当たり前だよね」

ブリジットはそこでようやく肺の空気を循環させ、旧友へ屈託ない笑みを向けた。「ご主人に愛されてるんだね、リタ」

リタの頭が、ブリジットの胸に飛び込む。魚雷よろしく突っ込むなり泣きじやくる後頭部を、ブリジットは脚で器用に腹へと抱き寄せた。

「よしよし、今までよく頑張ったね。偉かつたね、つらかつたね、跳ねつ返りだね、不器用な子だねー」。

まつたく、今度は何をやらかしたの？　いや、大体は予想がつくけどね。ご主人と意見が合わなくて、家出でもしたんでしょ？　で、今になつてものすごく後悔してる。すぐに帰つて謝りたいのに、こんなところで足止めを食つて胸が張り裂けそう。そうだよね？」

災厄を招いた小さな隠し事を見透かす声に、リタの涙腺はこの日一番の緩みを記録した。

奴隸蛮行【7—3】

【8】

身を刺すような雨の降りしきる集合住宅街の一角に、屍肉を喰らうウジのように蠢く人影があつた。その中年男は、暴風で枝葉がもぎ取られつつある街路樹の根元にへたり込み、呆然と濶んだ灰色の雨空を見上げていた。男の名はアンブローズ・バグウエル、地元警察の窓際巡査部長である。

いつたい、どうなつてるんだ？

バグウエルが濡れた路面から身を起こそうとすると、衰えた腰を鮮烈な痛みが駆け抜けた。情けない悲鳴を上げて重い尻で地面を叩き、水浸しの道路に飛沫が散つた。

「困るんだよ、バグウエルさん。あんたと違つて、こちとら忙しいんだ。余計な力口リーを消費させないでくれ」

水揚げされた魚のように悶える中年警官を、同じ年頃の男が冷ややかに見下ろしていた。ダッフルコートから延びる左手に、日常生活では見慣れない機械が握られている。バグウエルは声の主の姿に目眩を覚えると同時に、ここに至る数秒前の記憶を取り戻した。

ダッフルコートの男——クラプトンと名乗つた陸軍少佐は、バグウエルの頭から制帽をひよいとかすめ取り、自分の頭に乗せた。

「どうです、似合いませんか？ 何なら、明日からあんたと交代しても面白そう」

言ひながら軽薄な笑みを浮かべると、SASのくたびれたベレー帽がバグウエルへ差し向けられる。「まあ、務まるはずもないでしようがね」

安っぽい挑発に、バグウエルはまんまと乗せられた。右手を腰のホルスターへ伸ばし、伸縮警棒を引き抜いた。アルミ合金製の鈍器が、パチンと無機質な音を立てて伸張する。最後に近接格闘訓練を受けたのはいつか思い出せなくとも、相手は自分と同じくらい腹の出た中年で、恐らくは実戦経験もない、キャリア組のぼんぼんであろうと確信していた。対する自分は？ つい三ヶ月前も酒場の喧嘩に駆けつ

け、顎にパンチを一発もらうだけで、酔っ払いふたりを沈めた現役のブルーカラーであると、密かに自信をみなぎらせた。

三メートルと離れていない暴力を目の前に、クラプトンはおどけて両手を上げた。「何もそこまでしなくたって——」

バグウェルが警棒を振りかぶつて前に一步踏み込むと、クラプトンの目が丸くなつた。敵の虚をついたと確信し、勝ち誇った笑みがバグウェルに浮かぶ。狙うは妨害電波の発信源である、左手のジャマー。妨害電波の支援を失つたクラプトンの反応を想像すると、思わず胸が小躍りした。ジャマーが何を動力にしていて、具体的にどうやって妨害電波を停止するかといった疑問など頭の片隅にもなかつた。クラプトンの左肩目掛けて、バグウェルは警棒を振り下ろした。

奴隸蛮行【7—4】

間合いは完璧だった。黒光りする警棒の先端は、クラプトンへの直撃コースを辿っていた。ほんの四分の三秒前までは。

それまで直立不動を貫いていたクラプトンが、半身になつて右前に踏み込み、バグウエルの一撃をかわした。虚空を打ちすえたバグウエルは、標的を捉え損ねたと理解したが、貧弱な足腰で行き場を失った運動工エネルギーを御せず、前傾姿勢でつんのめつた。片足でたらを踏むバグウエルとのすれ違いざまに、クラプトンは狙いを澄まし、ジヤマーを持つ左手を突き出した。角張った樹脂ハウジングが、バグウエルの鼻つ面を強打した。大した威力ではなかつたが、バグウエルの自重と慣性モーメントの後押しで、鼻柱が折れた。

警棒を取り落として顔を庇うバグウエルに、クラプトンは腰を落として肉薄した。仰け反つて隙だらけの胸ぐらを掴むと、そのまま腰の球体運動に乗せて、後ろの街路樹へと背中から叩きつけた。でこぼこの樹皮を伝つて、肥えた尻がぬかるんだ土に沈む。肺の中の空気が押し出されたせいで鼻血が噴き出し、警察の黄色のベストを汚していった。

「あーあー、えんがちよ」クラプトンはぱくぱくと酸素を求めて喘ぐバグウエルの前に屈み、その胸からボディカム（警察官が事件対応にして映像を記録するカメラ。録画映像は自身の行動の正当性を証明するのに使われる）を剥ぎ取つて、近くの排水溝へと投げ捨てた。「いけませんなあ、巡查部長。武力を行使するなら、ちゃんと録画ボタンを押さないと。勉強代として、署に戻つたら支給品の紛失を咎められるんですな」

木の根元でぜえぜえ喘ぐバグウエルには、頭上の不良士官を睨む余力すらなかつた。雨と涙でかすむ視界に焦点を取り戻そうとしている、右から冠水した道路をかき分けてくる足音が聞こえた。

「遅いぞ」足音の方向を見ずに、クラプトンが毒づく。声色は苛立つていたが、表情に安堵が現れていた。

バグウエルの視界がはつきりしてくると、クラプトンの左隣に女が

立っているのが見えた。背丈はクラプトンとほとんど変わらず、男物の黒いトレーニングコートがそのシルエットを包み隠している。雨天にもかかわらずサングラスを掛け、どす黒い中折れ帽を被っている。それでも女と見分けられたのは、端正な口元と新雪のように白く澄んだ肌に、バグウェルが半死半生ながらに劣情を覚えたからであつた。

「申し訳ございません、道路が使えなかつたものでして」

女の口振りは少しも陳謝が窺えず、むしろこの状況を愉しむかのように口角を上げていた。女はコートのポケットからタブレット端末を取り出すと、少し操作してからクラプトンへ差し出した。

こいつらの目的は何だ？

未だにダメージから立ち直れないでいるバグウェルの眼前に、クラプトンがタブレットの液晶画面を向ける。「手心は加えたつもりだ。目は見えるだろう？」クラプトンが画面中心をタップすると、高画質の動画が再生された。

奴隸蛮行【7—5】

定点カメラが、陽の落ちきつた繁華街の一角を切り抜いていた。観の大半は華美なホテルの正面玄関が占め、浮かれた足取りの人影が隣接する歩道を行き交う。手前を、車道が一直線に横切っている。画面外に見切れたホテルの表札には、少なくとも四つの星が輝いていた。

映像の意図を探ろうとして、バグウエルは目を細め、鼻先が触れるほどタブレットに顔を寄せた。駄目な部類のアナログ人間なので、ズーム機能を知らなかつた。視神経に無茶をさせている内に、道路標識がフランス語で書かれているのに気付いた。

「イギリスではないな。観光地だとすれば、ニースじゃないか？」

答え合わせに応じる声はなかつた。バグウエルがしぶしぶ映像鑑賞に戻ると、画面右端から黒のルノーが現れた。艶めく車体が完璧な制動でホテル前に停まり、すぐにタキシード姿の運転手が降りてきて、慣れた所作で後部座席へ向かう。スマートの貼られたドアが開かれると、革靴の尖つたつま先に続いて、男が歩道に降り立つ。バグウエルの脂ぎつた鼻先が画面を汚す寸前で、撮影者が男の後ろ姿に望遠ズームを掛けた。

少しでも官憲らしく見せようと、バグウエルは男をつぶさに観察した。身長は一七〇センチほどで、バグウエルより少し肥えているものの、肩幅はがつしりしている。仕立ての良いグレーのスーツが、その財布の重さを物語つてゐる。黒い頭髪をオールバックに撫でつけており、白髪は認められない。セットも含めて、理髪師の手が入つてゐるらしい。

男は運転手に軽く頷き、ルノーの後部座席へ振り返つた。彫りの深い顔立ちだ。トルコ人も見えるが、白人らしい肌色だつた。

「この男が何だというんだ？」

やはり返事はなかつた。してやる必要もなかつた。

男が後部座席へ右手を差し出すと、何者かの手が添えられた。女の手だつた。

バグウエルの背後を、豪雪が吹き荒れた。全身を高圧電流に焼かれたようなショックが駆け巡り、言語野がシヨートした。後部座席から現れた人物を目の当たりにして、自分は悪夢にうなされているのだと願つた。ズぶ濡れの尻の冷たさが、これが紛れもない現実だとほくそ笑む。男の手を握っていたのは、バグウエルを第二の人生の踏み台に使つた、かつての妻であつた。

バグウエルはタブレットを放り投げると、頭から泥だまりにうずくまつた。空を舞つたタブレットを、長身の女が片手で造作もなく捕らえる。

「悲しいねえ、バグウエルさん。あんたが汗水垂らして働く理由が、どこぞのじじいとねんごろだつた訳だ」

クラプトンの言葉に、バグウエルは頭を抱える腕で耳を覆つた。「でたらめだ！　あんたらが俺を陥れようとでつちあげた、嘘つぱちの作り話だ！」

「フェイクだと、そう思いたいんだろう。残念ながらこの映像は正真正銘、あんたの奥さんが出ていったその日に撮られたものだ。当日は彼女の誕生日だつたんだろう？　祝つてやりなよ、愛する女の門出だぞ」

バグウエルは金切り声を上げ、そして吐いた。

奴隸蛮行【7—6】

あわや中年男の吐瀉物を引つ被ろうかという間際に、トレーンチコートの女がクラプトンの身をぐいと引き寄せた。黄色と黒がごた混ぜになつたゲル状の物質が、氾濫した路面にほとばしる。バグウエルの一部だつたものは、ゆらゆらとクラプトンの前を横切り、やがて近くの排水溝へと呑み込まれていつた。即席の生物兵器が無力化されたのを見届けると、女はクラプトンから離れ、自分が掴んで乱したコートのしわを伸ばしてやつた。女の身繕いが終わると、クラプトンは交渉に戻つた。

「……えー、今の無礼は水に流すとしよう。実際に流れたしな。さて、お話を続けて宜しいかな?」

バグウエルは返事をするどころではなかつた。妻の不倫への拒絶反応に、徹底的な胃洗浄で対処しているかのようだつた。

相手が交渉の場に着くまで——バグウエルがゲロを吐き終えるのにどれだけ掛かるだろうかとクラプトンが思案していると、女がすつと前に進み出た。四つん這いでげえげえやるバグウエルに大股で迫ると、革手袋をはめた右手でその後頭部を掴んだ。バグウエルが状況を察する間もなく、女は足下の洪水にバグウエルの顔を沈めた。ただでさえ詰まつていた気道に雨水が流れ込み、バグウエルはしゃにむに暴れたが、女を振りほどくことは叶わなかつた。

「おい、もういいだろう」

クラプトンの制止で、女はバグウエルの頭を引き上げた。女があまりに乱暴に扱つたため、ぶちぶちという音と一緒に、バグウエルの後頭部から数百本の縮れ毛がもぎ取られた。溺死しかけたショツクと頭皮の痛みにバグウエルが泣き叫ぶのも素知らぬ風に、女は手袋に絡みついた毛髪を払い落とした。

「加減しろよ、死んじまうぞ」

クラプトンの不服にも、女は動じなかつた。

「そう悪いことではないでしょ? 街の寄生虫が減るんですから」

クラプトンは手を額に天を仰ぎ、当初の目的に立ち戻つた。この女

と言い合つたところで時間を浪費するだけなのは、経験から知つていた。

クラプトンは膝を折り、グロッキーにへたり込むバグウェルと再び向き合つた。

「もう勘弁してくれ……」

たつぱり十秒間の水責めに心を折られ、巡査部長はうつろな瞳から涙をこぼしていた。

「部下の乱暴を詫びるよ。もつとも、あんたが最初から良い返事をしていれば、こんな目に遭うこともなかつたんだが。」

さあて、仕切り直しといこう。あんたの奥さんは、汗だくで働くあんたを欺き、どこぞの野郎と仲良ししてた訳だ。一度や二度じやない。あのじじいとは、五年も親しくやってると調べがついている」クラプトンの供述が続く内に、死にかけのバグウェルの中で火種が生まれた。火種はじわじわと育ち、暗い緑色の炎を揺らめかせた。「このまま警察を続けていても、ろくなキャリアは望めない。それに、気付いているはずだ。あんたを好いている人間は、この街のどこにもいない。誰からも好かれていないのを常に自覚しながら、それでも正義の警察官の猿芝居に興じられるか？」

バグウェルは首をもたげて、クラプトンを睨みつけた。目の前の嫌みたらしい軍人への厭惡もあつたが、それ以上の感情に支配されていた。

「憎むべき相手は分かつたな？ 目には目を……奥さんと同じように、あんたが第二の人生を始めるのを咎めるやつはない。本当は好きでもない仕事を何十年も勤めたその根性は、正直いつて平伏するよ」

「無駄口は要らない。何をくれるかだけ言え」

最早、法の護り手としてのバグウェルは存在しなかつた。反逆者たる妻への憎悪に燃える両の眼が、ひとつの欲望にたぎつっていた。

「さつきの映像はもちろん、奥さんの過去五年間の行動記録すべて立て籠もり事件の指揮権と引換だ。データの受け渡しについては、追つて報せる。心配するな、約束は守る。

第二の人生を始めるのに、けちな退職金じゃあ足りないだろう？
幸い、例の間男は某国の大使館勤めだ。訴訟を起こすか、それとも
強請るか、どう使うかはあんた次第だ』
口角を邪惡に歪ませて、バグウエルは頷いた。

奴隸蛮行【9—1】

【9】

十三時四五分、サヴェジ日用品店を包囲していた警察車輌が、列を成して規制線の外へと走り去つていった。青い回転灯の最後尾が見えなくなると、別の車輌群が入れ替わりにやつてきた。いずれも車体をオリーブ色に塗装されており、英國陸軍所属を示すステンシルが施されていた。

大雨の中で慌ただしく陣形を組む軍用車両を眺めながら、リチャード・クラプトンは額の雫を拭い払つた。

「ろくでなしの邪魔はあつたが、山をひとつ越えたな」

「次にもつと大きな山嶺がお見えでないようで」

隣で発せられた女の物言いに、クラプトンはむつとなつた。

「まあ、怖い」

おどける銀髪の女を睨んで一秒、クラプトンは大きくため息をついた。バグウエルから籠城事件の指揮権を奪つてここに至るまでの気苦労が、不要な言い争いから彼を遠ざけた。何より、ふたまわり年の離れたこの女を言い負かせる気がしなかつた。

よどんだ緑色の車体を勘定しつつ、ニーナは隣の上司の神経をついた。

「それにしても、随分と頭数を集めましたね。お上からお叱りがあつたらどうしましょう」

「あとでお前が何とかしろ」

「相変わらず、使用人の使いが荒い旦那様ですこと」

ぶすつとする上司を脇目に、ニーナはくすくす笑つた。“主人を手中で転がしてこそその使用人”、それが彼女の矜持である。

それに、彼女がこの緊張下でクラプトンをおちよくるのは、確たる理由があつた。

籠城事件の発生直後、クラプトンはブリジットが人質のひとりである事実を、地元警察の知人から聞き知つていた。状況を理解するや、クラプトンは固定電話と携帯電話ふたつを同時に使って、三つの仕事

に取り掛かった。ひとつは、地元メディアに対する徹底的な情報統制。次に、事件対応の直接指揮権の獲得。最後に、ブリジットの雇用主——血の繋がらない次男坊に、地元での事件発生を知り得ぬよう取り計らうことだつた。だが、どうやつて？

スマートフォンひとつで地球上すべてのメディアを閲覧可能な現代において、時の運はクラプトンに味方した。翌年に控えたロンドン・オリンピックに向けて、かの次男坊は警備体制や緊急時の対応の確認と指導という名目で、首都へ日帰り出張していた。これを好機と、クラプトンは現地の部下に連絡すると、次男坊から情報インフラを剥奪し、身柄を首都に留めておくよう指示を出した。仔細は現地の部下に一任していたが、上手くいくという算段があつた。そうでなければ、今頃は電話口の次男坊からヒステリックな受けていたに違ない。

クラプトンは魔法瓶の煎茶をすすり、背後の針葉樹に身体を預けた。「まったく、夫婦揃つて手が掛かるつたらいい

『「蛙の子は蛙」とも・いいますからねえ』

煎茶を気道に詰まらせ、クラプトンは激しくむせた。

奴隸蛮行【9—2】

薄ら寒い日用品店に、小さなくしゃみが木靈する。今日これまで何度も聞こえた音だったが、ブリジットの口から発せられるのは、これが初めてだった。

「あたしはもう大丈夫だから、もう離れなよ」

リタが尻をずらして、雨に濡れた身体を旧友から離そうとした。泣き腫らした目蓋には、まだ赤みが残っていた。

「悪寒はないから心配しないで。それに、まだ冷たいじゃない」

おずおずと距離を取ろうとするリタを、ブリジットも尻移動で追いかける。縄で不自由な手で、リタのエプロンドレスを掴む。

「一緒に暖まろう?」

ふたりの尻が再び密接し、根負けしたリタはブリジットの肩に寄りかかつた。

数分前に泣き止むまで、リタは調教施設を出てからの経緯をブリジットに話した。ウェールズでの奴隸即売会に出品されるはずだったリタは、ひとりだけ別の車に乗せられて、あるホテルのスイートへ連れられた。カーディフで食品加工業を経営する中年夫婦が、その部屋で待っていた。それが、リタについた買い手だつた。

運転手つきのメルセデスで新たな主人の住み処へ向かう途中、それまで押しとどめていた感情が涙腺から溢れた。隣に座る婦人がリタをそっと抱き寄せて、うちに来てくれてありがとうと囁いた。主人もまた、温かい手でリタの手を包み、彼女を家族として受け入れる意志を伝えた。

夫婦は若くして起業し、事業の発展に心血を注いだ。過労がたたり、ガンを患つた婦人は二十代後半で子宮を全摘出していた。企業から四十年、信頼の置ける後身や幹部が揃い、経営が盤石になつたのを見届け、夫婦は失つた時間を取り戻そうとした。奴隸の購入は最善の手段ではなかつたが、幼い孤児を引き取るには歳を取り過ぎていた。世論が奴隸制度の完全撤廃に傾倒しつつある時勢を信じ、彼らは奴隸雇用を斡旋するエージェントに希望を告げた。「とにかく面倒くさい

子を引き取らせてほしい」と。エージェントの返答はこうだった。
「ご希望に添える品がございます。その奴隸はレディ・スレイヴの別
名で呼ばれ——」かくしてリタは、バラス家の家事使用人かつ未来の
息女として迎え入れられた。

リタは愛娘も同然の扱いを受けると同時に、一代で企業を成長させ
た夫婦のスパルタ教育を課せられた。広い邸宅のあらゆる場所で、リ
タは夫婦と口論を生じ、主人の秘書兼執事に監督される日々がやつて
きた。そうして主人から経営学を直接に指導されていた今日この日、
リタは勉強机を蹴り倒し、開いていた窓から表の植え込みへ身を投
げ、邸宅を脱走した。走りながら一度だけ振り返り、主人が窓の奥で
唖然としていたのが心地よかつた。植え込みの中に事前に隠してい
た財布があつたので、一日かそこら新鮮な空気を吸つて、互いにほと
ぼりが冷めた頃に戻るつもりだった。事件が起こつたせいで、冷めす
ぎてしまった。

奴隸蛮行【9—3】

帰れたはずの家を思い出したことで、リタはまたもしおれてしまつた。ブリジットの懸命な励ましも甲斐なく、老け込んだ面持ちで自嘲にふけつた。

「あんたはびっくりするほど変わったね、ブリジット。施設にいた頃は、あたしの後ろで小さくなつてただけだつたのに。軍人さんとの暮らしは、そんなにエキサイティングなの？」

ブリジットは穏やかに首を振つた。

「心安らかな日々だよ。旦那様はちよつと不思議な感性をお持ちだけど」

「あんたが言うなら、相当な奇人ね」

ブリジットは一重に苦笑しつつ、居住まいを正した。

「私が変われたのは、リタのおかげ。リタがいなかつたら、今の私はいるもの」

「じゃあ、失望させちゃつたね。あんたが慕う『リタ』はもういない。今になつて考えると、施設でレディ・スレイヴなんて陳腐な革命家を氣取つていたのは、他人に舐められないための口実だつたのかも」

リタは天井を仰ぎ、切れかけの蛍光灯に求愛するハエを目で追つた。

「買ひ手が付いて……今のおうちに引き取られた時に、レディ・スレイヴは死んだ。旦那と奥様は、高飛車なあたしを娘も同然に扱つてくれた。小言まみれの秘書や家政婦長ハウスクーパーも、あたしの意見を頭ごなしに否定しなかつた。あの家は、そのままのあたしを受け入れてくれた。向こう見ずなレディ・スレイヴを——意地つ張りなりタを求める声なんてなかつた。

だから、失う怖さを知つた。今ここにいるのは、ただ臆病なだけのマーガレット。ほんと、皮肉よね。奴隸の肩書きを誰より疎んでいたあたしが、喜んで自由の下僕に成り下がるなんてさ。施設で偉ぶつて説教してたくせに、今じやこのざま。だからお願ひ、幻滅してね

そこまで言い切ると、リタはうなだれて耳を膝で塞いだ。彼女は敬

虔なプロテスrantではなかつたが、実の親に身を売られた時でさえ恨まなかつた神に、初めて唾吐いた。心の内で万物をひとしきり罵つてから、二四時間後の自身がどうなつていようが、二度とブリジットに相まみえないよう祈つた。恨み節を奏した手前、祈る先がなかつた。

「本当にそう思つてる?」

純粹無垢な問い掛けが、塞いだ耳へと滑り込む。出逢つた時からずつと好きだつた囁き声が、丸裸の心を突き刺した。「あのぶつきらぼうが、一年そこらで矯正されるとは信じられないけど」

リタが知る限り、ブリジットは一度たりとも挑発的な物言いをしてこなかつた。野ウサギのようにいち早く逃げるのが常だつた旧友の言葉に、リタは反射的に食つて掛かつた。「何が言いたいの」不機嫌な声音で応じた直後、リタは肺の中の空氣が凍結する心地を味わつた。隣に、知らない女がいた。その微笑みこそブリジットと瓜二つだが、臆病だつた彼女と相反する、猛々しい意志を身にまとつていた。言葉を失つているリタに、女は穏やかに告げた。

「リタはまだここにいるよ。その身を焦がして、自分の理想を最後まで貫いた女傑。ずっと頑張つたせいで燃え尽きたように見えるけど、灰の中でまだ赤く燐つている」

旧友の異常に面食らうリタの鼻に、ブリジットのそれがぬうと接する。

「ねえ、『リタ』だつたら、こんな時にどうするだろうね?」

額面通り、眼前に迫つたブリジットの深く蒼い瞳に見据えられ、リタの頭の中で色々な言葉が飛び交う。恐怖、未知、憎悪、嫉妬、欲望。わななく唇が、たどたどしく音を紡ぐ。

「もう諦めて、ブリジット。あたしは無力な自分を受け入れた。それでいいじやない。大体、見栄や虚勢で武装した男五人を倒すのは無理だよ」

あわや表面張力を超えんとするリタの言葉に、ブリジットは間髪入れず確認した。「ということは、十分な武力があればいいんだね?」不可解な言動にどう反応すべきか首をかしげるリタをよそに、ブリ

ジットはリタの背後を覗き込んだ。突飛な行いに気圧されたりタが何か言うのも意に介さず、その手のいましめを熟視すると、やがて呟いた。「……うん、これならやれそう

「どういうこと?」

「心配しないで。リタの意志はしつかり継いだ。今度は私が救う番だから」

一方的な意志表明に混乱するリタに、ブリジットは不敵な笑みを浮かべた。

“危険を冒すものが勝利する”、そうでしょ?」

奴隸蛮行【10—1】

【10】

クラプトンは陸軍の指揮車輌に乗り込むと、フロア中央の机を通り過ぎ、壁際のホワイトボード前へ直行した。クラプトンの一歩後ろを、サングラスを外したニーナが追従していた。ふたりのコートから滴る雨水が床を濡らしたが、車内に詰める四人の情報部員は気にも留めなかつた。

「報告しろ」とクラプトンが命じる前から、情報部員の男ひとりがタブレット端末を手に立ち上がつた。

「状況は悪化しつつあります。十分前の交渉で、犯行グループはこれ以上の引き延ばしを認めない旨を通達しています。以降はこちらからの電話にも応じません。直後に、トイレの換気窓から店の電話が投げ捨てられるのを、偵察チームが確認しています」

「十分前か」クラプトンは、事件の情報が集約されたホワイトボードを見込んだまま、語を継いだ。「交渉人の意見は?」

「犯行グループと接触する手段はまだありますが、主導権は敵方へ渡つたと判断しています。また、電話口の容疑者の言動が支離滅裂になつて いるそうです」

「ラリつて いると?」

「その可能性が高いかと」

情報部員は努めて冷静を保つていたが、言葉の端々に僅かな焦りがあるのを、クラプトンは聞き取つていた。ホワイトボードから一枚の写真を剥ぎ取ると、そこに写る男の風貌を検めた。写真は容疑者筆頭のジム・カヴィルのマグショットで、数年前に車上荒らしで検挙された際に撮られたものだった。

情報部員は、指揮官の次の発言を辛抱強く待つた。お相手は齢六十に近いのだと自分をなだめすかしていると、我慢の時が終わつた。
「交渉人は十一分に責務を果たしてくれた。にもかかわらず、容疑者は我々の厚意を無碍に、平和的な解決案を棄却した。こちらも相応の強硬策を探る頃合いだろう。

現時点を以て、本件はSAS連隊D戦闘中隊による直接介入を主軸として収束にあたる。全部署に、警戒を強めるよう通達しろ」

指揮官の決定に情報部員は力強く領き、現場のSAS隊員との通信を担う担当官に指示を飛ばした。通信員が手元のマイクのスイッチを入れる寸前に、クラプトンが付け加えた。

「偵察……いや、狙撃チームに伝えろ。いつでも撃てる状態にしておけ、と」

通信担当は肩をすくめて、命令に背いた。「それは無理です。ずっと前から、薬室に初弾を込めさせていますから」

部下の実直な仕事を目の当たりに、クラプトンはいくらか不安が和らぐのを感じた。慢心を覚える前に気を張り直すと、濡れ鼠のコートを空いているスツールに放り、店舗の見取図が拡げられた机に向き合つた。

見取図には、人質と容疑者の位置や、建物の構造的に弱い箇所といつた要点が記されていた。リアルタイムで情報が書き加えられるので、空白の部分はほとんど残っていない。情報は見取図に直接書かれず、その上に重ねた透明なシートに書かれている。アナログではあるが、シートを新しいもの交換するだけで、この単純な指揮所は秒ごとに変わる状況に対応できる。ヒトそのものを完全に模した人工知能が生まれない限り、情報技術における人間の地位は揺らがない。

「心意気は結構ですが、具体的なアプローチはお考えで？」

ニーナの軽口に、作戦指揮に使うヘッドセットの具合を調節するクラプトンの眉が歪む。

「それを今から探すんだ。イカサマにワンペアで勝つ道筋を作るんだよ。暇を持て余しているなら、お前も突入部隊に加わるか？」

ニーナは鼻で笑った。「ご冗談を。わたくしまでお高い人質に取られてしましますわ。そういった嗜好でしたら、謹んで拝命しますが」

クラプトンは無視を決め込み、店舗の見取図を相手取つて、やるべき作業に没頭した。

悲しいかな、口の減らない女兵士の言う通りで、SASは次の一手に欠いていた。警察から引き継いだ情報では、事件解決の突破口とし

て不十分であつた。

店内の監視カメラは、低解像度の画がコマ送りで送られてくるといつた劣悪な性能で、重要なタイミングを見定めるのには使えない。

今や個人の裁量で発砲を認可された狙撃チームも、店舗正面のバリケードやシャツターの隙間という、ピンホールカメラのような視界しか得られなかつた。

外壁越しに集音マイクで音を拾う試みも、降り続く豪雨がノイズを生み、何とか人声を拾えても、女の嗚咽や知性の乏しい罵詈雑言くらいのものであつた。

情報不足による戦術的不利と、採光窓がないふざけた建築設計に、クラプトンは周囲に聞こえないよう、ため息を漏らした。事件の解決には、極めて正確な情報を、迅速に得られる手段が不可欠であつた。

歯がゆさで眉間にしわが寄り、苛立ちを紛らわそうとして、二メートル四方の指揮机の周りを練り歩いた。衛星軌道が三周目を迎え、店舗屋上の見取図の前ではたと足を止めた。

屋上中央には空調の換気装置とダクトが、南側の隅にはスプリンクラー用の貯水タンク設けられていた。店内に繋がる通用口はなく、貯水タンク近くに備え付けられた点検用の固定梯子《タラップ》が、屋上へ通じる唯一の経路だつた。

クラプトンは再び店内見取図を見下ろして思案し、それから弾かれるように身を起こすと、情報部員たちに命じた。

「展開中の隊員から、腕の立つ者を引き抜け。CTR（近接目標偵察）をやらせるんだ。山岳小隊所属か、機械に強いやつが欲しい」

言い終える前に双眼鏡を掴むと、指揮車輌のスライドドアを開け放つた。機材で暖まつた車内に、冷風が吹き込む。百メートルと離れていない正面に、店舗の出入口が見えた。

クラプトンは濁つた水たまりに降り立つと、全身を雨に晒しつつ、店舗の左側の壁が見える位置を探し歩いた。目的のアングルを見つけると、双眼鏡で貯水タンク——正確には、その近くのタラップを観察した。

タラップに転落防止の囮いはなく、全体が赤茶色の錆に覆われてい

た。強雨にめげず目をこらすと、どうやら横棒が二本ほど失われており、脆弱な構造材が強風に煽られて、今にもへし折れそうになつていだ。

タラップの観察を終えたクラプトンは、指揮車輛へと駆け戻り、屋上の見取図を前に陣取つた。車内で待機していたニーナが、濡れた頭をタオルで拭つた。

「老体に無茶を強いるのは、あまり褒められませんね」

「老体が無茶をしないから、こんな世の中なんだよ」クラプトンは赤い油性ペンのキヤップを弾き飛ばし、屋上見取図に文字を書き込みながら、情報部員に尋ねた。「CTRに使える隊員は用意できたか？」

情報部員が、監視カメラの映像から目を離さずに答えた。「ふたりいます。山岳小隊のトラヴィス・パーセル伍長。それと、航空小隊からダニエル・パーソンズ伍長が志願しています。両者の経歴は――」

「いや、そのふたりで異存ない」クラプトンはペンのキヤップを戻し、顔を上げた。「そいつらをここに呼べ。直に要旨説明『ブリーフィング』をしたい

「承知しました」

情報部員がマイクのスイッチに指を掛けたその時、クラプトンが急な待つたを入れた。

「先程の人選に問題が？」戸惑う情報部員に、クラプトンは少し碎けた口調で応じた。「クラッキングを受けた警察の間抜け面、お前らにも見せたかったよ」

四人の情報部員が、揃つて破顔した。「前々からバックドアを作つていましたからね。楽なもんでしたよ」

警察の指揮系統車輛のブラックアウトは、この四人が引き起こしたものであつた。彼らは矢面に立つSAS隊員を後方支援すると同時に、試験運用中の電子戦部隊に属していた。

事件の発生直後、警察のデータベースに侵入した電子戦のエリートたちは、サヴァエジ日用品店の麻薬取引と地元官憲の癒着を暴いた。さらに関係筋を辿ると、ひとりの駐英ルーマニア大使館職員に行き着いた。この職員こそバグウェルの妻の不倫相手であつた。

この間男には麻薬ブローカーという裏の顔があり、テロ組織との関与が濃厚として、かねてより首都のM I 5（軍情報部第五課、保安局）の監視対象リストに挙げられていた。M I 5に限らず、こうした諜報機関は国家権限を傘に、S A SやS B S（特殊舟艇部隊、S A Sのライバル的存在）に汚れ仕事を下請けさせていた。バグウエルが見せられた盗撮映像も、とあるS A S隊員が暗い路地に身を潜め、ゴミバケツの陰から望遠で取つたものであつた。特殊部隊として腹に据えかねる雑用であつたが、今回は泥中のダイヤを掘り当てる幸運に恵まれた。件の大使館職員の収入源のひとつに、サヴェジ日用品店の名があつたのだ。

特異な嗜癖でもなければ、わざわざ中年女を好んで抱く大使館職員などいない。この男の目的は、バグウエル夫人の垂乳根の他にあると、クラプトンのすべき心は断言した。本能由来の勘に狂いはなく、このルーマニア人はバグウエル夫人から警察組織内部の情報を聞き出し、他の犯罪組織に売るという魂胆があつた。もつとも、肝心の夫人が自分へのロマンスに狂つてしまつたのと、その夫がいつまでも昇進しないせいで、計画は成就しなかつた。

英国内に浸透する海外マフィアにとつて、これらの情報は屁でもない。だが、ウェストマーシア警察はどうか。いくら無能とはいえ、犯罪組織と繋がりを疑われる警官の存在は都合が悪い。それならいっこ、大失態を犯すかもしれない人質救出作戦の指揮を、妙ちくりんな陸軍少佐に譲り渡す方が賢明というのが、警察上層部の判断であつた。

かくして、クラプトンは地元警察を現場から排除し、当局から事件の総指揮を引き継いだ。機密情報を漏洩したかどでM I 5の小言を受けるのは避けられないが、次男坊の恋人を五体満足で救出できるなら、それ以外は些末でしかなかつた。何より、この生来の問題児は広組の嫌味に屈する器ではなかつた。

真に不憫なのは、バグウエル巡査部長である。彼は明日にも家庭裁判所の受付で妻の不徳をがなるだろうが、その先で待ち受けているのは慰謝料や恩赦ではなく、防諜機関による訊問の日々である。

救いがまったくない訳ではない。バグウェルのいなくなつたヘリ
フォードの街は、少し綺麗な景観を取り戻せるのだから。

奴隸蛮行【10—2】

召還命令から間もなく、フード付きの防水ジャケットを着たSAS隊員ふたりが、指揮車輌にやつてきた。両者とも二十代半ばで、取り立てて目立つ特徴のない風体であつた。ジャケットの内側は、ポロシャツにジーンズというなりで、迷彩服を腕まくりという、いわゆるマツチヨな軍人からはかけ離れていた。

クラプトンは形式的な挨拶に割く時間さえ惜しみ、ふたりを自分の隣に来させるなり切り出した。「CTRに向かってもらう。位置は、目標の屋上だ」

有無を言わせぬ口振りに、隊員ふたりはジャケットを脱ぐ手を取めて、戸惑いがちに領いた。基地では不真面目の権化と名高く、自分の執務室にいる時は下着姿でくつろいでいる不良士官が、どうしても目の前の男と重ならなかつた。雑念に捕らわれていたせいで、ニーナが投げよこしたタオルが、ふたりの顔面を直撃した。

クラプトンが、屋上の見取図を指示した。「この嵐ではヘリは飛ばせないし、これ以上の衆目は惹きたくない。身ひとつで建物を登攀してもらう」

「貯水タンクの近くにタラップがあるが、かなり老朽化が進んでいる。それに、壁一枚を挟んだ先にレジがある。容疑者のひとり、カヴィルはここからずつと動いていない。こちらの存在が気取られずに屋上へ到達するのが大前提だ」クラプトンが目配せを受けて、頭にタオルを被せたパーセルが首肯する。険しい岩山や断崖絶壁と対峙する際、山岳小隊の技術は心強い武器となる。

クラプトンは緑茶を一杯すすり、ブリーフィングを続けた。「屋上に上がつたら、店舗への侵入経路を探れ」

「ありました」

クラプトンの前に、モノクロ印刷の冊子が差し出された。ダニエル・パーソンズが書面の山から、店舗に設置された室外機の設計図を探り当てていた。

「聞かせろ」公私を問わず、クラプトンは若手の意見を重用する性質で

あつた。これだけ聞くと出来た上官に思えるが、根本をたどると、單にものぐさな人間味が運良く機能しているに過ぎない。

軽い会釈で応じてから、ダニエルは説明を始めた。「室外機から延びる複数のダクトそれに、整備用のハツチがあります。南京錠が掛かっていますが、解除は容易でしょう。

古い大型の設計なので、ダクトに潜り込んで店内へ侵入も可能と考えられます」

ダニエルの整然とした論を吟味しながら、クラプトンは室外機の設計図と向き合つた。実際の軍事作戦が計画通りに進行しないジンクスを、クラプトンは身を以て叩き込まれていた。だからこそ、ダニエルの提案に落とし穴がないか、手を顎に注意深く反芻した。

三十秒間、誰も口を開かなかつた。中隊の長がこれほど長く黙る異常事態に、ダニエルは不安を覚え始めていた。

ダニエルが自信の揺らぎに絶えきれず、何かを言いそうになつたその時に、クラプトンが目線を上げた。

「必要だと少しでも思う装備は、残らず持つて行け。もしもの場合に備えて、突入用の爆薬も忘れるな」

中隊長のおおよそ良好な評価に、ダニエルの気持ちは晴れた。壁に背を預けた二一ナが、「もつとはつきり褒めてはどうか」と、半眼を向けていた。物言わぬ茶々に眉をひそめつつ、クラプトンは咳払いをした。「すぐに取り掛かれ。本件最大の防衛対象が誰なのか、ゆめゆめ忘れるな。D戦闘中隊の存続が、これの成否に懸かっている」

その場の男全員が、言葉の真意をくみ取つて、深く頷いた。団結する男衆を、二一ナが遠巻きから面白くなさげに眺めていた。

クラプトンは熱い緑茶の紙カップを斥候ふたりに手渡し、自ら指揮車輛のドアを開いて、若者ふたりを送り出した。誰ひとりとして、指揮車輛に「タイガー」の給湯ポットが安置され、それを少佐が慣れた手つきで操作するのに驚かなかつた。

クラプトンは、車内の者にも緑茶を配つた。D戦闘中隊に配属された人員は、血中へのカテキン混入が課せられている。

湯気の立ち上る緑茶をすすりながらも、クラプトンは神経を緩ませ

ずにいた。CTRの派遣は事態を好転させるだろうが、そこから解決の糸口を拓げられるかは、別の不確定要素が絡んでくる。SASは、狂信的なテロリストの対処に通曉している。反抗期が長引く、でかい赤子のおむつ交換ではなく。

クラプトンの手の中で、空の紙カップがひしやげた。人間社会の落伍者、何の取り柄もないちんぴら風情に、大事な息子の命が脅かされている。犯行グループの顔写真を見返すと、ひとりずつなぶり殺したい欲求がふつふつと沸き立つた。

頭に上った血を下げようと、クラプトンは他の資料に関心を向けた。手近なプリンタアウトに、犯行グループが所持する武器の目録が記されていた。三八口径のリボルバー、水平二連ショットガン、折り畳みナイフ……いずれも詳細不明の安物と見られたが、その後の記述に、クラプトンは呆れて目を剥いた。

元は警察が作成した資料に、SASの追記が施されていた。ルーマニア人店員の供述から、店内には、籠城犯が持ち込んだ他にも武器が存在することが判明していた。サヴェジ日用品店は麻薬のみならず、武器密売の末端市場でもあつた。武器は会計カウンター内の金庫に、麻薬と一緒に保管されていた。ご丁寧に、数百発の弾薬まで添えて。金庫の鍵は、レジを開ければ見つかる、強大な火力が敵に渡つたと、想定せざるを得なかつた。

司法の腐敗と外国人犯罪の横行、子育て下手な親のせいでのノイローゼに陥るのを耐えつつ、クラプトンは敵戦力の再確認に集中した。「CZ-75が三つ、九ミリのグロックがひとつ、VZ-61サブマシンガンに一二ゲージのモスバーグと……おい、手榴弾まであるのか？」

情報部員のひとりが即応した。「ロシア製の発煙弾と音響闪光弾です。殺傷能力はありません」

「殺虫剤を吸つても、同じことが言えるか？ それに、埃に引火したら大火事になる。炎に犯罪者と人質の区別はない」

特殊音響闪光弾《フラッシュユバン》は、屋内の敵を強烈な炸裂音と光で無力化する、SAS発祥の戦術兵器である。専門知識の下で使え

ば優れた効果を発揮するが、リンやマグネシウムの燃焼させる仕様上、火災の危険を伴う。事実、一九八〇年に駐英イラン大使館を占拠したテロリストの制圧に際して、SAS隊員の投じた一発がカーテンを黒焦げにしている。

目録の最後の項に差し掛かると、クラプトンは首をかしげた。

「シグ・ザウアー」P229——九ミリ口径、弾頭はホローポイント。強化スライドに換装、トリチウム発光の照準器を搭載。艶消しの黒。銃身下部に「シユアファイア」X300ウェポンライトを装備。

前述の武器よりずっと具体的な仕様が、無機質なタイプ文字ではなく、肉筆で記されていた。「製造番号等の刻印なし」の一節で、その武器目録は締められていた。

「こいつはどういうことだ」クラプトンは全力の不信感を込めて、二ノ子の眼前に武器目録を突きつけた。

「どう、とは？」

「しらばつくれるな。これはお前の字だ」

クラプトンが目録の肉筆部分を示すと、二ノ子は涼しい顔で肩をすくめた。「内容の通りです。何が不明な点でも？」

クラプトンが今にも鼻から蒸気を噴きそうな形相で迫ると、二ノ子は降参して、やれやれと両手を上げた。

「映像にはありませんが、間違いありません」

「詳しく話せ」

反省の色もなく、二ノ子はおどけて肩をすくめた。

「そのP229は英陸軍で員数外となり、諸事情から裏市場に回つたものです。

現在の所有者は、とある家の次男坊を慕う女の子で、その子は思い人と嗜好を共有したがる性質があります。たとえそれが、銃のブランドの好みとしても。ああ、なんといじらしい！」

大仰な手振りをまじえた独白は、クラプトンの感涙を誘うに至らなかつた。

「その話が事実だとして、いつたいどんな影響があるんだ？」

待つっていたとばかりに、二ノ子は手を打ち合わせた。「つい先日、可

愛い娘さんから、使用人の心得を学びたいとの申し出を受けましてね。あんまり熱心にお願いされたので、わたくしも最後まで断り切れず、手解きを引き受けてしまいました。

初めは不安でしたが、とても飲み込みが早い子で、何でもこなせる優秀な素質を持っていました。こちらの指示を素直に聞いてくれるので、わたくしもつい魔が差して、ちょっとぴり”いけない”ご奉仕なども——」

「もういい。聞きたくない」

クラプトンの肌が、みるみる青ざめていった。それまでの健脚が嘘のように、おぼつかない足取りでスツールにへたり込んだ。「なんてこつた」威厳のかけらもない、ひどくうわずった声が零れた。

五里霧中で頭を抱えるクラプトンに、別方向から追い討ちが掛けられた。「第三カメラに動きがあります」情報部員の報告から、不穏な気配を感じ取った。

クラプトンは重い腰に鞭を打つて、店内の監視映像を映すモニターに駆け寄つた。粗い映像を情報部員が拡大すると、人質のひとり——ブリジットが、隣に座る人質の背後に首を押し込んで、もぞもぞと蠢いていた。

「おいおい、変な真似はよしてくれ……」

クラプトンが画面越しに祈つた三十秒後、ブリジットがのそりと上半身を起こした。

それからすぐ、隣の人質がブリジットの腰の辺りに手を伸ばし、給仕服の内側をまさぐり始めた。

いつたい何が起きているのか、映像を見守る男たちは、しばらく理解できずにいた。それでも、互いに顔を見合わせているうちに、揃つて同じ考えに行き着いた。

束の間の沈黙を、クラプトンが破つた。「負傷者の対応に備えろ。じきに必要になる」

想定外の事象に、指揮車輦は蜂の巣を突いた騒ぎとなつた。如何なる仕掛けを用いたか、ブリジットは人質の縄を解いた。その意図は知れども、静観してもいられない。

海峡の向こうで燃え盛るパリを、ただひとり、二ーナだけが誇らしげに見つめていた。

奴隸蛮行【一一一】

【11】

不安、焦燥、混乱……。次々と浮かんでくる感情に目を瞑り、リタはなすべきことに集中しようとした。ブリジットに促されるまま、彼女のスカートに手を突つ込み、指先の感覚に意識を研ぎ澄ました。

冷静を装つてはいたが、無心ではいられなかつた。ここ数分間のブリジットに起因する出来事で、リタの心は右へ左へすさまじいボディブローを受け続けた。

ブリジットが持ち掛けた計画は、気乗りのするものではなかつた。立ち塞がる悪人を打ち倒し、さつさと家に帰る。ただそれだけ。そんな詳細の明かされぬ企みに軽率に加担したのは、単なる自棄か、それとも旧友に詐欺の才覚があつたのか。前者であつてほしいと祈つたが、手首に残る生温かさが全てを物語つていた。

ブリジットは変わつた。いや、変えられてしまつたのかも知れない。リタの内で、今のブリジットを受け入れるべきか、無意味な葛藤が繰り広げられていた。少なくとも彼女にとつては、それだけ衝撃的な体験があつた。

リタの腕をいましめる縄を解くのに、ブリジットは口、特に舌を使つていた。ぬめりと潤つた肉が縦横無尽に皮膚をのたうつ感覚に、リタは未だに鳥肌が治まらなかつた。友人が女として熟した現実を肌で知り、えも言われぬ悔しさを抱いた。そんな場合ではないと頭で理解していくも、指先で触れる艶めかしい柔肌が妙な気持ちを引き起こせるので、ブリジットは魔性の落とし子なのだと、リタは自らを納得させた。

その証拠に、誘拐犯に見つかるかも分からぬ恐怖の最中でさえ、ガーターベルトのすべすべした生地と、もつと滑らかなふとももを愉しもうとする自分がいる異常性を、リタはどこかで認めつつあつた。氣を緩めて「綺麗だね」などと口走れば、即座に舌を噛み切ろうと、リタは自戒した。

あまりに場違いな物思いから一転、突如として指先に訪れた固く冷

たい感触に、リタは縮み上がった。

「これなの？」

すぐ目の前で、長いまつげが揺れている。「もう少し下だね」そう言つたブリジット頬に、麻縄の纖維が張り付いているのが見えた。直視してはいけない気がして、リタは作業に戻つた。

ごわごわした生地を数センチなぞると、指先が再び固いものに触れた。リタが目配せすると、ブリジットは小さく頷いた。目的の物体は見つけた。あとは、スカートから引き出せばいい。

物体が収まる収納スペースは、ベルクロで蓋をされていた。大きな音を立てないよう、ゆっくりと剥がすと、平坦な金属の感触があつた。掌に収まるそれをつまみ上げ、入る時と同じく、そろりと手首をスカートから引き抜いた。

外気に触れた途端に、リタの手が震えだした。想像していた通りの物体が、自分の左手にあつた。ほのかに艶のある、黒い折り畳みナイフ。慣れない手つきで刃を振り出すと、小気味よい作動音でロツクが掛かつた。

ブリジットは無言で、リタに背を向けた。引き返せないところに至つたのを悟り、言い逃れできない状況から脱する一心で、手の震えを押さえ込んだ。力を込める必要はなかつた。銳利に磨かれた切つ先は、パスタのように麻縄を断ち切つた。最後の一一本がぶつりと裂けるのと時を同じく、リタの緊張も終わりを告げた。

ぐつたりとしな垂れかかるリタを、ブリジットはそつと肩で受け止めた。

「よく頑張つたね、えらいえらい」

おおっぴらに頭を撫でる訳にもいかないので、鼻先で頭頂部に触れて労いの意思を表した。親友の震える手から〈ゼロ・トランス〉のナイフを受け取り、背後で刃を置んだ。切断された縄は、スカートのポケットに隠した。

潤んだ瞳で、リタは尋ねた。「次はどうするの？」ブリジットがナイフを振りかざして敵のど真ん中に突つ込むのではないかと、気が気がでなかつた。

「お掃除の準備をする。あまり時間は掛けられないけど」

リタの怖れに反して、ブリジットは冷静そのものだつた。ナイフを右手の袖口に滑り込ませると、付属のクリップでカフスに留めた。様々な角度から袖を観察して、武器の輪郭が見えないように調節した。

右方でドアが開く音が聞こえ、大股の足音が続いた。息を呑むリタに、ブリジットは密接した。エプロンのポケットから、リタの手首を縛っていた麻縄を取り出し、今度は自分の手首に巻き付けた。染み込んだ唾液が、すっかり冷えきていた。

「あいつが戻ってきたよ」

怯えきつたりタに、ブリジットは何度も「大丈夫だよ」と囁いた。

ふたりの視線の先——十メートル先の会計カウンターに、奴隸誘拐の主犯格と思しき男がやつてきた。右手の先で、店内で見つけた黒いショットガンが揺れている。トイレから戻った男——ジム・カヴィルはスツールにどつかと尻を落とすと、カウンターに両脚とショットガンを投げ出した。

凶悪な行いを目の当たりに、ブリジットの中で新たな怒りの火種が爆発した。——「モスバーグ」になんて真似を！ 実績あるショットガンへの無礼に、あわや立ち上がりそうになつたが、射線上のリタに危険が及ぶので、今のところは矛を収めた。

カヴィルは弾かれたように脚を床に下ろすと、苛立ちを隠そともせず、黒い巻き毛の生えた頭を搔きむしり始めた。ブリジットは、横目で動向の観察を続けた。男はしばらく汚い声で呻くと、カウンターの内に屈んで姿を消した。数秒後に立ち上がったカヴィルの指先に、小さなビニールの包みがつままれていた。中身の透明な結晶が、螢光灯の光を受けて輝いていた。

息を荒げるカヴィルの口角が、にんまりと歪む。包みをカウンターに置くと、ショットガンを取り上げ、銃床で包みを押し潰した。それから銃床を軽く浮かせて、包み目掛けて数回叩きつけた。大した運動ではなかつたが、大粒の汗が顎から滴つていた。

カヴィルは微細運動のままならない手で包みを破り、碎いた結晶を

カウンターに広げた。粉末を指先で三つの筋に分けると、カウンターに鼻をこすりつけるようにして、粉末を吸い込み始めた。

知性を欠いた異様な光景に肝を冷やしたリタが、ブリジットの手を掴んだ。

「あれは何なの？」

リタの手が外から見えないか注意しながら、ブリジットは答えた。「スニッフ……粉末状の薬物を、鼻孔から摂取してるの。あの感じだと、アッパー系だろうね」

「アッパー系って？」門外の言語を淡々と述べられ、リタは得体の知れない疎外感を抱き始めていた。

「強い興奮作用がある薬物の総称だよ」

「つまり……ハイになるつてこと？」

「ヘロインと違つてね」

これ以上の薬物談義は毒になると判断して、リタは話題の切り口を変えた。

「ところで、ブリジットはどうしてこんなくずのたまり場に来たの？」
ごもつともな追求に、しばらく振りに少女然とした困り顔が見られたので、リタは少しほつとした。

「ちょっと、やんごとなき事情があつてね」整つた太めの眉が、いたく恥ずかしげに下がる。主人に褒められたい一心で酒の探訪に労した使用人、果たして誰が責められようか。

「本当に？ 変なクスリとかやつてない？」

かつての庇護者に、ブリジットは力強く頷いた。「主人の資産を、犯罪の肥やしになど致しませんとも」

視界の外から複数の足音が聞こえたので、ブリジットとリタは人質としてあるべき姿勢を取つた。足音はすぐに遠ざかり、会計カウンターへと近づいていった。ボスの鼻息を聞きつけて、誘拐犯ふたりがドラッグをせびりに来たらしい。三人の口から汚い言葉が飛び交い、すぐに口論へと転じた。人質への警戒が疎かになつた隙に、ブリジットは新たな敵をじつくり見据えて、情報をかき集めた。

ひとり——バニー・スプリングは軽薄そうにきび面で、もうひ

とり——バイロン・ラスキンは線が細く、あどけなさの残る容貌だった。ブリジットの予想通り、両者共に店の占拠前より装備が充実していた。スプリングは冷戦期を彩ったチエコ製のサブマシンガンを握り、パンツのベルトにもチエコ製の拳銃を挟んでいた。ラスキンの手にも、同じ拳銃が大事そうに収まっていた。

口論の末に、スプリングは薬物の包みをカヴィルから受け取った。ラスキンは何も貰えず、カヴィルに胸をどつかれると、足取りも重く元の配置へ戻つていった。

あのふたりは虚弱すぎる。

自分の計画に不適格と判断したふたりから視線を外し、ブリジットは真反対へと捜査の目を投げた。店舗正面を塞ぐバリケードの近くで、誘拐犯のひとりが右往左往していた。

やや肥満気味の男——ジエイソン・マツキニーの手には、オーストリアが誇るポリマーフレーム拳銃が握られていた。完璧なメイドの絶対条件に、類い稀な視力は含まれていない。だが、”完璧で危険なメイド”が備えて困るものでもない。ブリジットは十メートル離れた銃の刻印を読み取り、それが四〇口径仕様のグロック22だと識別した。

マツキニーが他に銃を持つていないと判断すると、続けてその身振りに着目した。終始落ち着かない様子で、バリケードの隙間から外を窺っている。ブリジットが知る限り、誘拐犯で一度も薬物に手を出していなければ、マツキニーだけだった。奴隸の監視に手は抜かないものの、機会があれば独りで逃げ出す気がした。寛大な目で見れば、彼もまた誘拐の被害者なのかもしれない。

身体は丈夫そうだけど、こちらの誘いに乗ることは思えない。

ブリジットは唇を噛み、会計カウンター奥の壁に掛かるクオーツ時計を盗み見た。一四一〇時。その時計が五分遅れているのは、入店時に確認していた。五分早いのと遅いのでは、まるで結果が違つてくる。諸々が緩いイタリア人とて、パスタの茹で時間に妥協はしない。

そもそも、のんびりもしていられないかな。

ブリジットは目蓋を閉じてひと息つき、乾麺の棚に背を預けた。全

身の緊張を解こうとして、曲げた膝を伸ばした。滞った血流の改善に身じろぎし、腹腔の筋肉をフルに使つて深呼吸を繰り返す。横隔膜の反復運動が血中の二酸化炭素を排出して、肺の空気が一新される。動脈を無垢な酸素が走り抜け、脳の性能限界が引き上げられる。

「ブリジット、大丈夫?」

穏やかならぬ声音に、ブリジットはそつと目蓋を開いた。数秒前と比べて、鮮明な視界が得られた気がした。

「考えていたより難しいけど、やれると思う」

「そうじやなくて、あんたが心配つて話なんだけど」

「どうして?」

きよとんと頭上に疑問符を浮かべるブリジットに、リタはにわかに頭痛を覚えた。

「あのね、ブリジット。あの五人を倒す理由が、ひよつとするとあたしのためだとしたら、無茶はしないで。ここから出るのに時間は掛かるだろうけど、この街は特殊部隊の拠点に違いないし、最悪の事態にはならないと思わない?」

誘拐犯のやつらも薬物に夢中で、あたしらを奴隸商に売り渡す目的を忘れてる。ブタ箱行きの運命を受け入れて、最後の晚餐を決めてるようには見えない?」

たどたどしい説得を、ブリジットは目蓋を下ろして聞いていた。返事がなかつたので、リタは語を継いだ。

「それにさ、ほら……相手が犯罪者でも、奴隸が危害を加えるのはまずくない? 穏便に事件の解決を待つべきだよ」

ブリジット唇が、微笑みを浮かべた。「そうだね」

「じゃあ——」

「だけどね、リタ」

それまで一度も見せなかつた爽やかな笑顔に、リタは言葉を失つた。「私、これでもすつごく怒つてるんだ」

目蓋の合間から覗く、深い蒼の瞳。その奥底で揺らめく激情に、リタは気圧された。

「大切な友達を攫つて、自分の住む街を穢して、好き勝手やつてくれ

ちやつてさ。その上、旦那様のおゆはんも用意できてないの。だから

——

ブリジットは大きく目を見開き、会計カウンターでウオトカをラップ飲みするカヴィルを見据えた。

「むかついてるんだよね」

そこに、リタの知るブリジットはいなかつた。弱虫で物腰柔らかく、鼻歌交じりに家事を片付ける少女の裏の姿を間近に、リタは腰を抜かした。

目尻に涙を溜めたりタが何か言おうとするのを、ブリジットは「しーつ」と指を立てて制した。いたずらっぽい微笑みに、先の狂気は感じられなかつた。それが余計に恐ろしかつた。

「来た」

ブリジットの視線の先で、巨漢の誘拐犯——ルーカス・ダウダルがいた。店の占拠からずつと、ダウダルはガムを噛みながら棚の合間を練り歩き、人質を脅して回つていた。

「こんなことはやめよう」そう言いたくとも、リタの喉は嗚咽めいた呼氣しか発せずにいた。

「あの、すみません」

ブリジットのか細い声に、五メートル離れたダウダルの足が止まる。巨大なスニーカーのつま先が、真っ直ぐブリジットへ向けられる。充血した眼球がぎょろりと揺れて、二体の奴隸に焦点を定めた。ガムを噛む度に、血色の悪い唇を割つて、ヤニで黄ばんだ歯が覗き見えた。

粘ついた視線で視姦してから、ダウダルはがに股で奴隸との距離を詰めた。迫り来る巨漢に、たまらずリタの目尻が引きつった。

「ここから先は、私に任せて」

旧友に氣休めのひとつも言えない己を、リタは恨んだ。何が旧友をこうも変えてしまったのか、それはリタの理解の範疇を超えていた。今はただ、レディ・レイヴとかいうままごとの延長がブリジットを悪い子にしてしまつたと、自責に囚われるばかりであつた。

ダウダルはブリジットから十センチと離れていないところで足を

止めると、腰を折つて氣味の悪い笑みを満面に尋ねた。「どうした、お嬢ちゃん？」逆三角形の上半身から巨峰めいた影が延び、ブリジットとリタを呑み込んだ。

「その、ずっとお手洗いに行きたくて……」

ブリジットの声帯は、リタと出逢う前に使っていた声音を再現していた。性悪の嗜虐心、ひいては下卑た性欲を煽る音だが、それこそが狙いだつた。

ダウダルはほんの少し考え込む芝居を打つてから、ブリジットの肩を掴んで立させた。「来い」

野太い腕に牽かれて、ブリジットは会計カウンター、そしてその右にあるトイレへと連れ去られていった。ほんの一瞬、肩越しに振り返った顔に、恐れはなかつた。最後まで親指を立てて見せた後ろ手が見えなくなると、リタは声なく泣き崩れた。

奴隸蛮行【一一一】

監視カメラの映像に、リチャード・クラプトンの演算装置はぺんぺん草一本と残らぬほど破壊され尽くしていた。指揮車輌内のひとりひとりに目で訴え、ブリジットに何が起きたか意見を求めた。暴漢に便所へ連れられた少女が何をされるか。不文律にも等しい展開の口外を、情報部員らは躊躇つた。

いたたまれない沈黙を、最悪の人物が終わらせた。「まあ、ねちよねちよにされるでしょうね」

二ーナの心ない発言に、クラプトンがとうとうマグマを噴き上げた。厚い脂肪にカムフラージュされた強靭な筋肉をばねに指揮機を飛び越し、二ーナの両の肩に掴みかかつた。

「息子の嫁が、放射性廃棄物にも劣る性病野郎に犯されるのを……おい、この、お前……ふざけるな！」

言語野が少年期にまで退行した指揮官を、二ーナが「どうどう」と鎮めに掛かる。かえつて火に油を注ぐ愚行だが、どういう理屈かクラプトンの血圧は微々と下がつていった。

肩で息をするクラプトンに、二ーナは軽妙に語りかけた。「ご覧になつた通り、あの子は自分から容疑者に接触しました。何らかの意図あつての行動と想定するべきです」

「なるほど、素晴らしい。便所をリングにでかい男とタイマン張つて、あえなくKO負けつてか。よく出来たシナリオだな！」

二ーナが唇を尖らせて応戦した。「失礼ながら、毎夜組み敷かれているのは、あなたのはずですが」

クラプトンは床に膝を突き、咆哮してスツールの座面に突つ伏し

た。息子夫婦の窮地を開拓する建設的な談義を、他ならぬ自分の妻がぶつ壊すので、出口のない迷路に放り込まれた心地を味わつていた。誰の目からも不憫であつたが、ねじくれた痴話喧嘩に業務を阻害されている情報部員こそ最たる被害者である点を忘れてはならない。

ややあつて、悶絶から立ち直つたクラプトンが頭をもたげた。座面に接していた額が赤く、よく見ると血が少し滲んでいた。

「CTRは、まだ位置に就かないのか？」一縷の望みに掛けて、情報部員の吉報を待つた。

「たつた今、目標に向かつたところです」

「ちくしょう！」

スツールに拳を叩きつける目頭に、いつしか小さなきらめきが生じていた。六十台を控えた哀れな少佐は拳を震わせ、無為の極みに達した夫婦喧嘩に幕を下ろした。

「こうなつたのは二ーナ、お前があの子にしようもない宴会芸を吹き込んだのが原因だ。てめえで蒔いた種を刈つてこい。俺の家族を脅かすくそ共を殺してこい！」

「えー」と二ーナが悪態をつくのに先んじて、クラプトンは指揮車輛のドアを日いつぱい開け放ち、目標の店舗を指差した。

「さつさと行け！」

クラプトンの鬼気迫る形相に二ーナは苦笑し、懷から異様にすつきりした外観の拳銃を抜くと、いくらか弱まりつつある雨風に身を投じた。戯れの過ぎる腹心が地面を踏むのを待たず、クラプトンはドアを力任せに閉めた。それから僅かに残る気力で、ヘッドセットのマイクに弱気な声を吹き込んだ。

「全部署へ通達。うちの”秘書”が目標へ向かつた。例によつて、いないものと思え」

各方面からの応答がなされると、クラプトンは肩を落とし、重々しいため息をついた。スツールに戻ろうとして振り返ると、情報部員四人が自分に視線を向けて畠然としていたので、業務に戻るよう手振りで促した。

情報部員の関心はその実、クラプトン夫妻の痴態に呆れていたのではなく、二ーナの玩具めいた銃へ寄せられていた。二二口径のルガーMk.Ⅲは、正規軍の特殊部隊が携行する類の武器ではない。滑らかな円筒形の銃身に減音器《サプレッサー》が内蔵されたこの銃の用途は、地球上にひとつしかない。すなわち、至近距離からの暗殺である。二ーナ・クラプトンがいつからSASにいて、何を主要な業務としているのか。そもそも英軍籍があるのか。どうとち狂えば、あんな

ちやらんぽらんに懸想するのか。全てを知る者はリチャード・クラップトンただひとりである。誰もこのロシア女の経歴を知らないので、「リチャードを左遷すると、ニーナの報復を受ける」「ロシアの諜報機関から亡命してきた工作員」「男の精気を糧に数世紀を渡り歩く経国の怪物」といった与太話も、ヘリフォードの酒の肴となつて久しかつた。

たかが尾ひれのついた噂だつた。だが、童話や聖書が道徳観を根付かせるように、子供じみた警句を軽んずれば災いを被る。この日を境に、情報部員四人はニーナ・クラップトンという女を話題に出すことはなくなつた。

奴隸蛮行【12】

【12】

誘拐犯のひとり、ダウダルにショットガンで背中を小突かれながら、ブリジットは店のトイレへの道程を辿った。

道すがらには、ふたつの不確定要素が待ち構えていた。手首に巻き付けた麻縄が何かの拍子に床へ落ちれば、その時点で計画はご破算となる。誘拐犯が協力者の存在に思い至れば、リタに危害が及ぶかもしれない。

また、性根の腐つた誘拐犯が足首の拘束をそのままに移動を命じたので、ブリジットはつま先で跳ねての前進を強いられた。何度も床を蹴る内に、次こそ縄が解けるのではと肝を冷やした。揺れを抑えてゆっくり移動しようものなら、後ろからどつかれるので、一心不乱に無様な跳躍に打ち込んだ。サメのひしめく海を真下に板を歩かされる心地を、ブリジットは来たる反撃の燃料に加えた。

十メートルの直線を踏破したところで、第一の閨門にぶち当たった。誘拐犯のボスを気取るカヴィルが会計カウンターを飛び出し、奴隸をトイレに連れ込もうとするダウダルに詰め寄った。籠城から二時間近く経過してなお、カヴィルは奴隸の拉致を諦めていなかつた。既に警察の調べがついた奴隸を売る宛てはさておき、商品の味見を看過するつもりはなかつた。

金切り声を発するカヴィルに、ダウダルは涼しい顔で肩をすくめた。水平二連のショットガンを床に放ると、挑発的な笑みを浮かべて、カヴィルの真正面に立つた。

二メートル近い巨躯に見下ろされたカヴィルが、ショットガンを掲げて威勢を張ろうとした。「何だよ、文句あんのか」誰の目からも、及び腰になつてているのは明らかだつた。

「おい、うすのろ。聞いてんのか」

不意に、ダウダルがにつこりと笑つた。

実力に差がありすぎた。ダウダルは血管の浮いた両腕でカヴィルの髪と左肩を鷙掴み、自分の方へ思い切り引き寄せた。骨と肉が衝突

する、いやな音が響く。こめかみに頭突きを叩き込まれたカヴィルは、受け身の用意もなしに、背中から床に崩れ落ちた。

頭を庇つて呻くカヴィルの頭上に、大男の影が落ちる。「（）自慢の頭脳はどうした、ボス？」噛んでいたガムをカヴィルの頬に吐き捨てると、ダウダルは床のショットガンを拾い、街で一番不潔なホテルへの最終工程を奴隸に進ませた。

遂にトイレのドアが目前に迫ると、後ろからダウダルの腕が伸びてきて、ノブを回した。外開きのドアが開くと同時に中へ押し込まれたので、転ばないよう前にトイレの中程までホッピング運動しなければならなかつた。汚い床に口づけるのも屈辱だが、袖口に隠したナイフを見つけられる訳にはいかない。

背後で、木製のドアが閉じた。

「ちよつと待つててな」

トイレに入るなり、首筋を掴まれて便器に跪かされるのを覚悟していたので、その言葉はかなり意外だつた。

ダウダルはショットガンを洗面台に置くと、薄気味悪いラップを口ずさみ、新しいとガムを噛み始めた。数回噛んでから、今度はコカインの粉末を口中へ流し込んだ。コカインをガムに練り込みながら両手の指を鳴らし、全身を海藻のようにくねらせた。どうやら儀式の一種で、身も心もラリパツパの旋律に浴しているらしい。

ダウダルが独りで盛り上がつてているのを幸いと、ブリジットはその場で得られる情報に神経を研ぎ澄ませた

トイレは三メートル四方の空間で、ドアを抜けて左手に洗面台、その奥の壁に沿つて、小便用の溝が掘られている。右手に個室ふたつがあり、手前側に便器があつた。奥の個室はドアが閉じていたものの、十中八九は用具入れだろうと当たりをつけた。

奥の壁は外に面しており、天井近くで小さな換気扇が回つている。その隣の採光窓は縦幅が狭く、脱出経路には使えない。元より、そのつもりもないが。

トイレに入つた瞬間から、ブリジットは目当ての設備を見つけていた。便器の直上に、天井裏へ通じるハッチがあつた。店内はどこもそ

うだが、積年の汚れで黄ばんでいる辺り、ずっと使われていないようだつた。

「お待たせ、お嬢ちゃん」

ヤク漬け精神統一を終えたダウダルが、ブリジットの両肩に手を置いた。耳のすぐ後ろから、廃墟然としたトイレが可愛く思えるほどの口臭が漂つてくる。

ダウダルはブリジットを個室に押しやつて跪かせると、蓋の開いた便座に頭を垂れさせた。顔の数十センチ先で、流れなかつた紙がふよふよ浮いている。

せめて閉めてー！

心の叫びが通じるはずもない。偽装とはいえ、ブリジットは便意を理由にダウダルを呼び止めたのだ。臭いダンスフロアで、ドラッグファーバーを見せられるためではない。

「おつといけねえ」

ろくでもないことを思いついたのだろうと、ブリジットは聴覚だけを頼りに警戒を強めた。金属のこする音が聞こえると、思いがけない感覚が足首に訪れた。

ダウダルのナイフが、ブリジットの足のいましめを切除した。

「俺様はな、自分で締まりを調節したいのよ」

あ、左様ですか。

最低発言を受けてのため息に、眼前の水面が揺らいだ。

——でも、これも僥倖。

ダウダルの手が、ジーンズのベルトに掛けられる。

この数秒間に、ダウダルはふたつの過ちを重ねていた。ブリジットの足を自由にしたのは言わずもがな、使用人の服飾事情に無関心なのが、運の尽きであった。うら若い性奴隸を毒牙に掛ける前に、そいつがコンバットブーツを履いているかを確認すべきだというのに。

するり。ダウダルの見ている前で、奴隸のいましめが解けた。

ブリジットは両腕を前に振り抜き、便座を支点に勢い足を振り上げ前転した。ジーンズを下ろそうと前屈みになつたダウダルの顎をブーツの底がひと撫でし、幾本もの硬く鋭い山々が皮膚を切り裂く。

状況に追いつけずに入るダウダル倒立姿勢で逆さまに見据えながら、ブリジットはなおも前転運動を続け、両足で奥の壁を蹴つた。

遅れてやつてきた痛みと怒りでダウダルが腕を振りかざした先にくそ奴隸の姿はなかつた。狭い個室の中で呆気に取られる間もなく、ダウダルの視界にくすんだ緑色の放物線が降りてきた。

直後、顎の下に激烈な力が加わり、ダウダルの両脚は地面から離れた。海老反りになつて四肢をばたつかせるダウダルの巨躯を、ブリジットがその背に負つていた。左手に真鍮の懐中時計、右手にはオリーブ色の紐が巻き付けられている。

ブリジットは全身の筋肉をばねにダウダルの頭上を飛び越し、着地と同時に懐中時計の紐を首に掛けていた。单なる紐ではない。内部に複数の芯をより合わせたパラシユート・コード二本が、ダウダルの頸部深くに食い込んでいた。

パラコードが掌に噛みつく痛みに耐えつつ、ブリジットは懐中時計の蓋を開いた。一四二一時を示す二本の針ではなく、最も働き者の秒針の動きを見守つた。

三……

頸動脈が閉塞すると、脳への酸素供給が滞り、結果的に窒息する。小難しいメカニズムを知らずとも、動物の本能はその重大性を憶えている。憶えているだけなので、特に助けてはくれない。

頸静脈が閉塞すると、血液の帰り道がなくなり、血液が頭に溜まり続ける。行き場のない血液で顔が赤く染まり、毛細血管が破裂する。ダウダルは猛り狂つて、窮地を脱しようともがいた。だが、一本で二五〇キログラムを支える強度のパラコードを相手に、火事場の馬鹿の勝利はあり得ない。

二……

首吊り状態から逃れようと激しく暴れるほど、血中の酸素は加速度的に消費される。襲撃者にナイフを突き立てれば助かるかもしけないが、肝心の武器は、今にも脱げそうなジーンズにあつた。

一……

薄れゆく視界の中で、ダウダルは叫んだ。声が出た気がした。

……ゼロ。

最後の酸素でヒキガエルめいた鳴き声を絞り出すと、ダウダルの全身から力が抜け落ち、意識を失った。

ブリジットは息も切れ切れに、ダウダルの身体を床に放つた。力と力のぶつかり合いを経て消耗していたが、休んではいられない。脳への酸素供給が再開すれば、足下の男はすぐに目を覚ますと分かつていた。

痛む手で懐中時計からパラコードを抜き取り、便器の脇に落ちた麻縄を使つて、自分がやられたのと同じ格好にダウダルを縛り上げた。店の汚さから期待はしていなかつたが、用具入れの中身は存外に充実していた。雑巾を適度な大きさに裁断して丸め、ダウダルの口に押し込み、ダクトテープで蓋をした。拘束に不足があつては困るので、ミイラを作る要領でダクトテープを全身に巻き付けた。

ブリジットは今いちど懐中時計を開いた。ダウダルが意識を失つてから、既に二分が経つていた。統計では、四十秒もあれば覚醒するはずだつた。

ブリジットが首絞めの標的にダウダルを選んだのは、五人の中で首の筋肉が最も発達していたからであつた。他の者では勢い余つて首が折れたり、喉が潰れたり、そもそもトイレに連れ込むに至らない可能性があつた。ゆえに頑健そうなダウダルが栄えある初の獲物に選ばれたのだが、ここに来てブリジットは計画に綻びに焦り始めた。

二一グラムが……！

首筋に指を当てて脈と魂を取ろうとしたその時、ダウダルの目蓋がゆつくりと開いた。何の感動もなかつたが、くず殺しの咎を負わずに済んだので、ブリジットは胸を撫で下ろした。

ダウダルは意識を取り戻すなり暴れたが、凄まじい量のダクトテープに押さえ込まれて、蛆虫の真似が闇の山だつた。とはいゝ、こうも元気いっぱいていらざると、計画に支障をきたす恐れがあつた。ドアノブにモップをつかえさせてはいるものの、他の誘拐犯には可能な限り長く、便所事情が続いていると思わせておきたかった。

「大人しくなさらないと、ご自分の唾液で窒息しますよ」

でかい子供は態度をなお硬化させたので、ブリジットもむつとつて強硬手段を取つた。ふりふりしながら換気扇を止め、栓をした洗面台をクレンザーで満たし、蓋を外したトイレ用洗剤にナイロンのロープを結びつけた。ロープのもう一端をダウダルの身体にテープで留め、仕上げに洗面台の縁にトイレ用洗剤を置いた。

「混ぜるな危険。外窒息と内窒息を一日に味わいたいなら、どうぞご自由に」

そこまでしてようやく人並みに静かになつたのを見届けると、ブリジットはダウダルの目と耳をテープで塞いだ。間違いがあつても困るので換気扇を再稼働させると、ふと違和感を覚えた。

異変に気付くのに、時間は掛からなかつた。トイレに入つた時に閉じていた採光窓が開け放たれていた。確認すべきかブリジットが迷つていると、外から何かが投げ込まれた。危険信号が赤々と点灯し、ブリジットは咄嗟にダウダルを盾にして床に伏せた。ところが十秒経つても何も起きないので、おずおずと身を起こし、床に落ちた物体に近づいた。

難燃性纖維のグローブひと組がそこにあつた。ほつれは見られず、新品に感じられた。警戒が不思議に変わると、外の何者かが再び物資を放り込んだ。今度はネオプレーン素材の関節保護パッドで、やはり新品だつた。最後にクライミング用のロープと顔全体を覆う防塵マスクが投げ寄越されると、小さなメモが添えられているのに気付いた。

危険を冒す者が勝利する。

調教施設にいた頃から幾度となく聞いたS A Sのモットーに、上品な色合いのキスマーケが施されていた。こんなことをする人物を、ブリジットはひとりしか知らない。

「恩に着ます、先輩」

ブリジットは棚ぼたの差し入れを身に着けると、採光窓に向けて頭を下げ、無欠の使用人の職務に戻つた。箒の柄で天井ハツチの開閉スイッチをつつくと、綿埃と一緒に粗末な鉄梯子が下りてきた。ハツチの奥は深い闇に包まれており、照明があるようには見えなかつた。

ブリジットはスカートを軽く翻すと、右脚に装備した自作のホルスターから、やつとで出番の訪れた相棒を抜いた。愛する主人とほぼお揃いの、シグ・ザウアーP229。スライドを僅かに引いて初弾が込められているのを確かめると、銃身の下に装着したライトを点けた。トイレでの出来事は、ブリジットにとつて前哨線でしかなかった。確たる足取りで鉄梯子を登り、ハツチの縁からトイレのドアを見返した。板一枚を隔てた先のろくでなし共へ向けて、親指で首を切った。

お仕置きの時間ですよ。

鉄梯子とハツチを元に戻し、ブリジットは天井裏の闇を突き込んだ。

奴隸蛮行【13】

【13】

リチャード・クラプトンは三回分の胃薬の錠剤を口へ放り込むと、ダブルのスコッチで一気に飲み下した。勤務中どころか人質救出作戦のまつただ中であつたが、指揮車輌に彼を糾弾する者はいなかつた。

ショットグラスから溢れる寸前までスコッチを注ぎ、クラプトンは重い口で切り出した。「弁明くらいは訊いてやろう。おめおめと手ぶらで戻ってきた理由を」

指揮机に肘を突くクラプトンの真正面で、ニーナはトレーナーチコートに付いた雨粒を拭つていた。

「ブリジットの操の無事は確認されました。喫緊の危険が去つた以上、私が出る幕ではないかと」

空になつたショットグラスが、指揮机に叩きつけられる。車内のどこかで、機材の山が崩れた。

「思い違いだつたら謝るが、俺はくそを皆殺しにしろと命じたはずだ」ニーナは臆した風もなく、首を横に振つた。「あいにく、遮光窓からの侵入はままなりませんでしたので。この胸が引っ掛かるので」言いながら、両手で豊かな胸を持ち上げてみせると、ほんの一瞬ではあつたが、ゆさゆさと音のする方へ、一番若手の情報部員は視線を奪われた。

「こちらをご覧いただけたら、不安も和らぐかと」

ニーナはコートのポケットからタブレット端末取り出し、少し操作してからクラプトンの方へ滑らせた。端末を手に取る気力もなく、クラプトンはしかめ面で液晶画面を睨んだ。

ほの暗い室内を、やや高いアングルから撮影した映像だつた。画面の下の方に、何やら蠢く影があつた。

「こいつは？」

クラプトンが正体不明の存在を指差すと、淡泊な解答が寄越された。「ブリジットでお楽しみを試みた男です。名はマーカス・ダウダ

ル、生年月日は——

クラプトンが、つまらない時間稼ぎに割り込む。「そのブリジットはどこだ」対面のニーナに、ずいと身を乗り出した。「どこにいる」「皆目、検討もつきませんね」ニーナはざつと左上に目線を逃がし、口笛を吹いた。

お話にならないニーナを捨て置き、クラプトンは店舗の見取図を再確認した。ものの数秒で、望んだ情報が得られた。

「天井裏か」

時を同じく、晴れ間の覗き始めた雨空の下に、サヴァエジ日用品店へ向けて全力疾走するふたつの人影があつた。横並びで走る二人組の間で、大きなダツフルバッグが揺れている。両者ともオリーブドラブのカバーオールに身を包み、メディアを嫌つて黒の目出し帽で顔を隠していた。

二人組は店の外壁に到達すると、ダツフルバッグを地面に下ろして荷解きを始めた。ひとりが複数本に分割されたポールを連結する間に、ヘルメットを被る相棒は樹脂製の縄梯子をバッグから引き出した。最上部に設けられた輪に、カラビナを介して金属の鉤を装着した。鉤は二股に分かれており、先端付近がゴムに覆われていた。これは滑り止めだけでなく、鉤が構造物に触れる際の消音材として機能する。

二メートルほどまで延ばされたポールの先に鉤を取り付け、店の屋上に届くまでさらにポールを繋ぎ足した。ポールが壁を叩いて音を立てるへまのないよう、ずっと力を込めていなければならなかつた男ふたりの共同作業の末に、鉤が屋上の縁を捉えた。強く引っ張つても外れないか検めてから、ひとりずつ縄梯子を登つた。

五メートルの登攀が、ひどく長く感じられた。不安定な足場で自身と数十キロの装備を引き上げる男ふたりを、いたずらな強風が煽つた。荒れ具合からして、建物が定期検査を受けているとは考えられず、鉤が掴むコンクリートが碎ける光景が、ふたりの脳裏をよぎつた。だが、彼らはプロフェッショナルだった。泣き言ひとつ叩かず縄梯子を登り終え、ertzに屋上を踏ませた。二人の男は困難と恐怖に打

ち勝つた。たとえ、目出し帽の下でべそをかきそうになつていても。

相棒が縄梯子を巻き上げる後ろで、S A S隊員がひとり、ダニエル・パーソンズはヘルメット下のヘッドセットに語りかけた。

「アルファ、こちら口メオ。目標に到達」

すぐに指揮車輛からの応答があつた。〈口メオ、了解〉

近辺に高い樹木はなく、建物正面を見下ろすと、さつきブリーフィングに訪れた指揮車輛が目と鼻の先にあつた。足下にいるのが装備の潤沢なテロリストなら、こんな布陣はしない。屋上から擲弾を一発撃ち込むだけで、指揮官と作戦本部が潰滅してしまう。S A Sが警察まがいを演じているのを今更ながら滑稽に思い、ダニエルは苦笑した。

縄梯子の回収を終えた相棒と合流して、ダニエルは通気ダクトを辿り、複数ある整備ハツチのひとつを前に屈んだ。一生掛かっても、末端のドラッグディイーラーの思考には至れないと理解した。ブリーフィングで確認したダクトの仕様書によれば、ハツチには親指大の南京錠が付属していた。いざ実物に会つてみると、自分の拳より大きい、廃館の門扉に掛けられるべき鉄塊がハツチを守つていた。それも、単純なピンシリンドラーではなく、ピッキングが困難なデインブルシリンドラー錠だつた。ダニエルは潔く、自らの未熟を認めた。ハツチの整備状況も含めて、考えが甘かつた。

「……ヒンジと留め金、どつちにする」

ダニエルの傍らのロメオ・ツーこと、パーセルはボルトカッターの準備を済ませていた。

「留め金だな」

他に冗談でも言おうか考えたが、目の前のそれを超えるユーモアはなかつた。ボルトカッターの刃がハツチの留め金にあてがわれた瞬間、赤錆にまみれた掛け金が根元からもげた。砦のような錠が屋上を叩き、虚しげな金属音で鳴いた。

売人は力ネの使いどころを誤っていた。整備ハツチはダニエルが生まれるずっと前の代物で、一面が錆に覆われていた。疲労と腐食も進みが激しく、板の形を保つてしているのが奇跡に等しかつた。

ハツチを引き剥がしたロメオチームを、数十年分の埃が堆積した通気ダクトが出迎えた。人ひとりが余裕で這つていけるはずだつたダクトは、下半分が各種の埃とゴミで埋め尽くされていた。仕様書があてにならないと思い知らされた今や、ダクトが天井裏に通じている保証もなかつた。

「ここを通るのか？」病原菌の温床に臆したパーセルが、相棒に意見を求めた。

「いや、その必要はない」

ダニエルはその場にバックパック下ろし、軍用ラップトップとヘペリカンの小型コンテナを取り出した。コンテナを開くと、小さな機械が緩衝材に包まれていた。トンボとクマンバチを合体させた見てくれのそれを、ダニエルはパーセルの手に乗せた。

「偵察ドローン？」

「ビンゴ、それも自作のな。今回の件で試用許可が出たんだ」

ラップトップに専用の操縦ソフトを立ち上げながら、ダニエルの語りは続く。「カメラは日本製だから、画質は期待していいぞ。第二世代だけど、暗視装置も搭載してる。静音性も折り紙付きさ。昼寝してる彼女の真上を何度も飛ばしたからな。コントローラーは——」

肺を絞つたようなため息が、ダニエルの独壇場に水を差した。

ダニエルは真っ先にパーセルを疑つたが、音はすぐ耳元で発せられていた。

〈アルファより全部署へ通達する〉

「中隊長の声だ」

数秒前まで白熱していたダニエルが頷く。

〈すまない、先に謝つておく。作戦目標に変更があつた〉

指揮官の煮え切らない聲音に、ロメオチームは互いに顔を見合せた。

「帰投命令か？」

「まさか」

ダニエルはクラプトンの次男坊の事情を知つてるので、その父親が息子の恋人を見捨てるはずはないと考えた。

やや間を置いて、クラプトンの命令が下された。

〈現時点より、本作戦は当初からの人質の救出、ならびに敵性人物の排除に加えて——〉

帰投命令ではないと知つて、ダニエルは安堵しかけた。

〈——発狂したメイドの捕獲を最大の目標とする〉

中隊長の発言に、通信網の至るところから疑問の声が上がつた。クラプトンはそれら全てに聞く耳を持たず、別の指示を送つた。

〈ロメオ、CTRは中止だ。早急に店舗へ突入し、天井裏にいるメイドを連れ戻してくれ〉

前触れなく自分に飛んできた剛速球に、ダニエルはたじろいだ。その次にはボウリングの球が控えていた。

〈捕獲対象は拳銃とナイフで武装している。だが、いいか、絶対に傷つけるな！〉

中隊長の泡を食つた言動の原因に思い当たり、ダニエルはマイクに唾を飛ばした。

「待つて下さい。捕獲対象はその……”あの子”なんですか？」

クラプトンの返事は簡潔だったが、それゆえに明快だった。〈頼んだぞ！〉

通信が一方的に切られ、耳元に静寂が戻ってきた。

日の目を失つた機材たちを悄然と見下ろすダニエルに、パーセルが再び尋ねた。

「——を通るのか？」

奴隸蟹行【14】

【14】

一步、また一步と、ライトの光芒を頼りに、ブリジットは腰を落として天井裏を進んでいた。分厚く積もった埃は、毛足の長い絨毯よろしくブーツを包み込んだ。高級絨毯と違い、足を浮かせる度に胞子めいた綿が舞つた。実際に、胞子も舞つているのだろう。防塵マスクを支給してくれた師に、ブリジットは改めて感謝した。無策で進んでいたら、得体の知れない菌類の苗床にされていた。

視界を常に埃が舞うせいで、乱反射した強い光が網膜にダメージを与えていた。ライトを消して手探り進む考えは生理的に受け入れられず、そこかしこで飛び出している釘を思えば、眼精疲労もやむなしと耐え忍んだ。破傷風にでも罹れば、それこそ主人の世話が出来なくなる。本物のダイヤモンドダストはちつとも幻想的ではなく、目と気管と心に厳しかつた。

一生分の埃を踏みしめた先に、ブリジットの捜し物が見つかつた。歩測から、店舗の中央辺りにいると分かつていて。いびつな形に積もつた埃をブーツのつま先で払うと、足下からほのかな光が差した。売り場に繋がるハツチの発掘に、ブリジットは何度もキックしなければならなかつた。

この下にリタがいる。

ハツチには、天井裏へ登るのに使つたのと同様の鉄梯子が備え付けられていた。先程のものより老朽化が顕著で、使用するには危険が伴うだろうと、ブリジットは判断した。その予想通り、押したり引いたりして梯子の除去を試みていると、梯子を固定していたボルトがへし折れた。結果的に梯子をハツチから外せたものの、もし使つていたらと思うと総毛立つた。

梯子を壊し……壊れたので、別の昇降手段が必要だつた。持つべきものは頼れる先達で、ちゃんと後輩の面倒を見てくれていた。ブリジットは周囲の柱を見て回り、シロアリの形跡がないか注意を払つた。どれも良の評価に至らなかつたが、可とする一本にクライミング

ロープを筋《もや》つた。ロープを幾度か引つ張つて強度を確かめ、次の1回で柱が折れそうな予感がして、程々でやめておいた。

ロープの端を手元に、ブリジットはハツチのそばに屈んだ。自分の中のスイッチを入れようと深呼吸を試み、すぐに考え直した。防塵マスク越しとはいえ、こんな場所で停滞している気体に、感覚が研ぎ澄まされるものか。

精神統一は叶わず、手には首締めの時の痛みが残っている。外部から的情報支援はなく、手持ちの火力も乏しい。万全の態勢ではなかつたが、そこに甘んじれば使用人の矜持に反する。クラプトンの一使用人として、それこそ家名に泥を塗る行いである。如何なる状況においても常に持てる技倅を発揮してこそ、完全無欠のメイドというものがだ。

ハツチの開閉レバーの位置を記憶すると、ブリジットはライトを消して、シグをホルスターに収めた。光が失せた途端に、腐臭にまみれた闇が舞い戻ってきた。

……よし。

網膜に残る像に従つてレバーを引き、ハツチのロックを解除する。ゆつくりと、間違つても手を離したりしないよう、正方形の突入口を開いていく。暗闇に慣れ始めていた眼球を、蛍光灯の光が至近距離で焼いた。

ハツチが垂直になつたところで手を離し、腐つた下界を覗き見た。女の勘か、はたまた埃が落ちてきたのか、天井の動きにリタは気付いていた。ブリジットが目配せすると、敵が上方に注意を向けないよう俯いた。

リタの他にも気取つた者がいないか見回すと、他の人質は泣き疲れて眠るか、まだ泣いているか、薬物が切れて落ち着きを失つていた。さて、と……

ブリジットがロープを投げ落とそうとしたその時、獰猛な叫びが店内に響き渡つた。店内の注意が店の一角、トイレへと向けられる。まさかというブリジットの懸念に応えて、トイレのドアが跳ね開けられた。火事場に置かれた馬鹿が、本当に馬鹿力に目覚めてしまつ

た。トイレでミイラにしてやつたダウダルが、五体満足で復活を遂げてそこにいた。

赤熱する体中から湯気が立ち上り、両腕に走る痛々しい生傷から血が滴っている。パラコードを人力で引きちぎる生体兵器に、ブリジットは一種の畏敬を抱き始めた。それが良くなかった。

今のダウダルには、獣の勘が備わっていた。自分に向けられた視線を探知するくらい訳はない。天井から不自然に垂れる板、その真上からこちらを見下ろしている仇敵を認めるに、第二ラウンドの開始に砲えた。残念ながら、相手方に再戦の意思はなかつた。

ブリジットは売り場の什器目掛けてロープを投げ落とし、エプロンの下に左手を潜らせた。滑りの良い絹布を介してロープを掴み、階下に身を躍らせる。ロープ降下の最中、ダウダルがよだれを撒き散らして近づいてくるのが見えた。

もう、言つたじやないですか——

下からの風圧にスカートがはためく。一瞬だけ見えたホルスターに、銃の影はなく、既にブリジットの右手の中で照準を定めていた。
——ここからはお仕置きの時間だつて。

本人の口から言つてはいないのだが、どうあれ熱いお仕置きがブリジットの右手から放たれた。撃鉄が落ちると同時に雷管から火花が散り、ヒトの知覚を超えた速度の燃焼が金属塊を超音速で飛翔させた。

下半身に受けた衝撃を、ダウダルは構わずにはいた。そうしていられたのは、きつかり一秒間だけだつた。窒息した時でさえ味わわなかつた未曾有の苦痛に、ダウダルはその場で前のめりに倒れ、什器に激突した。大量の商品が降り注ぐ先で、ダウダルの悲痛な叫びが木霊する。

銅で被甲された鉛弾は銃身から飛び出した後、あやまたずダウダルの陰嚢、そして睾丸を吹き飛ばしていた。氣絶しないだけ、大したダメである。もつとも、痛みで気絶さえ許されないのもしれないが。

什器に足が着くと同時にブリジットはロープを手放し、その場に折り敷いて一発を放つた。会計カウンター奥の消化器に穴が空き、白煙

が噴き出した。

床を跳ねる空薬莢を見ても、リタは現実味が持てなかつた。あのお淑やかなブリジットが、すぐやばいやつになつてる。信じたくはなかつたが、頭上からの声がリタを叩き起こした。「伏せて！」かつて他人者を言い負かしてきた自分と同じ聲音に、リタは従つた。冷たい床に鼻を押しつけながら、親友の無事をひたに祈つた。

でも、本当にこれでいいの？

会計カウンターの中では、消火剤をまともに吸つたカヴィルがむせていた。短絡的な指示を同胞にがなつたが、聞き取れたものではなかつた。

ブリジットはつま先を支点に方向転換し、出入口脇の消火器も撃ち抜いた。一本目の破裂で消火器の危険性に気付いたのか、マツキニーはその場から離れていた。

消火器二本分の白煙が、店内の南北に厚い煙幕を展開していた。煙幕が敵の利に働く前に片をつけるべく、ブリジットはもうちよつとで床に届かなかつたロープを滑り降りた。方々から上がる悲鳴が、ブリジットが発する音をかき消してくれた。

トイレの近くでは、スプリングが天井へ向けて闇雲にサブマシンガンを連射していた。弾倉の二十発を一秒あまりで撃ちきつたところで、カヴィルに肩を掴まれた。

「何だよ！」

ボスの言葉は相変わらず聞き取りづらかつたが、奴隸への流れ弾を懸念しているのだと、スプリングは理解した。

「まだ言つてんのか！ やっぱりおつむが湧いてるな！」

白煙の中でオレンジの閃光がほとばしり、カヴィルの手からスプリングが離れた。白けた視界の中で、スプリングが床に寝そべつて茹でたエビのように丸くなつていた。両手が押さえる股間から広がるどす黒い液体に、肉の欠片が沈んでいた。

ぎりぎりで保つていた正気が突き崩された。手にしていたショットガンを前に放り、カヴィルは腰を抜かした。発砲炎の上がつた辺りから、小さな足音が聞こえてくる。次は自分のだと涙を流した。

だが、そなはならなかつた。足音はカヴィルから遠ざかり、また嗚咽と呻きだけの世界が戻ってきた。

ブリジットが銃を高く構えて什器の合間を縫つてはいる、右手で男が口汚い罵りを連呼するのが聞こえた。什器を遮蔽に使いながら音の主を探ると、犯行グループで最も若いラスキンが壁をして強がつていた。撃つ用意もない拳銃を滅茶苦茶なスタンスで握り、自分の前の扇状の空間でぶんぶんやつている。

ブリジットは近くの棚から商品を掴み、息を殺してラスキンに忍び寄つた。相手は自分の声しか聞こえていないようで、まつたく気付かれずに真横を取れた。

ぬうと現れたホワイトブリムの影に気付き、ラスキンは銃口を向けようとした。遅いとばかりにブリジットの腕が狙いを逸らし、シグを握る右手を叩きつけて、ラスキンの銃をはたき落とした。床を滑る銃をよく見れば、撃鉄を起こしてさえいなかつた。

武器を失つたラスキンのでたらめなフックを最小限の動きでかわし、ブリジットは敵の懷に滑り込んだ。上から下まで、全てが人体の急所だつた。敵の真下から腕を突き上げて喉を掴むなり前方へ腰の球体運動で身体を持ち上げ、そのまま床に押し倒した。

背中を強打して肺の空氣を吐いたラスキンへの追い討ちに、ブリジットは馬乗りになつて動きを封じた。時と場所が違えば、素敵な光景だらう。直後にプレゼントまで控えているのだ。

ブリジットはラスキンの左手を床に押さえつけると、手の甲にメント用のペグを突き立てた。絶叫するラスキンの右手に、もう一本細長いペグが打ち込まれる。女の力でどこまで通用するか不安だつたが、床材がもろいおかげで、そこそこ深く刺さつてくれた。

「失礼ですが、おいくつでしょう？　かなりお若いように見受けられますか？」

「馬鹿」と「ママ」が帰つてきたので、ブリジットはラスキンが取り落としたC Z 75を拾い上げた。銃身を握ると、左手のペグを斜めから叩いた。今にも吐きそうな喘ぎが、ラスキンの喉を震わせた。

「十九、十九歳だ！」

「左様ですか」

手元も見ず、ブリジットはシグの引き鉄を絞つた。プレゼントのお返しを、ラスキンは己の生殖器でまかなかつた。

「お若い内に芽を摘むのが宜しいかと」

白目を剥いて泡を吹くラスキンを捨て置き、ブリジットは次の男を見繕つた。

出入口の近くを捜索していると、前方から拳銃が床を滑つてきた。最寄りの什器に身を隠すと、銃の持ち主と思しき男が語りかけてきた。

「頼む、殺さないでくれ！」

ブリジットは身を隠したまま、輪郭だけ見える男に照星を重ねた。「ええ、殺しませんとも。グロツク以外の武器も捨てていただければ」男の影が小さくなり、安物の折り畳みナイフがブリジットの脇を抜けていった。「これで全部だ！」

「信じられるとでも？」

「本当だ！」

ブリジットの勘が、嘘ではないと判断した。

「お姿をお見せになつていただけますか？ ゆっくりと、両手を上に」ぎこちない動きで、霧の奥からマツキニーが現れた。

「もう少しお近づきに」

マツキニーがさらに一步を踏み出しだが、ブリジットを恐れて歩幅が狭くなつていた。

「ほら、もう何も持つてない」

ブリジットの射貫く目が、マツキニーの全身を走査した。太つてはいるが、体幹はしつかり鍛えている。遠目で見た時よりも、だいぶ頑丈そうに思えた。具体的には、穴ふたつくらいは耐えられそうだと。

「お願ひだ、許してくれ」

「はい」

許しません。

右足の親指、左足の甲、股間の順に一発ずつ撃ち込み、マツキニーとの逢瀬は幕を下ろした。涙なしには語れぬ一節であつた。

残弾が半分ほどに減った弾倉を交換しつつ、ブリジットは再び会計カウンターへ向けて歩いていた。白煙が薄れつつあり、残る頭目のお仕置きに速足となる。

店舗の中央に戻ると、首筋にひりつく感覚が走った。リタがいない。さつきまでリタの尻があつた床を見下ろしていると、左手で衣擦れするのが聞こえ、こちらへ目掛けて丸い物体が飛んでくるのが見えた。

標的のクレーとほぼ同じ大きさだったので、反射的に照星を重ねて撃ち抜いてしまった。水気を含んだ破裂音と一緒に、何らかの液体がブリジットに降り注いだ。

グレープフルーツ……。

ブリジットは、果肉が張り付いて視界を妨げるマスクを剥ぎ取り、床に捨てた。化学兵器の類でなかつたのは運がいいとして、煙幕の晴れた先に不運が繰り広げられていた。首謀者カヴィルがリタを羽交い締めにしていた。手にした拳銃を、リタのこめかみに押し当てている。

最後まで完璧とはいいかないか。

主義への拘泥で友人を危険に晒したことで、ブリジットは悔悟の念に囚われた。

「くそ奴隸が好き勝手しやがって。おい、その銃を捨てろ！」

「お断りします」

にべもなく返されるとは夢にも思わなかつたカヴィルに、とんでもないところから追撃が掛けられた。

「ほら見なさいな。小物の遠吠えが通じる相手じゃないのに」「おや？」

久しく聞いた語調に、ブリジットの眉が上がる。

「奴隸は黙つてろ！」

「口を開けば奴隸つて……本当に語彙がないんだから」

……へえ。

銃を突きつけられてなお挑発的な態度を崩さぬ少女の正体を暴こうと、ブリジットは明るく呼び掛けた。

「ねえ、マーガレット」

「次にその名で呼んだら、あんたでもでもひっぱたくからね」

期待通りの返事だ。完璧を諦めるには、まだ早いかもしれない。ブリジットはいたずらっぽく笑い、リタが不敵な笑みで応じた。

あとはタイミングだけ。

女ふたりの間で交わされるやりとりなどつゆ知らず、カヴィルが喚いた。

「おい、この場を取り仕切つてるのは誰だ」

ブリジットは質問を無視して、銃口をカヴィルに向けたまま首をかしげた。

「ひよつとして、お漏らしなさいました？」

ジーンズから滴る黄色い液体を、無欠のメイドは見逃さなかつた。「半分不正解よ、ブリジット。ババもこいてるから」

カヴィルの頭が給湯器めいて血に沸き立ち、銃を握る手にいつそうの力がこもつた。そしてカヴィルにとつて本当の不運が訪れた。

上方からの衝撃に店舗全体が揺れ、バランスを崩したカヴィルの銃口が逸れた。

やつて！

リタは両脚を前方に投げ出すと、両手でカヴィルの腕を押さえ込み、全体重を掛けて噛みついた。

カヴィルが腕の痛みに悲鳴を上げていられたのは、一秒にも満たなかつた。

同じ場所に向けて、ブリジットが三発を放つた。正確には、陰茎と左右の睾丸の破壊に、乙女の愛と勇気と怒りをぶちかました。

ブリジットはリタに駆け寄り、リタは大事なもの全てを失いくずおれるカヴィルの顎に正拳を放つてから、ブリジットと抱き合つた。闘いの後に強まる友情である。

抱擁もそここに、ブリジットはリタから身を離した。

「名残惜しいけど、もう行かないと」

裏口を塞ぐバリケードを次々に取り除く背中が、涙声に肩越しの視

線を投げた。「前のポケット！」

リタがエプロンのポケットを探ると、電話番号を書いたメモが入っていた。裏返すと、かつて自分を奮い立たせたモットーが、作者不明のキスマーカで彩られていた。訳が分からなかつたが、どうでもよかつた。

「こんな目にまた遭うつもりなら、連絡してね」

ブリジットが抜けた裏口ドアが閉まるのと時を同じく、天井から垂れ下がるロープを伝つて、ふたりの特殊部隊員が降下してきた。

「あれ、全員やられてる？」

「ほら言つただろ。さつさと屋上をぶち抜かないからだ。しかしまあ……」

荒れ果てた店内を一瞥して、ダニエルは呟いた。

「冒す危険は、せめて自分で選びたいもんだね」

【エピローグ】

まつたくひどい一日だつた。あまりにひどくて、”ひどい”しか言葉が出てこないくらいひどかつた。車のハンドルを握りながら、そんな嘆きしか思い浮かばない自分の頭が一番ひどい。

法定速度を守りながら、家に着くまで今日の出来事を思い出そうとした。始めは脳が想起を拒否したもの、四回目で折れてくれた。

二〇一二年に控えるロンドン五輪に向けて、S A Sは会場近辺の警備状況の視察と、その事前打ち合わせに招集された。ミュンヘン五輪の再来を防ぐのは分かるが、スポーツに興味のない身としては、日帰りといえど気乗りしない出張だつた。前言撤回、ひどく気乗りしないひどい出張だつた。

ひどい日はもつとひどくなるものだ。数時間の会議と軽い視察で帰れるはずだつたのに、何を思ったか兄貴のヴェスが先方のお偉いさんと親睦を深めるとかで、ホテルのスイートを貸し切つての延長戦が始まつた。俺を巻き込んで！

どういう訳か携帯は没収されるし、スイートのくせにテレビの一台もなく、居心地の悪い煌びやかなレストランで、はげた背広組のつま

らない息子自慢を延々と聞かされる苦行を強いられた。何よりひどいのは、どんなにボトルを空けてもワインしか出でこない！

こんな念仏を、車を走らせてから実は既に十回やっている。ああ、十回だ。本格的にひどいことになつてゐるが、なんとか自宅ガレージに到着だ。偉いぞ、俺。ひどいぞ、兄ちゃん。

ひどい足取りで玄関の鍵を開くと、奥からふんわりとガーリックトーストの匂いが漂ってきた。そう、ここからはもうひどくない。

「お帰りなさいませ、旦那様」

車の音を聞きつけていたのだろう、ブリジットはショットグラスにウイスキーを用意して待つていた。朝と給仕服の色が違うのは、おめかしのつもりだろうか。こここのところ自惚れの強くなる自分が怖い。受け取つたグラスを一口やると、ナツツとキヤラメルの奥深い味わいが雑見なく胃へ沈んでいった。一日分の棘を洗い流す、清めの一杯。ブラックブツシユでなければこうはいかない。

グラスの残りを干すと、もう辛抱たまらずブリジットを抱き寄せた。

「まあ、ヒルバート様。おつらいことがあつたのですね？」

愛するメイドさんの胸の中で何度も頷き、あるべき場所に戻つた実感を噛みしめる。ブリジットの髪からかすかに漂う柑橘の匂いに、何もかもが些末に思えた。

……そういう、うちには牛乳石鹼しかないはずなんだが。